

自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を
育み 創り出す

新しい家庭科

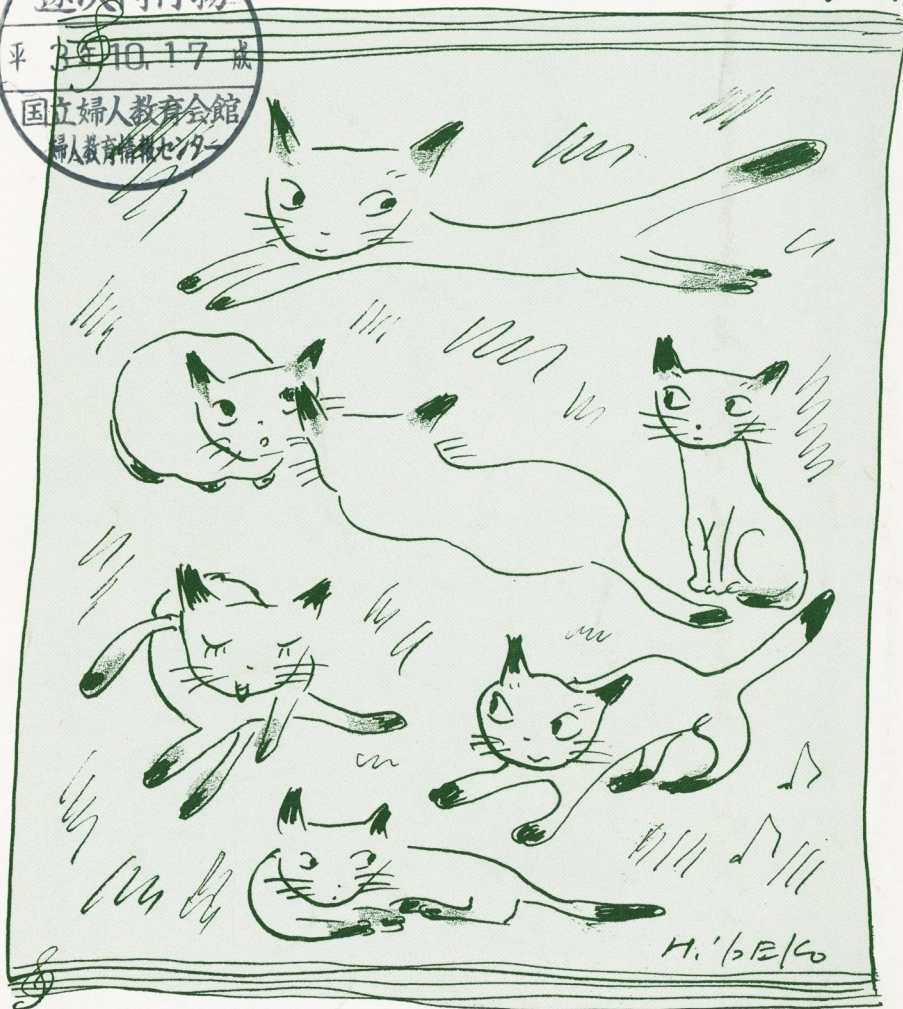
We

ウイ

逐次刊行物

平成 3年10月17日 創

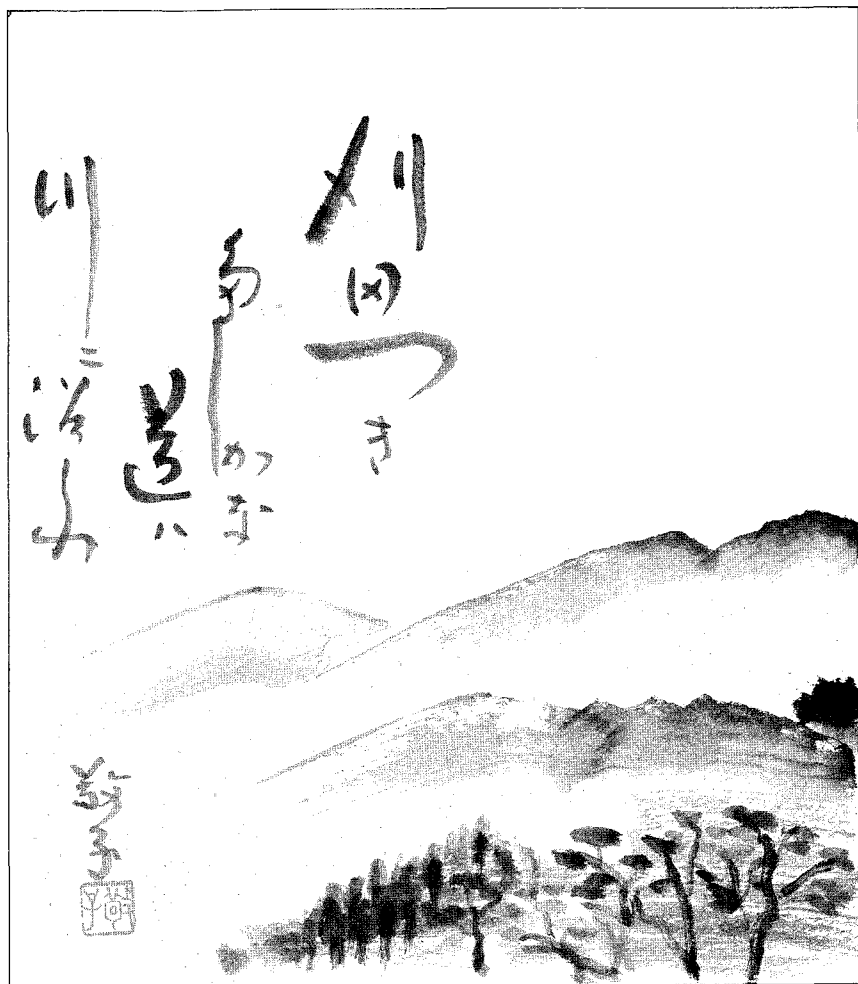
国立婦人教育会館
婦人教育情報センター



11

1991

特集 アジアの中の私たち



山

刈田尽き
たしかな道は
川に沿ふ

インタビュー 尹 健次さん

戦後民主主義の限界は

過去を切り捨てて出発したことです

(インタビュー・稲邑 恭子)

● 多数者に求める共生の条件

林 炳澤

10 2

● 多文化の同席する教室から

榎井 緑・阿久澤麻理子

14

● 解放教育と開発教育の相互の学び合いを

有光 健さんに聞く 稲邑恭子

20

● 外国人労働者問題は日本社会の鏡

旗手 明

24

発言 「在日日本人」の国際交流記 川名はつ子
留学生からの発言 児玉澄子

32 29

〈投稿〉

アジアを、歴史を「直視する」ということ

中村英之

34

■ 学習の主人公たち ■

ADRA国際青年協力隊の大学生たち

36

家しい家庭科を創るために

● 小学校

日本国憲法を学ぶ

鈴木まき子

42

● 高等学校

イワシとエビと日本人

柴田栄子

47

「衣」の歴史を考える

芦谷 薫

53

荒野のバラ 「鎮魂の海峡」に架ける虹

田中裕一

60

家族と家庭科

現行指導要領における老人問題と

男女共用教科書 酒井はるみ

64

男性学への契機／魔男の宅急便

ぼくが男語を話せるわけ

諸橋泰樹

66

精田の夢 なんにもない なぁんにもない

武田秀夫

68

あかさたな

さあお食べ、さあお飲め 福田 緑・加藤由美子

70

現代衣生活考 「何のために入浴するの？」むらき数子

72

オホーツクの潮風荒く……

いいの、先生、C子がとういんだから 江口凡太郎

75

波 ひと夏の経験

半田たつ子

76

○ひと むらき数子さん

52

・私のすすめの一冊 28 ・イキイキぐるうぶ 41
・今月の読書から 78 ・わたくしからあなたに 80
・泉 82 ・十字路 84 ・アンテナ 86 ・編集後記 88

表紙／長野ヒデ子 季節のうた／仙田数子
特集イラスト／降矢奈々

戦後民主主義の限界は

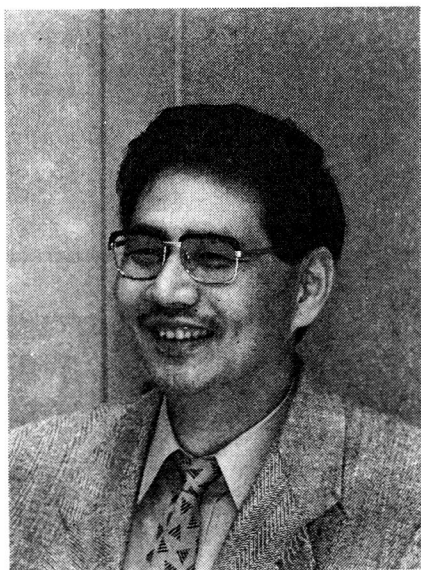
過去を切り捨てて出発したことです

・インタビューー 稲 邑 恭 子

在日朝鮮人二世であるご自分の体験を踏まえながら、「在日」の生き方を模索、朝鮮と日本の近・現代史、思想、教育に関心を持ち、エスニシティ理論やマイノリティのアイデンティティの問題にも取り組んでいらっしゃる尹健次さん。

気取らない関西弁の変化球のユーモアについつい引きこまれていると、いきなりシャープな直球が飛んで来てドキッとしたり、こういう先生とぶつかりあって鍛えられる機会を持てる学生はいいなあ、と思う。

ご自身も二人の高校生のお子さんを持つ尹さんの書かれた『きみたちと朝鮮』は、高校生から大人まで、ぜひ読んでいただきたい本。



■プロフィール

1944年、京都生まれ。京都大学卒業後、東京大学大学院博士課程終了。教育学博士。現在神奈川大学教授。近代日朝関係史・思想史専攻。
〈著書〉『孤絶の歴史意識』『異質との共存』（岩波書店）『朝鮮近代教育の思想と運動』（東京大学出版会）『きみたちと朝鮮』（岩波ジュニア新書）など。

* 戦後民主主義——過去を切り捨てての出発

——『異質との共存』のなかで、アメリカに負けたという被害者意識から出発した日本の戦後思想が、西欧渡来の普遍主義、啓蒙主義に依拠するがゆえに、一面では、自らのアジアの諸民族への加害性を曖昧にしてきた、とお書きになっています。らっしゃるのですが、そのあたりをお話しいただけますか。

尹 日本民主主義が本格的に導入されたのはGHQの占領によってでしたが、それは、日本の近代史にとって画期的なことでした。それまでは、言論の自由も個人の自我の確立もなく、国家や天皇に吸収され同一化されていた時代が長く続いていましたから、たとえ外国軍隊の占領というかたちによってであつても、そのことは非常に大きな意味を持っていました。

その民主主義の理念の具体化が、日本国憲法を中心とする法体系ということになりますが、そこで一番大きな問題は、戦後の日本は民主化されたと評価されているけれども、それは事実の一つの側面しか言っていないということです。

人間は、過去の歴史を抜きにして生きていくことは出来ません。それを、ある時点でいきなりすばっと切って新しい生活を始めようとしても、逆にその生活自体がおかしくなります。やはり過去を踏まえてやらないとだめなんですね。そういう意味で言うと、戦後の日本は過去を切りすぎた。過去の教訓を生かすことを欠落させたまま来てしまったといえます。

過去のことを考えるということは、アジアのこと、アジアに対する侵略の歴史を考えるとということです。戦後の日本の歴史をみると、第二次大戦後の米ソ冷戦体制の中で、ある意味で日本は、アジアを置き去りにすることができました。とくに北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）や中国が東側陣営に入ったことで、そのことを考えなくてすみ、うまく逃げられました。今から振り返ると、それは、経済成長にとってはプラスになったかもしれないが、過去を踏まえて生きるという意味ではマイナスだったと思います。

* 日本国憲法の光と影

尹 戦後民主主義といわれますが、本当にその名に値したものは、ほんの短い期間にすぎなかった。それはもう、在日朝鮮人にたいする扱いをみたら、すぐわかります。⁴⁷48年の時点で急激に右旋回して、米ソ冷戦構造のなかで、自由主義陣営の一員として組み込まれていきます。戦後民主主義はカッコつき、理想に過ぎなかったのです。

日本国憲法の基本的理念というと、平和主義、あるいは基本的人権の実現、戦争の放棄というようなことですね。これらは皆、プラスイメージですが、先ほどお話しましたように、これらはまた、逆に取れるわけです。

すなわち、裏を返せば、植民地支配の忘却、戦争責任の放棄、戦後責任の放棄、それから一國平和主義（内むきの平和）、

アジアの切捨て、米への追従、というようなマイナスイメージが付随していた。

日本人は日本国憲法のプラスイメージだけ教えられ、それだけで考え、行動してきて、それが、少なくとも70年ぐらいまでは続いた。それ以降は少し反省が出てきたようで、昭和天皇が亡くなって、今年などは、TVなどでも随分戦争責任をめぐる番組などがみられるようになりましたが、それでも、戦争が終わって五十年近くたって、初めての話です。

戦後民主主義の限界は、自分のこと、内むきのことしか考えなかったということですね。自由、平等、博愛などの啓蒙主義、普遍主義は、誰でも簡単に言えることなのですが、過去を踏まえた生きかたをしようとすると、そうはすっきりとこない。過去を踏まえない限り、関係のあった人々や国々は不信感を持ちます。

戦後日本が欧米をモデルにしてきたのは、その方が楽だからです。アジアの国々の意見をきくと、不信感ばかりですからね。当然、戦後教育で形成された日本人というのは、歴史抜きということになります。「日本人ほど自分の国の歴史を知らない国民はいない」と、よく言われますが、非常に端的な表現です。他のアジアの国の人たちのほうが日本の歴史を知っているなんておかしいことでしょう。その意味で、肝心要のことを抜いてきたのが、戦後民主主義であり、戦後の教

育だったと思うんです。

* 天皇制

尹 戦前は、絶対主義天皇制で、天皇が主権を持っていたけれど、戦後も基本的にはあまり変わっていないんですね。例えば、日本国憲法の第一条に天皇は日本国の象徴とある。憲法の一番大事な第一条の主語が天皇になっているのであって、その意味で戦前と変わらない。けれども、そのことを意識しないですむように、あるいは、意識できないようにされているんです。

戦前は天皇のことを徹底的に教え込まれました。歴代天皇の名前を覚えさせられ、在位が八十、九十、百年の天皇がいることを疑問に思った子供が質問すると、「非国民」と怒鳴られました。

逆に、戦後は全く教えない。教えられない構造になっているんです。非科学的だし、都合の悪いことがいっぱい出て来る。その一番明白な証拠が教科書裁判です。判決文を読んでもみると、文部省が削除したのは、天皇制に関する部分、それがつまり触れてほしくない部分なのです。戦後民主主義はそういう意味で、負の部分の切捨て、自由、平等、博愛などの響きのよいことを前面に出してきた時代です。

二年前ですか、盧泰愚大統領が来日して、天皇が謝罪するかどうかで話題になりましたね。日本国憲法では天皇は政治

的権能を有しない、だから謝罪も政治的行為だからやってはいけないというのが、おおかたのマスコミや学者の見解でしたが、あれはおかしい。

天皇は、よかれあしかれ、現実的には元首としての役割を果たしてきたのです。外国から大使がくると信任状を受ける、外国にでかければ国賓になる、というように、実質的には元首なのです。盧泰愚大統領が来たときも、現実はそのなっているのに、責任を取って謝罪することをしなかった。

日本支配下の朝鮮人は誰の支配を受けたかという点、実質的には朝鮮総督なのですが、それを任命したのは天皇です。ですから、朝鮮総督が既にいないまま、責任を取るのは天皇なのです。事実、朝鮮人は日本の憲法と関係ありません。大日本帝国憲法は、朝鮮、台湾その他の植民地には施行されませんでした。朝鮮人は、天皇が天皇の臣民であると宣言することによって初めて、日本臣民になったわけです。戦後も日本国憲法の適用を受けていません。ですから、憲法の規定を盾に朝鮮人に対する謝罪を拒否するのはおかしいのです。

* 在日朝鮮人の問題は日本人の問題

尹 皇民化政策、創氏改名、従軍慰安婦、特攻隊など、朝鮮人は日本の負け戦が進むにつれ、皇国臣民といわれて、犠牲を強いられました。それが、敗戦するやいなや、日本政府は国体維持のために朝鮮人を切捨てにかかります。

45年十二月でしたか、衆議院議員選挙法の改正がありました。女性に参政権が与えられるなど、民主的改革の代表とみられた措置なのですが、その付則で、敗戦直前、戦争動員の反対給付として朝鮮人に与えられていた参政権を、無くしてしまつたのです。その間一度も選挙が無いままに形だけ残つていたものを、日本(内地)の戸籍に入っていない人たちの参政権を一時停止すると言う形で取り上げてしまった。ほんとうに民主主義なら、旧植民地出身者に選挙権を与えて当たり前なのですが、そうはしない。そういうことをくりかえしていくのですが、一番最大のものは日本国憲法の構造でしょう。

日本国憲法は47年五月三日に施行されるのですが、前日、天皇の最後の勅令として、外国人登録令を出します。即ち、旧植民地出身者を外国人とみなし、外国人登録をせよという命令を出しておいて、翌日の憲法では、「日本国民」という言葉が多用します。他の所では「何人も」などとやっておきながら、肝心なところは「日本国民」を使う。その典型的なのが、第十一条の「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない」です。

日本国憲法で人権が大きな柱になっていると言うのは、あくまで、「日本国民」だけを対象とした話なんです。これが戦後民主主義の実態です。日本人だけの民主主義なのに、そのことを教えられていないし、気づきもしないのです。

戦後補償の問題にしても、年金も恩給も日本国籍のないものは駄目、という理屈になります。きわめて、自民族中心主義です。日本国憲法の中に成文化されているわけではないけれど、実際の運用はそうなっています。

日本の特徴は、悪いことをするときはいいたい勅令とか、通達、指導要領などでやることです。教員採用の差別も、日の丸、君が代の問題もそうです。憲法第十条に、「日本国民たる要件は、法律でこれを定める」と書いてあるのに、サンフランシスコ講和条約発効と共に、法務府民事局長通達で旧植民地出身者の国籍を剝奪しました。しかも、そのとき、誰もおかしいと言わなかったのです。

在日朝鮮人の問題は非常に重要な問題です。単なる差別、抑圧の問題ではなく、日本人自身の問題なのです。戦後民主主義は先ほど言いましたように、プラスイメージを前面に出してきましたから、戦争の事をもちだす場合でも、「ノーモアヒロシマ」に代表されるような「被害者」の立場に立つてきました。ところが、日本社会には過去の矛盾を全部背負った存在がいくつあった、その代表的なのが在日朝鮮人です。在日朝鮮人の問題を、同情とか、人権の問題とかいう観点だけでとらえてはいけません。日本の歴史と社会の矛盾を集約して表現している集団、日本社会全体を照射している存在としてみるのが大事なのです。

* 外圧によって決められる外交政治

尹 日本の政府、民衆、全部含めての問題だと思いますが、日本政府はこれまで、自分の問題を主體的に考えてなにかやったことはあまりありません。明治以降、外交政治は常に外圧によって決められてきました。今でもそうです。理念は壮大で、きれいすぎて、中身はない。一番典型的な例が、'81年の難民条約の批准です。

ベトナムのボートピープルを形だけでも救済しないと、日本が貿易立国として袋だたきにあうから、条約を批准したのです。そこで、彼らに内外人平等の原則を適用していなければならぬのに、いままで、在日朝鮮人にすら、そうした原則を適用したことがない。国籍条項で区別・差別を当たり前のこととしてきたのです。そこで、仕方なく、在日に対する施策をほんの少し改める。公営住宅の入居権を認めるとか、国民金融公庫の融資を認めるとか、そういうことを、外圧によって初めてやったのです。

米ソ冷戦体制が崩れて、経済成長ばかりやっていればよかった日本は、そうした意味での優位な立場は通用しなくなってくるのですから、これからは、自分で考えてやって行く必要があります。本当に世界に貢献したいと思うなら、戦後処理をまづきちんとやるべきです。そこで初めて自由に物を言える立場になる。そうしないと、いつまでたっても自信が持

てず、アジアからなにかひとこといわれるとおろおろするばかりです。

* 民族意識とアイデンティティ

尹 日本人には一般に自民族中心主義というのは意識されていませんが、それは確実に、戦後日本において貫徹されています。戦後は、「日本民族」という言葉は誰も使わない。その代わり、「日本人」という言葉を使っています。「日本民族」と「日本人」はどう違うかというと、「日本民族」というと、侵略や戦争遂行と密着した言葉としてイメージされます。「日本人」という言葉にはそれが無い、過去の忌わしいことから切り放されているという暗黙の了解というか、自己納得の仕方があるんだと思うんです。だから、使う。でも、そうやって過去の歴史を避けて通ろうとして使っている「日本人」も、当然、民族集団を言い表す言葉です。

日本人に民族意識があっても、別におかしくないんです。日本人が、「日本人」という概念を本当に自分のものにするには、もっと原初的な意味での、主義とか制度以前の、人間の本性という意味での「民族」を取り戻さなくてはならないのではないか。それをしようと思うと、当然、過去の侵略の歴史を回路として通過しなければならぬのですが、そのことを避けている限り、いつまでも自信が持てないし、アイデンティティの復活ができないのではないかと思うんです。

戦後日本は、ずっとその問題を避けてきました。教育において最も避けてきたといえます。受験勉強はその最たるものです。教えられた通り書けばいいという教育をうけているから、大学生でも自分の意見は一言も言えない。会社にはいると上司の言いなりになる。そういう意味では、戦前の軍国主義と戦後の会社主義とは似ています。個人の自我がきわめて弱い。過去をふまえて自分の意見なり主張をもつ、自我の確立をはかるというのは、これから日本人が獲得していくべきアイデンティティの第一の方向性ということになるんじゃないかと思います。

'90年代になって、日本の閉鎖性も随分反省されるようになったのですが、それも、現在日本が好況期にあるからであって、いったん経済が崩れだすとどうかな、と思いますね。若い人たちは学校教育で何も教えられていないし、自分本意の享楽主義。自分の位置づけが弱いだけに、自分の生活が怪しくなるとファシズムに走るのが早いのではと心配です。それはある意味では、自分に自信を持って闘ったことがないということがありますね。国家によって命令されてやったことはあっても、自ら闘ったことはない。

ついでに言いますが、共に生きるということは、ある意味では危険な言葉なんです。共に生きるというのは共に闘うということ、闘うことによって初めてそうなるのであって、なに

もしないで共にいることではない。そういう意味では、日本の市民運動はすいぶん発展してきているようであつても、まだまだ弱いのですね。

* エスニシティとは何か

——さきほどのアイデンティティの問題に関連してですが、花崎皋平さんなどは、民衆の側に立とうとする日本人が「国家」ではないかなる帰属対象を発見できるのか、ということとを問題にし、エスニシティの自覚という方向性を示唆しているらしいのですが、最近よくいわれるようになったエスニシティとはどういうものなのか、うかがいたいのですが。

尹 近代国民国家というのは、国民を作り上げなければならなかった。フランスを例にとっても、フランス革命当時、フランス語を話せない人が半分くらいいました。その人たちが、差別されるから必死になってフランス語を覚える。国民国家の中で生きて行くためにはフランス国民にならなければということ、同化教育を受けるし、実際に同化していく。日本でいえば、アイヌ、沖縄がそうでした。日本でも、今では、「国語」と当然の事のように言っていますが、明治の最初には、日本全国にはたくさんの言葉があつて、何が日本語かというと必ずしも明確ではない状態でした。ついで言えは、自分の国の言葉を「国語」と言うのは日本人くらいなものです。それをおかしいと思わないところに異常さがありま

す。イギリスでは、英語は「イングリッシュ」であつて、「国語」とは言いません。

60年代以降、ひとつの国民国家の中の少数民族の人たちが自分たちの人間としての尊厳が犯されていることを主張し始めました。そのときの意識のありようを「エスニシティ」とよびました。ですからエスニシティというのは、あくまでマイノリティであると同時に被抑圧者であり、歴史の中で、また国民国家の制度の中で、差別・抑圧されてきた立場の人が声をあげるときに使うものです。

マジョリティとしての日本人は、どちらかというと抑圧・支配する側で、それである限りいつまでたつても変わりません。しかし、そのことを自覚し、被抑圧者・少数者・変革者の立場に立つことができれば、日本人でも初めて、エスニシティという言葉に近づくことができるのではないか。そして、日本国内及び世界のマイノリティと連帯でき、世界の変革に立ち上がれると思うのです。日本人がそういう帰属意識のもちかたができれば、それは日本人にとって新しいアイデンティティの獲得といえるでしょう。自分はこれで生きていくんだ、自分はこうしないと生きていけない、と。そうした日本人のそれぞれの一步が運動になっていくと日本は変わっていきま

す。それを現実に潰しているのが学校教育と進学戦争です。日本人であれ、朝鮮人であれ、アメリカ人であれ、それぞ

れのひとたちが、自分を変革と進歩の最前線にいる者として自覚し位置づけることができれば、世の中ずいぶん変わっていくと思うんです。それを他人事のように「私は関係ない」というふうにやっているのが大勢ですから。

それともうひとつ、日本の中で自分たちがやっていることはなんでもない普通のことと思っても、実は非常に日本的なことだということを知らなければなりません。日本では、民族教育というと、在日朝鮮人の教育のことだと思っているようですが、日本の教育自体、徹底的な民族教育をやっているんです。やりながら、そのことを少しも自覚できていない。自分たちが民族教育をやっているんだから、他民族の民族教育も認めなければならぬと考えるようにならなければ、とても国際化とは言えません。

日本の国家が、その本来の悪を最小限にすることのできる最低限の妥協的形態は、自国内のマイノリティの文化、言語を尊重し、単一民族国家の幻想を克服して、事実としての多民族国家への転換をはかることだと思います。

* 歴史を教えるということ

——「日本の歴史教育は、日本史・世界史を問わず日本の侵略史から始めるべき」ということを提起していらいっしやることは、本当にそうだと思います。しかし、実際に教えるとき、例えば熱心な先生が、受け止めるのが苦しいような事実

ばかりを、これでもか、これでもか、という具合に教えるとしたら、伝えられるほうが、もう聞きたくないというふうになつてしまわないか、少し気がかりなのですか。

尹 日本で歴史というと、どちらかというと、政治史、外交史のことですね。けれども、人間というのは、主義や制度ができる前に民族があつて、民族意識がある。そして、それらを大きく支えているのが、皮膚の色や血のつながりなどとも関連する文化です。文化をぬきにして、歴史を教えることはできません。

朝鮮の侵略史を教えると暗くなりますが、朝鮮民族はものすごく明るいです。何処へ行っても歌を歌うし、踊りを踊ります。こんな楽天的な民族はない。そういう文化的な要素をとり入れて歴史を教えないで、政治史や侵略史ばかり教えていると、まずいですね。例えば、歴史を教えているときに、ぼんと、朝鮮の歌をいれてみる。そうすると、あれ違うな、と子どもが感じる。それができないとしたら、それは日本の歴史教育の薄っぺらさではないでしょうか。

もう一つ大事なことは、常に日本が悪くて朝鮮が正しい、というような教え方をしてはだめです。人間は皆、いい人もいれば、悪い人もいます。どちらかが常に正しくて、もう一方は悪、という教え方はしないほうがいいと思います。

多数者に求める共生の条件

林 炳 澤



「共生」という言葉が、あたかも時代のトレンドイのように飛びかっている。かねてより在日韓国・朝鮮人と日本人との共生を訴えてきた私にとっては、隔世の感があるが、同時に眉に唾をつけたくなるような皮相な感も禁じえない。それは内実の伴わない「国際化」同様、流行としての「時代のキーワード探し」の臭いを感じるからだ。今こそ、共生という事柄の整理と具体化、つまり、誰と誰が共生しようというのか、共生のためにいかなる条件が必要なのかを、私たちは明らかにしていかなければならないのではないだろうか。

ここでは、日本社会の少数者である在日韓国・朝鮮人から、多数者である日本人と共生していくための条件をあげてみたい。それは、在日韓国・朝鮮人が日本社会で正当な処遇を受けられるかどうかということであるが、それには少数者の生存を脅かす制度的差別の撤廃と、少数者が既に被っている不

当性を補償する援助という二つの視点が必要である。この視点に従って、具体的条件を述べてみたい（これらは、項目の整理を含めて今後の議論が必要であるが、在日韓国・朝鮮人の大方の合意は得られると思う）。

● 永住在留権（資格）の確立

在日韓国・朝鮮人は、これまで、（韓国籍か朝鮮籍か、親か子か孫か、いつからの在日か、在留期間が限定されているか永住かによって）六種類もの複雑な在留資格で管理されてきた。従って、一家庭の中でも在留資格がバラバラというケースは珍しくなく、複雑な在留状態は在日の人々の利害を異にさせ、団結を阻害してきた。これは日本政府による在日の人々への分断・支配政策であった。また、これらに在留資格には、永住資格ですら、強制退去（国外追放）がつけ加えられていることは、既に生活基盤を日本におく人々にとって実に非道な扱い

であり、このことは、侵略の歴史の証人である人々を速やかに抹消したいという日本の意向の現れでもあった。これは日本政府が在日の人々に行ってきた同化・追放政策（日本社会に埋没するか日本から出ていくか）であり、今年一月、韓・日両政府の合意によって、部分的に永住権対象者の拡大と強制退去適用の緩和が行われたが、とても抜本的なものとはいえない。

在日韓国・朝鮮人はひとしく日本の植民地支配が生んだ結果であるから、その在留資格は、一律に、安定した（強制退去のない）永住権でなければならない。

●民族教育への保証と援助

民族教育は、民族としての自覚や主体性を構築するための最も重要な手段であるが、日本政府は在日韓国・朝鮮人の民族教育を一貫して敵視し、時には弾圧を加えてきた。それは、民族教育が在日の人々の民族性を目覚めさせ、日本社会への同化を阻み、日本政府の意図する在日の存在の抹消を妨げることになっていたからである。そのため日本政府は、民族教育に対し、朝鮮大学校の認可阻止、外国人学校法案の提出など、さまざまな抑圧を行ってきた。また、民族学校は各種学校扱いなので、進学・就職のための学業（卒業）資格や公的な経済支援の乏しさで、その存立が困難な状況に追いこまれている。ちなみに、一九九〇年末現在、朝鮮高校卒業を受験資格と認める大学は、全国五〇六校中、公・私立大学一一

二校にすぎない、一方、海外の日本人学校から現地の上級学校へ入学資格を認めている国は、五七カ国中三二カ国と、過半数に達している。

民族学校の各種学校扱いを撤廃し（日本の学校卒業資格と同等にする）、財政援助を行うと共に、在日の生徒がいる学校に民族学級を設置するなど、民族教育を援助すべきである。

●制度的差別的撤廃

在日韓国・朝鮮人は納税義務を果たしてきたにもかかわらず、長い間、国籍要件（日本国籍がない）をもつてさまざまな社会福祉や制度、そして社会参加から排除されてきた。これは日本政府の排外政策であり、日本民衆の差別意識がそれを支えてきたのである。最近になって徐々に改善されてきたものの、依然として重要な問題が残されている。

生活保護における教育援助からの排除、国民年金からの高齢者（在日の一世・二世）の排除、地方公務員（事務職）や教職員（教諭）採用からの排除などを撤廃しなければならない。

●戦争（および戦後）責任の清算

日本は、戦後四十余年の現在にいたっても、朝鮮への植民地支配について十分な清算を行っていない。それが韓国・朝鮮人と日本人との間のわだかまりとなって、両民衆の和解を妨げている。天皇や首相が「謝罪」しても、具体的な証明が伴わない限り、単に韓・日両政府のセレモニーにすぎないであら

う。

日本は強制連行（約百五十万人）の死亡者への慰霊・遺骨の送還と死傷者・家族への補償、従軍慰安婦（約数十万人）とその家族への補償、戦争被災者（軍人・軍属・戦犯約三十三万人）への軍人恩給・遺族援護の適用、原爆被災者（広島・長崎で約四万人が死亡、約二万人が帰国）への救済・補償と家族への補償、サハリン残留韓国・朝鮮人（約五万人を強制連行、現在約三万五千人在住）の帰国希望者への援護と補償を行わなければならない。また米国やカナダが日系人に、ドイツがユダヤ人に対して行ったように、日本も在日韓国・朝鮮人に公式謝罪と償いをして良いのではなからうか。

●人権擁護の確立

在日韓国・朝鮮人に対する人権侵害は日常的に存在している。それは日本政府が在日の人々を一貫して治安対象とし、監視・抑圧してきたからである。また日本民衆にも差別意識が根強く存在し、在日の人々の人権に無関心だったからである。最近では指紋押捺制度が大きな社会問題となり、八七年大韓航空機事件、八九年バチンコ疑惑では、全く無関係な在日朝鮮人の子供たちが全国的に迫害を受けるなど、事あるごとに人権侵害事件が起きている。

日本政府は外国人登録法・制度を根本的に改正（外国人登録証明書の常時携帯の廃止、罰則の軽減、未成年者の登録廃

止など）し、在日民族運動に対する不当な監視とスパイの強要をやめ、特定の民族組織への破壊活動防止法の適用を撤廃しなければならぬ。また、公的機関において、在日の人々への理解と人権擁護を高めるための啓発活動を行うべきである。

●経済的優遇制度の設置

在日韓国・朝鮮人の処遇の改善は単に制度的差別の撤廃、諸制度の平等な適用だけでは果たせない。在日の人々が被差別少数者として、長期間被ってきたハンディキャップを補てんする措置が必要である。

例えば、米国では「積極立法」という法律を設け、企業が被差別少数者を一定の割合で雇用すべきことを定めている。このように、日本でも在日の人々に対する雇用促進や特別融資を適用する法律・制度が必要であらう。

●多数者からの共生の条件

共生とは、当然にも、少数者側が要求するだけでは成立しない。多数者側による、少数者側の状況や共生の意義への理解、そして共生の実現過程と内容に対する主体的整理が必要である。つまり多数者からの共生の条件もまた求められているのである。少数者と多数者の歴史的経緯、社会的力関係からみて、少数者からの共生の条件が「多数者に求める」ものであるとすれば、多数者からのそれは少数者をいかに処遇すべきか、「多数者が果たすべき」ものであるはずだ。そして

それは、これまで述べてきたような少数者から提起された共生の条件とかなり重なることになるのであろう。

私は多数者による共生の条件を整理する立場にはないが、一点だけ言及したいと思う。少数者はその生存すら脅かされてきたわけだから共生は切実なものであり、その条件も最少限のものにとどまらざるをえなかった。しかし、多数者による共生の条件は、もっと積極的で、さらには時代を先取りするものであつて欲しい。

例えば、地方参政権の問題がそうである。地方参政権の要求をめぐっては、日本社会の住民としての構成員意識と、外国人としての内政不干渉意識の対立、政治的必要性と切実度のギャップ、日本社会からの反発への懸念などで、在日社会の合意はまだ形成されていない。また外国人の地方参政権については、参政権の行使は現代市民(内外人を問わず)の必須の権利であり、既に北欧諸国では実現されさらに拡大しつつあることなど、時代の趨勢であるが、日本ではいまだ制度的差別の壁は厚く、参政権はその頂点にあるといつてよいだろう。このような状況で、参政権の獲得は、まず前述の制度的諸差別が解消されていく過程で日本社会の意識が啓蒙され、あわせて在日社会の合意を形成してアップビルしていくべきである。少なくとも現段階では、在日の側からそれを、共生への象徴的な中心的な課題とするのは時期尚早であらう。

このように、基本的には正当な要求であっても、少数者から共生の条件として提起する状況に至っていない場合、多数者からの共生の条件が果たすべき役割があるのではないか。多数者は主体的に積極的に、そのような事柄を、自分たちの共生の条件として取り上げ、カバーしてもらいたい。

いま多数者は、共生の条件と共生の実現へのプログラムを明らかにすることが問われているのではないか。

(注1) 日本人の生活保護世帯で、子供が義務教育を受けている場合、教育扶助という援助が受けられる。しかし、在日の人々の生活保護世帯で子供が民族学校に通っている場合、教育扶助は受けられない。

(注2) 在日の人々は、'82年までは国民年金から除外されていた。'82年になって、35歳以下の人は加入できるようになった(35歳以上の人は加入できない。それは「60歳まで25年間の掛金期間」という要件をみたすことができないからというのである)。現在は年齢制限がないが、「'82年時点で35歳以上の人」はやはり前述の理由(掛金期間が足りない)で国民年金としての支給にならない。日本が国民皆保険制度になった時や沖縄返還の時にも、同じように掛金期間の短い人がいたわけだが、この時は日本政府が救済措置をとっている。(注3) 日本政府が在日の人々を治安対象としているために、警察の外事課、公安調査庁、自衛隊の情報機関は、在日の民族団体の動静把握に努めている。そこで、金品や酒席の提供、あるいは外国人登録法違反(最も多いのが外国人登録証明書の不携帯)や軽微な法律違反のモミ消しを条件に、民族団体内部の情報売り渡すよう策動してきた。

(イム ピョンテク・在日韓国青年同盟北海道地本委員長)

多文化の同席する教室から

榎井 縁・阿久澤麻理子



ここ数年、いや特にこの数カ月、「多民族共生」という言葉を頻繁に耳にするようになった。そしてそれと時期を同じくして、私たちの所にも、多くの「外国人」や地域で隣人として暮らしている日本人から、様々な相談が寄せられている。その中でも特に顕著なのが、子供、教育などに関する相談の増加である。これは、日本に暮らす「外国人」の滞在の長期化、あるいは生活の基盤が日本に根付くことを本当に考えなければならぬ時期の到来を示唆しているように思えない。

もちろん一方で職場で同僚の叫んだ「危い」の一言がわからないために労災にあったり、健康保険証をもたない外国人労働者が病氣治療を思うように受けられないといった緊急性の高い問題に対しても、未だ十分に対応できているわけではない。

ないのだが、そちらも未解決のまま時がたち、外国人の日本滞在中も長期化するにつれて子供が生まれ、就学する時期が訪れ、それにとまらぬ問題も深刻化している。教育の場面でいまい何が起き、これからどう取り組んで行かなければならないか、いま私たちなりに考えていることを伝えたいと思う。

しかし、「外国人」と一言でいっても、いったいどういった人々が暮らしているのだろうか。

神奈川県について言うと、在日韓国・朝鮮人、中国人が歴史的背景からもっとも長く、その後、日中国交回復以降の中国帰国者、78年以降のインドシナ定住難民、と続く。そして、最近では、アジアからの「花嫁」たち、日系人労働者、そして、いわゆる不法就労の外国人労働者たちがここ数年で急増している。留学生、就学生、研修生も増加している。このよ

うに、滞在の長さにも非常に幅があり、起きている問題も、滞在の長さによって異なるのは当然であろう。

●来日後滞在期間の短い段階

日本での滞在期間が短い場合を見てみよう。神奈川県では、各地の工業団地などで、自動車産業を中心に、日系人労働者^{注2}が急増しているが、合法に就労できる長期滞在ビザが取得できるため、家族で来日することも多い。すると、子供たちはいきなり地域の小・中学校へ転入することになるが、もっとも深刻なのは言葉の問題である。地域のアパートなどにかたまつて住んでいる場合は、何人もがいつべんに転入してくることもある。教師と「外国人」児童、あるいは児童の親とのコミュニケーションといった基本的な関係づくりが困難となる。こういった状況に対して、県・市町村では、外国人児童の多い地域の学校に対して、より多くの正規教員や補助教員を配置するための予算をとっている。この補助教員と言うのは、その国の言葉ができる日本人か、または日本語と日本の生活に精通している^{注3}同国人が常勤で採用され、転入してきた子供たちに母語で対応し、日本語や教科の補習を行ったり、プリントの翻訳などをして、日本語のできない親と学校との仲立ちをする。いくつかの学校を隔日毎に回っている場合も多い。日本に来たばかりの子供たちは、やはり日本語を学ぶことに

まず指導の力点が置かれている。しかし、子供向けの教材というのとはなかなか無く、この点はこの先生方も苦労されているようである。また生活習慣の違いが、言葉の問題も手伝ってなかなか理解できない。

藤沢市の、あるポルトガル語の補助教員は、次のように語っている。

「子供たちには日本の学校でのやり方が理解できないことも多くあります。例えば、通学路。家への最短経路を通って帰る子供に、決められた通学路を通りなさい、と言っても、考え方の違いから、なぜそうしなくてはならないのか、なかなかわかりません。他の道を通って事故があったら責任が持てないといっても、危いのなら自分で注意すればいい、という考え方なのです。これは善悪の基準では説明のつかないことで、なかなか伝わりにくいことです」

子供の目には、日本の生活は「禁止だらけ」と映るらしく、ストレスから心因性の病気になる例も報告されている。

●長期在(定)住の場合

さて、滞在期間が長くなったり、日本で生まれ育った世代が増えると、日本語に不自由のない子の方が多くなる。逆に母語を忘れ、親とのコミュニケーションすら難しくなったり、親の言葉、文化をバカにする、といったことも起きている。

特に、来日後十年近くが経過しているインドシナ定住者の家庭では、これは深刻な問題である。しかし、母語教育、あるいは民族的アイデンティティを保持するための教育が実現されるところまでは、残念ながらまだ至っていない。外国人児童に対する現在の対応は、あくまで日本語に不自由しなくなるまでの過渡的な対策にすぎない。しかし、日本人児童とまったく同じ教育を受けても、彼らは将来外国人であることを理由に、就職その他で様々な障壁にぶつかることも多いであろう。その時、彼らのアイデンティティはどこに求められるのであろうか。

もっとも、学校によっては、意識的に独自に、母語や母国の文化に触れるための授業を組んでいるところもある。大和市立のS小学校では、抜取り授業の形で月一回、国別に国際学級と呼ばれる授業が持たれているが、ちょうど訪問させていただいた日、学級の担当教諭とカンボジア人補助教員が、簡単な母語や母国の歌を取り入れた授業を行っていた。担当教諭は次のように言う。「バイリンガル教育というのは、もちろんアイデンティティの問題にとっても重要ですが、単にそれだけではなく、子供たちがきちんと二国語を使えるようになれば、彼らの将来の可能性も広がるはずです。また、母語能力の伸びと日本語の上達には相関関係があります」
母語や民族的アイデンティティの保持に関わる教育は、残

念ながらこういった学校レベルの取り組みに頼るしかないというのが現状である。しかし、こういった場が学校にあることは、単にマイノリティの子供たちのためだけではなく、同じ学校に学ぶ日本人の子供たちにとってもすばらしい開発教育の機会になるのである。単に海の向こうのことを知識として学ぶだけではなく、隣人として暮らす人々の文化をどう捉えるか、といった視座を学ぶための大切な機会ではないだろうか。しかし一方、「日本語に不自由がなくなったのだから」という理由で、インドシナの子供たちへの補助教員配置の予算カットも始まった。補助教員制度を一時的な日本語教育のみで終わらせずに、ぜひ母語教育、アイデンティティの保持のための教育、そして日本人児童の国際理解教育への転換点として欲しいものである。

一方、歴史の故に最も長く日本に暮らさざるを得なかった在日韓国・朝鮮人は、第三世代が日本の学校に通うようになっていて。彼らはこれまで、日本人社会の差別によって歪められてきた民族のアイデンティティの回復を求める運動に取り組む、その結果、いくつかの市の教育委員会が、在日外国人に関する教育の基本方針の中で、民族教育を受けるための環境整備の必要性を明示した。こういった在日韓国・朝鮮人の運動の成果が、他の外国人の子供たちにも作用して行くだろう、ということも付け加えて置きたい。

さて学校外の場合では、ラオス人、ベトナム人定住者の中から、子供たちに母語や祖国の歴史などを教える教室が始まっている。藤沢のベトナム人学校、綾瀬ラオス語教室など、何れも第一世代にあたる親たちが先生役を持回りでこなし、公民館やカトリック教会などの場を使って行われている。公民館では無料で場所が提供されていたが、活動そのものに対する助成は民間に頼っている。こういった教育が、日本のしかも公立学校で認められるようになるには、まだまだ多くの運動が必要であろうが、彼らがアイデンティティに誇りをもって学ぶ場が彼らだけのものではなく、やはり日本人にも共有されることが重要であるように思う。外国人問題を作りだしているのは日本人なのであり、私たちの側が彼らの文化を尊重する姿勢を持つことが重要だからである。そういう意味では、マイノリティの母語やアイデンティティを保障する教育は、対日本人教育の場でもある、といえよう。

●学校に行けない（行かない）子供たち

学校へ行けない、あるいは行かない子供が居ることも、これからの課題だ。外国人は義務教育ではないので、インドシナ定住者の子供へは就学案内が送られず、日本語のわからない親が入学手続きの時期を知らずに過ぎてしまうといったことは、かつてよくあった。しかし、これは、今年の日韓首脳

会議で在日韓国・朝鮮人の子供に就学案内が出されることになったのを受けて、他の外国人でも外国人登録をしていれば同様の対応を受けられることになったので、ある程度は解決されたといえる（とはいふものの、母語で就学案内を出しているところは数えるほどしかない）。

しかしそれだけではない。日系ブラジル人の中には、学校へ行かずに一日中共稼ぎの両親の帰りを家で待つ子たちもいる。日本滞在は出稼ぎであって、数年で本国へもどるのだから、あえて日本の学校に行かなくてもよい、と考えている場合もあれば、入学の手続きを知らない場合もある。これに対しては、日本の側で積極的に彼らの言語で情報を出すと同時に、親の側への積極的な働き掛けも必要であろう。

さらに深刻なのは、いわゆる不法就労の外国人労働者の子供の場合である。日本滞在が長くなるにつれて、結婚、出産といったケースが増えていく。最近のあるパキスタン人の相談ケースでは、オーバーステイ同士で結婚し、出産した子供の登録をどうするか、ということが問題となった。区役所に出生届を出し、その受理証明書を持って行くと入管で子供のビザをもらうのが通常の手続きだが、入管に行くとオーバーステイであることが明るみに出ることをおそれ、両親は一連の手続きをしないのが普通である。日本でこの子供は完全な「ヤミっ子」である。本国の大使館ですら、中には不法滞在

者からの出生届を認めない所もある。この子たちは就学年齢に達したらどうなるのか。

かつて、戦後日本に残された親戚を訪ねて密入国してきた韓国・朝鮮人の子供たちにも同じようなことが起きていた。^{注5}

●まとめにかえて

先日、アメリカの公民権運動の歴史をまとめた黒人ジャーナリスト、ホアン・ウィリアムズ氏が神奈川を訪れたとき、アメリカの事例をいくつか聞かせていただいた。もちろん単純に日本との比較はできないことは承知だが、アメリカでは、地域の学校に対するバイリンガル教育のために、連邦・州政府ともかなりの予算をとっている。バイリンガル教育の要求は、ヒスパニック系が中心となつてはじめて運動であるが、初等中等教育法のなかで制度化されるにいたった。外国にルーツを持つ子供たちのための母語教育が、単に英語を修得するまでの過渡的な意味あいとしてではなく、また帰国奨励の手段としてでもなく行われているのだ。

もっともアメリカ国籍は出生地主義であるから、両親がどんな外国人であろうがアメリカ生まれの子供はアメリカ人となるのであり、これはたとえ両親が正規の滞在資格を持たなくともあてはまる。国民である以上は教育を受けるのは当然の権利であるから、学校でもこういった子供にも対応しなけ

ればならないのは当然であり、不法滞在であっても、子供は学校に受け入れられる。登録がなくても、住所、氏名等を明らかにすればよい、とされる。(しかし、これは教育費の増大となって議論されていることも確かだ)。

日本では、外国人として暮らす限り、二世、三世になっても外国人であり続けなくてはならない。つまり日本では、「外国人」問題はいつまでたっても「外国人問題」であり続け、日本の国内問題へと転化していかない。

もちろん制度上の問題ばかりで無いことは明らかだ。日本人が外国人の問題を常に自分たちとは切り離して考える、その考え方自身を問い直す必要があるのではないか。その点興味深いのは、アメリカでは、マイノリティの権利のための運動が、単にあるマイノリティのためだけに行われているのではない、ということだ。バイリンガル教育にしても、マイノリティの社会参加の問題はつねに公民権運動の流れの中で捉えられている。アメリカ公民運動でのマイノリティとは、黒人、ヒスパニック、アジア系及び太平洋諸国人、アメリカインディアンとアラスカ先住民、白人(ヨーロッパ、中東、北アフリカ等の出身)などといったカテゴリーだけではなく、女性、障害者なども含まれている。公民権とはまさに、民族的マイノリティの問題だけではなく、さまざまな市民の権利を獲得する運動なのである。他の立場の人々の権利を考える

ためには自分の権利にも敏感でなければならぬ、ということではないだろうか。日本の「外国人」問題を考えるとき、私たち自身がまず自分の権利をきちんと捉え直すことが、外国人の人権を考える第一歩ではないかと思うのである。そしてまた、多くの異文化をもった隣人たちと対等に暮らせるような日が来たならば、日本の文化はどれだけ豊かになるだろうか、と思わずにはいられない。

(注1) 外国人という表現は、日本国籍ではない人、ということ、一部の日系人や帰化した人々を含まない。また、難民となった人々は無国籍であることもある。ここではそれらの人々も含むと言う意味で「」づけをした。

(注2) 日本政府は数年前から雇用を目的として、日系人を、積極的に受け入れるという方針を取っており、二世、三世であっても、日本人の子孫であるということを一世の戸籍などで証明できれば、就労が認められる長期滞在ビザが取得できる。昨年の入管法改正によって、違法就労が摘発された場合、雇用者にも罰則が適用されるようになったので、観光ビザで入国し就労するアジア人労働者よりも、合法的に就労できる日系人労働者がより多く求められるようになって来ている。

(注3) 母語 (Mother Tongue) は、文字通り、母が子供に

話しかける民族の言葉である。一方、母国とは生まれ育った国を示し、その国の言葉とされるものが母国語である。そのため、母語と母国語は、少数民族などの場合、必ずしも一致するわけではない。

(注4) 神奈川県では、川崎市教育委員会が「川崎市在日外国人教育基本方針」主として在日韓国・朝鮮人教育」(86年)を、また横浜市も同様のものを制定した(91年)。

(注5) 入学許可の場合には必ず外国人登録証明書を求めることを指示した法務省通達(「非法居住外国人の就学防止」)に関して、教育委員会は「教育委員会事務局職員には外国人登録証明書の呈示を求める権限が無いのではないか」と文部省に照会。これに対して、文部省は53年4月11日付けの通達で、「閲覧を強制することはできなくとも、入学拒否の決定は学校側にあるので、実生活上何等問題はないと考えます」と、回答をしている。いわば「逃げ」の回答が結果としてはプラスに働き、このような子供でも日本の公立学校に入学した事例がいくつか残されているが、これは制度として認められているのではないから、今後再び同様のケースが増えるであろう。

(えのいゆかり・あくざわまりこ 神奈川県国際交流協会)

解放教育と開発教育の

相互の学び合いを

——有光健さんに聞く——

まとめ 稲 邑 恭 子



*人権教育と開発教育

——夏季フォーラム全体会のパネリストをしていたいただいた後の分科会で、「日本では欧米からきた『開発教育』の流れと、国内の『人権教育』『解放教育』の流れのお互いの学び合いができていないのではないか」とおっしゃったことがずっと気になっていたのですが……。

有光 人権という概念は十八世紀のヨーロッパで生まれたのですが、アジアでは、残念ながらもまだあまり根づいていず、現実には中国やミャンマーをはじめ各地に深刻な人権侵害がありながら、それに対し、人権というところでストレートに発言したり要求したりする行為や運動が、社会的に軽視されがちな風土があります。

「国際人権」というのは欧米からきた一つの原理で、アムネスティなどが典型的だと思うのですが、今日、「環境」と共

に時代のキーワードとなり、東欧・ソ連で独裁体制を下から変えていくこうとする大きな力になってきています。その発展の流れと、第三世界の草の根の闘いから出てきた流れが、出てきた経過は違っても、最終的には目指すところは同じであり、国際的にもかなりの交流が出てきています。

一方、日本の国内での様々な歴史的な運動や取り組みの中から出てきているのが、解放教育、同和教育、人権教育といわれている流れだと思うんですが、これと、さきほどふれた「国際人権」教育的な考え方がまだ、うまく切り結べていないですね。

第三世界の解放闘争から出てきた、パウロ・フレイレに代表される識字教育などの理論と実践は、ラテンアメリカだけでなく、アフリカでも、また、今回のフィリピン、ピナツポ山の噴火の最大の被害者である、周辺に住むアエタという先

住民の中でも実践されているのですが、日本の教育現場では、この潮流と、欧米からきたいわゆる国際理解教育、開発教育といわれている流れもまた、相互にまだ十分経験をわかちあわずに、別の流れとしてある。そういう現状に至るにはそれなりの背景もあるし、そのあたりをきちんと分析しないといけないのですが、いずれ、それらの流れが合流することにならないかと思うのです。そうしないと、日本の国内の人権の問題ばかりやっていて海外の問題を見ないとか、逆に、海外のことでは何かやるが、日本では何もやらないし問題意識もない、ということになってしまふ。

第三世界と日本の関係を考えたときに、債務問題、環境破壊の問題も含めて、日本の責任は我々が考えている以上に非常に大きいし、それらの国々の社会構造に与える比重は増えています。タイの農村やスラムの人たちを支援しようという具体的な実践と同時に、大きな構造的な問題へのコミットも切り離せない。海外での差別、先住民の問題を捉えることが出来る感性と、日本の国内での問題に対する感性と、同時に備えていなければならないと思うのですが、そのあたりはまだ、体験的に見て、いくつか不十分なところがあります。

* 開発教育とは

——三年近く前、松井やよりさんから欧米の開発教育のことをうかがい、感心したのですが、日本でも、このところ急

に言われたたようですね。

有光 文部省あたりも、今までの外国語学習や帰国子女教育に加えて国際理解教育を少し言い出しているのです。だんだんそういう流れになって来ています。ただ、その問題意識と国内の人権問題が切り結べていない。

現実には、出稼ぎにこられる人たちの数が増え、結婚する人が増えると、子供たちの問題がでてくるわけで、教育現場そのものが、建前的な「国際化」ではなく具体的にどうやって一緒に暮らしていくのかを現実的に問われるようになるし、そこで、いろいろな差別の問題などに直面せざるをえなくなる。

それはもう、知識ではなく、一人の人とどう向き合っていくかという具体的な問題になって来ます。そうなると、解放教育、同和教育の歴史、体験が生きて来る。いま、国際理解教育というと、知識でやっているようなところがありますが、第三世界の問題を知りましようというレベルだと、現実に対応しきれなくなっていくのではという感じがありますね。

——フレイレの『被抑圧者の教育』を読んだときに、教師が情報の預金で生徒という入れ物を満たす「銀行型の教育」というのが出てくる、あれを読んで日本の教育はこの見本のようなものだと思っただけですが、結局、そのベースのうえに開発教育を持ってくる、あまり変わらないのではないか、ということでしょうか。

有光 そうですね。そして、また、開発教育という言葉そのものにも引っかけがあります。英語の development と日本語の「開発」という言葉のあいだにはかなりニュアンスの違いがあります。日本語の「開発」のイメージはどうもよくない。アジア各国でいま進められている「開発」とはその内容はほとんど経済開発、工業化を通しての近代化の実現だと思ふんですが、はたしてその路線で人々の自立が出来るかということには非常に疑問がありますし、そういうことをコンセプトに掲げている教育はちょっと問題ではないかという感じはしますね。

* 第三世界の解放教育から学ぶ

——日本での解放教育には、フレイレなどの第三世界の解放闘争の理論はかなり取り入れられているのでしょうか。

有光 パウロ・フレイレが二年ほど前に来日したとき、部落解放同盟の識字学級を見て、すごく感動して、これこそ私の目指していたものだという言い方をしています。

ただ、にもかかわらず、いま日本で識字を必要とする人たちの数は相対的にみれば減ってきているわけですし、また、日本の社会自体が経済的には豊かになり、価値観が変わってきている。運動に日常的持続的に参加していくエネルギーが日本社会の中では希薄になっている面がある。基本的な衣食住の面でそれなりに安定していて、抑圧感を直接には感じ

にくいような社会になっているんですね。今までの解放教育の実践は素晴らしいものだったと思いますが、そういう現実の中でストレートに適用していくことは難しくなっている、そのあたりをどう越えていくのか。運動というより、社会全体の問題です。むしろ、日本の国内では見えなくなっている問題を、少し目を広げて、アジアとか地球規模で考えることによって見えて来るものがあるのではないかと。つまり、日本の豊かさはどういったところに依拠し保障されて実現しているのか。従来の解放教育で、差別の問題をタテ系列で深めてきたところも、そういうことをこれからどんな学び、視野にいれていかなければならないと思うんです。そのためには、いわゆる欧米からきている開発教育では、やはり十分ではなくて、よりストレートに第三世界の現実から出発してきている解放教育の流れに引き寄せられていくのではないかと思います。

また、同時に、第三世界の解放教育というのが、今後もそんなりとうまういくかという点、今回のフィリピン、ボツワナなどの場合なども、難しい局面に追いやられている。

今まで山の上で、少数散在の集落で生活しているときはやりやすかったのですが、天災で下に降りてきて、そこで普通のタガログ語の文化圏と一緒に生活をせざるを得ないとき、先住民族のアイデンティティをその中でどのように確保して

行くのか、また、新しい問題に直面します。

ボルネオ島のサワラク、あるいは、北部タイなど見ていて、この十年ぐらいで、辺境だったところが急速に失われて来ていることを実感しています。山の奥まで森林の伐採が進み、外から人が入る。北部タイにしても、『地球の歩き方』（ダイヤモンド社）で「タイ北部山岳民族を訪ねて」というガイドブックまで出ています。観光化の勢いはものすごく、従来のパッケージツアーだけでなく、冒険を求めて個人的な旅行をする人も増え、彼らのもたらす分も含めて貨幣経済の影響が確実に浸透し、人々はお金に引きつけられて、お金を使うことを覚え、東南アジアの山奥に行っても、味の素を使っていたり、電気器具もかなり入っている。

そのことを一概に悪いとは言えないし、今までの生活に押しとどめることは困難だと思う。けれども、従来のフレインなどの試みは、地域のコミュニティが安定して存在して、伝統的な価値観が維持されていることが前提なのですが、それが、経済の力によって脅かされたり破壊されたりということを見ていると、従来の第三世界の解放教育の実践を、今後そのまま展開して行くのは難しいのではないか、と思うのです。

いろいろな流れのものが集まったり相談したりということが必要です。直面する問題が、もはや、援助する側、される側、別々の問題ではない。下からの相互交流がますます必要

と痛感しています。

* 起きてきた現実から出発する

——自分たちと異なった言語、文化の子どもたちがどんどん入って来るわけですから、これから教育現場はいろいろな意味で試されていくのではと思います。

有光 トラブルがでて来るのは避けがたいと思うんです。むしろ、へたにそれを先取りすることによって回避しようとせずに、何か起きたときに一緒に考える、起きてきた現実から出発するというようにしたほうがいい。

学校の先生が地域の現場にどんどん出ていくことだと思っています。日本で外国人労働者のひとたちがどういう暮らしをしているのか、「不法残留」のこともあるので見えにくいですが、いろいろな形の出会いの仕方があるのではないか、それがまた、こちらにも豊かになりおもしろいことだと思えます。

——私たち日本人はぶつかりあうことが苦手だから。

有光 同じような人とばかり一緒にいたがる。日本語は群れて生活している同じ人たちのシグナルとしては有効かも知れないが、外の人とのコミュニケーションには適さない面があります。でも、おそらくいま言ったようなことを真剣にやっていくと、日本語も変わるのだと思います。

（ありみつ・けん アジア人権基金事務局長）

アジアの中の
私たち

外国人労働者問題は

日本社会の鏡

旗 手 明



一、はじめに

外国人労働者問題は、いま、新たな段階に入っている。もはや、鎖国論が正しいか、開国論が正しいかを議論する状況を越えて、日本は、客観的に言えば、もはや外国人労働者の受入れ国である。この点の自覚を踏まえない論議は、現段階の外国人労働者問題を語る資格はない。

なぜ、このように言うのか。一つの指標として、いまだのくらしいの外国人労働者が日本に來ているかを推測してみよう。

就労資格を持った外国人労働者が五万人、オーバーステイ（在留期間を越えて日本に滞在を続けている者）になつてゐる人たちが十二〜三万人、日系ブラジル人などがやはり十二〜三万人、このほかベトナム難民で定住した人たちが約六千人、就労生が三万人、実務研修の実態が労働に近いと考えられる研修生が二万人……などなど、控え目に見ても、既に三

十五万人以上の外国人労働者が日本で働いている。

また、言うまでもなく、在日の朝鮮・韓国・中国の人たちが、この倍の人数に達している。

これらの外国人労働者以外に、今後、研修生の形で、ほぼ十万人を迎え入れようとしている。合法的な就労資格者も急増傾向にある。こうしてみると、もはや日本が、外国人労働者問題を避けて通ることはできないところまで來ていることがお分かりいただけるであろう。

二、第二段階を迎えた外国人労働者問題

昨年六月、いわゆる入管法が、一九五一年の制定以來はじめての、本格的な「改正」をされた。その中で、在留資格を整備してわかりやすくし、入国審査手続きの合理化を図り、「不法就労者」の雇用主に対する処罰規定を盛込んだ。しかし、外国人労働者問題の状況を変えることはできなかった。

むしろ、外国人労働者問題の状況をより複雑なものにし、その人権状態を悪化させる結果になっている。

私は、この入管法「改正」以降、外国人労働者問題は第二段階を迎えたと考えている。先に見たような、外国人労働者の量的な増加が、大きなメルクマールであることは確かである。が、私が注目しているのは、むしろ質的な変化である。

即ち、その一つは、外国人労働者の問題領域の拡大である。従来は、外国人労働者の問題といえば、ほぼ労働問題、特に賃金不払い・解雇・労働災害などに集中していた。いま、それが労働問題から生活全般の問題へ、広がりをを見せてきている。

具体的に言えば、①オーバーステイ状態の外国人男性と日本人女性との結婚・出産・さらには子供の教育問題、②在留資格・言語・健康保険・生活保護などの問題が複雑にからみあう医療問題（＝生命の問題）などである。この点については、後述する。いま一つは、労働問題の深化である。

まず、ネガティブな方では、例えば、賃金不払い・解雇・労災などで支援団体に訴えたと、その外国人労働者が逆に、同じ工場で働く同僚の外国人労働者から疎外されるという状況が出てきている。これは、同僚の外国人労働者が、オーバーステイの発覚を恐れ、あるいは、雇用主とのトラブルを避けようとして、権利行使に消極的になっていることからきている。

また、取締りの強化のせいも、外国人労働者の集団解雇も

発生してきており、これに抗議すると雇用主から「入管か警察に知らせるぞ」と脅されることも起きている。雇用主処罰規定の導入で、むしろ雇用主の方が神経質になってもよいはずなのであるが、実際には、オーバーステイを脅しの材料に使われ、権利侵害が容易に行われているのである。

他方、ポジティブな面では、労働災害があった場合に、権利主張がし易くなったことがあげられる。この点も、詳しくは後述するが、このほか、昨年話題になったように、フィリピン労働者が労働組合結成を実現した（アトラス・ジャパン）。また、江戸川ユニオンなどの地域ユニオンに外国人労働者が加入するのも、ごく自然なことになっている。数百人単位で相互扶助組織を作っているところも出てきている（APFS）。こうして、運動団体による支援という段階から、外国人労働者自身による主体的な運動が構築されつつある段階に移ってきているのである。この点は、第二段階における大きな特徴であると言える。

三、労働災害に見る外国人労働者の現状

私たちは、多くの外国人労働者支援団体とともに、この三月、「外国人労働者の労災白書」をとりまとめた。この中で四十二事例を取上げ分析を加えたが、何と、支援団体が関与する以前に労災保険の手続きが取られていたのは、僅か二事例しかなく、いかに外国人労働者が無権利状態に置かれてい

るかが明らかになった。

労働省の発表しているものでも、一九八七年・八九年の三年間で、わずか二百件の労災適用しかない。労災発生率は労働力人口のほぼ二%強であるから、本来なら、一年間に少なくとも数千人の外国人労働者が労災適用を受けているはずである。さらに、中小零細の建設業・製造業に働くケースが多いことを考慮すると、一万人近くに及ぶと考えてもおかしくはない。このように実際に発生していると思われる労働災害の中、ほぼ一%位しか労災保険制度の適用を受けていない。

言うまでもなく、オーバーステイや資格外活動の外国人労働者にも、労災保険の適用はある。しかるに、労災に関する外国人労働者の人権状況は、悲惨というほかない。これが、人権小国日本の実情である。

この点を改善するため、今年三月、私たちは、多くの支援団体とともに労働省交渉を行い、具体的な進展を獲得した。すなわち、①労災手続きに必要な調査が終わるまでは、法務省入国管理局に通報しない、②署名捺印に替えてサインでもよい、③パスポート・コピーは必ずしも必要ではない、④日本語によらない申請でも受付ける、などである。

こうした取組みが効を奏して、最近では、外国人労働者自身が労災適用に積極的になりつつある。私たちのところに寄せられる労災相談も、昨年のほぼ四倍近くに急増している。

（興味のある方は、海風書房発行の『外国人労働者と労働災害』をご参照ください。）

四、医療問題の重要性

入管法が「改正」された昨年六月以降、外国人の医療問題が大きな課題になってきている。それまでは、医療費を負担する経済力のない者には、生活保護を準用して救済していたが、昨年八月以降、オーバーステイや資格外活動者には生活保護の準用を行わないように、厚生省が取扱いを変更したためだ。このため、（国民）健康保険に事実上入れないオーバーステイや資格外活動者の、医療を受ける権利が、大きく妨げられる事態になっている。

厚生省の見解は、およそ以下のとおりである。

「外国人の生活保障は、本来各人の本国が責任を持つべきである。生活保護の準用の範囲は、入管法で定められている在留資格に応じて判断する。短期滞在者は、国または地方自治体の負担となるおそれのないことが入国条件であり、生活保護が前提としている対象者ではない。本国に資産とか家族とか、多くのものを残してきているのだから、生活保護の適用は困難である。在留期間を超過している者は、日本で生活することが法律上許されていないのだから、生活保護を適用する前提が欠けているので適用しない。『急迫保護』という意見もあるが、生活保護の適用が不可能なのだから認められない」。

ここには、人の生命・健康に責任を持つ国家機関としての識見は、全く見られない。生活保護の枠組みを守ることに汲汲として、その結果、人の生命が危険にさらされても仕方ないという姿勢すら感じられる。どうしても生活保護の適用が不可能だと言ふのなら、少なくとも、緊急時に医療を受けることが阻害されないような代替措置を用意していくべきである。

このような状況の中、次のような事例が生れてきている。

「本年一月、盲腸で福祉事務所に駆け込んだきたマレーシア人男性を、救急車で病院に運ぼうとした。しかし、生活保護が出ないことを言うと、診療を拒否されてしまい、五つ目の病院に着いた時には、既に腹膜炎を起こしていた」

「昨年夏、入院中のパキスタン人が、まだ治癒していないのに、病院を抜出してしまい、行方不明になった。本人は、入院費用を気にしていたとのこと。病院では、生活保護の準用を地域の福祉事務所に掛合うことをあきらめて、費用は病院で負担することにした」

「来日間もないマレーシア人女性が脳出血で倒れ、救急車で運ばれ、大手術をした。意識が戻らないままになっているが、生活保護の準用はなされそうもない」。

このような事態を前に、何ら解決策を提起しない政府の対応に、憤りを感じるのは私だけであろうか。早急に改善策が講じられなければ、国際的な非難を受けざるをえないであろう。

五、外国人労働者問題は、日本社会の鏡

このほかにも、外国人労働者問題は、多様な側面で、日本社会を写しだすものとなっている。

例えば、これまで南アメリカなどからの日系人を、「定住者」という枠組みで、他の外国人とは全く違う扱いをして積極的に受入れているが、どこかおかしくはないか？

ある日本の学者が、フランスで講演した時、フランス人からこの点を指摘され「ラシズムⅡ人種差別ではないかと問い詰められた」と話していた。日系人というだけで特別な取扱いをして何ら疑問を持たない日本社会と、このフランス人の指摘の、どちらの感覚が国際的に通用するのであるのか？

よく考えてみる必要があるだろう。また、今回の入管法「改正」では、オーバーステイになっている者の在留を認めるアムネステイ（在留の合法化）を実施しなかった。法務省は、「もしアムネステイを実施すると、それを狙った不法入国者が急増する」として、「改正」内容に含めるのを拒否した。

しかし、日本の入管法の母法とも言うべきアメリカ移民法では、一九八六年の改正で、雇用主処罰規定とともに大幅なアムネステイを実施した。ここでは、一方で取締りを強化しつつ他方で、様々な権利侵害の要因になっている「不法」状態の解消を図るといふ、人権保障のバランス感覚が働いている。

このようにアムネステイを巡っても、日本社会の人権感覚

◆私のすすめる一冊◆

『写真集 証言する風景』

——名古屋発／朝鮮人・中国人強制連行の記録——

「証言する風景」刊行委員会編 風媒社 2369円

山 本 直 子

が試されている。大いに議論さるべき課題と言えよう。

以上、やや走りながら、現在の外国人労働者問題のいくつかの側面を見てきたが、ここで触れられなかった問題もまだまだある。しかし、いずれの側面を取ってみても、これまで日本国民のみを想定していた制度が、外国人労働者という新

たな光を当てられることによって、国際的なレベルでのチェックを受けていると考えることができよう。

外国人労働者問題を、日本というやや閉鎖的な社会を見直すよいきっかけにしていけるか否か、私たちの心のありようが問われている。(はたて あきら・CALNETネットワーク)

今年の夏の休暇は、少し真面目に戦争のことについて考えようと思っていました。年の初めに、湾岸戦争を目のあたりにし、割り切れない思いが続いていたからです。そして、この一冊で、まだ終わっていない日本の戦争と、いつか始まるかもしれない日本の戦争について、考えざるをえなくなりました。

この本は、次の名古屋の三つの団体が編集したものです。
●ピットムの会(全国のグループと連携して、強制連行・強制労働の調査・研究をすすめる)

●日朝協会愛知県連合会(「愛知県下の朝鮮人強制連行の歴史調査班」と共に強制連行問題に取り組む)

●「ノーモア南京」名古屋の会(「ノーモア南京」を基調に、名古屋と南京の真の友好をめざしている)

軍需産業都市名古屋の周辺には、戦争末期、空襲を避けるために、多くの地下軍需工場・地下軍需施設がつくられました。そして、強制連行された朝鮮人、中国人がこの危険な工事に投入されたのです。愛知県・岐阜県の十五か所の工場跡地が、多くの写真と貴重な資料で紹介されています。

すが、山の中腹にぼっかりと空いたトンネルの入口や、コンクリートで固められた急斜面などが、朝鮮人・中国人に「日本」が課した過酷な労働を物語っています。

小学校でも中学校でも高校でも、一度も耳にすることのなかった第二次世界大戦についての一つの真実。そして、もっと恐ろしいのは、愛知県の観光名所の一つである三ヶ根山にある「殉国七士廟」というA級戦犯七人の墓です。一九六〇年、安保闘争のさなかに建てられ、門柱の裏には「第五十六、五十七代内閣総理大臣岸信介書」とあります。戦後十五年を経て、どうしてわざわざ、愛知県にこのような墓がつくられたのでしょうか。現在もなお統々と、この墓のまわりに新しい慰霊碑が建立されています。訪れた観光客に、何を想わせたのでしょうか。

日本がアジアの中で、真の地位を築いていくためにはまず、私たちひとりひとりが歴史上の真実を知らなければなりません。しかし、日本では、真実を知ることはいかに難しいことです。現在でもまだ、学校教育の中で、こうした日本の加害の側面を学ぶ機会は少ないようです。

発言

「在日日本人」の国際交流記

——日本にいながらの国際化——

川名はつ子

《韓国からやって来た若者たち》

職場から大量に出る反古紙を一束頂戴して、狭い路地を自転車で走り抜け、「ケセヨ」と韓国人学生寮の玄関で叫ぶと、たちまち食堂になっている板の間に招かれ、若い男女に取り巻かれて、片言の韓国語、日本語、英語に、反古紙の裏を利用した筆談や図解も交えて、賑やかに話が弾む。

初めての顔があれば名前を聞き、なるべく漢字で書いてもらう。ハングルで書かれるとどうしても印象が弱くなったり混乱したりで、ひとりひとりの顔と名を結びつけて覚えることが難しいから。

「せっかく日本に来たのに、普通の日本人と触れ合う機会のないまま、日本語学校と寄宿舎を往復する毎日では気の毒で……。ぜひ寄宿舎に遊びに行行ってやってください」と、区主催のハングル講座を一緒に受講していた若い日本語教師から

聞いたのが始まりだった。

最初に訪ねた日、突然に現われた日本人のおばさんを、「ちようど皆で夕食を作って食べるところだから、一緒に如何ですか?」と誘ってくれたざくばらんさ、人がいてもいなくてもいつも玄関のドアには鍵を掛けてない開放的な雰囲気……すっかりうれしくなって、暇を見つけては、生協で購入する本場のキムチやカクテキを土産に、学生寮を訪ねるようになった。

もう習い始めて三年もたつと言うのがはばかられるほど、一向に身に付かない朝鮮語ではもどかしくて、彼らの中には必ず日本語の達者な人が何人かいるので、つい頼って日本語で話を進めることとなりがちである。

韓国に国産の百階建ビルを建設するため、日本の設計会社勤めるかたわら東大地震研究所の研究生になっている工学

博士もいれば、免税店に働く女性もいるし、パンの製造を学びたい男性や、ピエロまで含めたメーキャップをという女性も。CADを学ぶには、と相談された時は目を白黒させてしまったが、これは computer-aided design すなわちコンピュータとの会話方式で機械や建築、金型などの設計をするこゝとだという。実にさまざまな希望を抱いて彼らは日本にやゝて来た。まず日本語を身に付けて、それから何らかの専門的な技術を学ぼうとしているらしい。

《さて、迎える日本人の側は……》

ハングル講座を通じて出会った人々は、のつべりと捕えどころのない平穏な日本の市民社会の下にも、さまざまな過去をもち、現在を生きる人々がいるのだということを私に教えてくれた。

少女期までソウルで育ったのに、朝鮮語をまったく知らないで過ごしてしまったので、これから学びたいと意欲的な老姉妹。宗教に導かれて韓国で集団見合により韓国人と結婚したが、夫は日本語が全然話せないの……と、うっとりした表情の若い女性。障害者授産施設の職員は、外国人労働者の流入で、ただでさえ少ない障害者の仕事に、さらに奪われてしまふと嘆いている。休みをまとめてとって混雑する行楽地に出かけても仕方ないので、何人かいる部下に「おれは毎週の

中日に休む」と宣言して実行しているという国家公務員氏。大学生の息子が友達になった中国人のビザ延長を認めてもらうため、家族全員がかわるがわる入管窓口まで同行するなど、親身の世話を惜しまなかったYさん一家。ひょんなことから日本の絵画展に同人として出品させてもらえることになったものの、不慣れなため準備が間に合わなかった韓国人の画家の卵嬢のため、国際宅急便で届いた大作を店先に預かり、指定の日に出場しに運び、無事飾り付けるまで、仕事を棒に振って助けてくれたガラス屋のS夫妻。……誰も彼も、私が朝鮮語を学ぼうと思立たなければ生涯知り合うことはなかっただろう人々である。

《気がつけば、日本語の達人?》

中・高校生時代は結構得意のつもりだった英語だが、大学では早朝の講義が多かったため、すっかりご無沙汰して返上してしまった。いわんやドイツ語をや、というわけで、ひどい語学コンプレックスに陥ってしまった私が、四十路の手習い。初めて自分の意志で学ぼうと決めた外国語が、朝鮮語である。にもかかわらず、一つ習えば二つ忘れた気のするほど、試験のない勉強は本当に楽しいけれども身にならない。

先日、初めて、ソウルの画家の卵嬢に、「展覧会用には八十号以上の大作を三点くらい、大至急送って」と伝えるため

掛けた電話に出てきたのは、韓国語しか話せないという見知らぬ人。双方とも電話口で「うっ」と口ごもったまま、交わすは溜息ばかり、という場面を家族に目撃され、「三年たつてそんな有様では、十年続けたところで、ものにならない。もういいかげんでおやめになったら?」と冷やかな視線がいつせいに浴びせられた。

ひどく口下手で人前でしゃべるのは尻込みしてしまう私だが、朝鮮語学習でさんさんに往生したあとでは、「Sさんは松坂慶子に似ていなくもない」などという複雑な日本語がすらすらと自分の口をついて出てくるのにふと気付いて、うーんと新鮮な感動を覚えてしまった。今では韓国人留学生に向かって、「私って韓国語はまるっきりだけど、日本語はとっても上手だから、何でも聞いて頂戴」と大した自信家ぶりである。そううそぶいたそばから、『漂う』とは何のことですか?」だの『氣に障る』って……?」と尋ねられて、また、うーんとうなってしまうのではあるが。

「高校生の娘と中学生の息子がこのごろちつとも言うことをきかなくて……。韓国では目上の人を無条件に敬うと聞いたけど……」と思わず愚痴をこぼせば、口々に「私たちも、両親から『勉強しなさい』とうるさくいわれて反抗します」

「理由のない反抗というのがありますよ」

「はーん。理由なき反抗ね」

「『なき』は『ない』と、どう違うのですか?」
「『ない』と同じだけど、古めかしい言い方ね」

「現代の日本では世代間で使う言葉が違うそうですが、若い世代は使わず、年取った世代だけが使う言い方ですか?」

「いいえ。もっと古くて、今では話し言葉としては使われず文語、つまり古典的な文章のなかにだけ残る言葉……」

こうして私は冷や汗かきかき、今は昔、学生時代の古文の時間にまでさかのぼり、日本の文化や文学について、ともかく思い出すこともを総動員して彼らの問いに答えなければならぬ。

私が彼らから聞き得た韓国についての知識は、象を撫でてみた群盲のひとりのそれにすぎないだろう。が、こうして、日本人のひとりである私自身や、私の使う日本語について、外側から眺める機会に恵まれたことが何より有り難かった。

私はまだ一度も日本から外に出たことのない、生粋の「在日日本人」である。時代に取り残されたようでなんとなく恥ずかしい気もしていたが、近頃は、こんなわけで、日本にいながらにして国際人になれそうな予感がする。

次は彼らから一体どんな質問を浴びせられるか。これは、何というスリル! このスリリングな日々を、私は、我が家の子供たちにも味わわせたい。そして、あなたにもぜひ、味わっていただきたいと願っている♥

発言

留学生からの発言

児玉澄子

一、「同じ世代の日本人学生と知り合いたいと思うんですが、共通の話題がないんです。僕らの国のように、厳しい状況の中にあると、どうしても、政治経済、そして、人間の生き方という哲学の問題を、深刻に考えざるを得ないんですね。でも、日本の若い人たちは、遊びや、異性や、テレビや、流行の話についていけない僕らを、『肌合わない』と思うらしいんですね。それにつき合いにはお金がかかる。お金がなきゃ、人間関係は成立しないんです。日本では……」

中国・25歳 男

二、「日本の経営の秘訣を学びに来たんですけれど、五年かかって学び得たものは何だったのか、疑わしい。日本の経営の理論は、アメリカの輸入もの、そして、その実際は、結局、日本人でしかわからない、日本人にならなきゃできないノウハウばかりなんです。私は、日本人にはなりたくないから、学び得ないんです。故国に帰って活かし得る

もの、世界のどの国にも応用できるもの、そんなものを、日本人は、示し得るのでしょうか。示す努力をしているのでしょうか」

タイ・24歳 女

三、「ふしぎなこと。電車の中にシルバースhirtってありますよね。身体の不自由な人、お年寄りを見かけたら、席を譲ってあげるのって、日本じゃ、当たり前のことではないんですね。だから、わざわざシルバースhirt作って、そこに坐りなさいと指定しなきゃならないんでしょう？ そのシルバースhirtに、でも、堂々と、元気な大人が坐っていますよね。私の国じゃ、お年寄りを敬わない若い人がいたら、まず、社会的に致命的なダメージを受けますね。当り前すぎる程当り前のことです。身体が弱っている人を大切にすることは……人間の基本ですから」

韓国・28歳 男

四、「アパート借りにいくでしょう。不動産屋さんが、『外人は嫌がられるんですよ』と言って拒否するんですね。たくさん空部屋があってもですよ。これって、日本じゃ、法律で取締らないんですか。私の国じゃ、考えられない。もし、正当な理由なく、住む所を拒否されたら、人権問題だし、また、人種によって拒否するのなら、人種偏見の例として、社会問題となりますね。日本では、これ、おかしいことだって言う人いないんでしょうか」

オーストラリア・35歳 女

五、「大学の食堂で、空いている席があったので、坐っていた日本人学生に、『ここに坐ってもいいですか』と聞いたんです。にやにや笑っているんです。そして、そこにいた三人共、席を立て、別のテーブルに行ってしまった。その別のテーブルから、私の方に向かって指をさして、また、笑っているんです。私は、さっさと食事をすまし、席を立ちましたが、あの日から、もう二度と、大学の食堂には行っていない。黒人が珍しいというような現今の日本ではあるまいし、立派な学生が、他人に対してとるべき態度でしょうか。人間の尊厳を傷つける者に対して、我が部落では、厳しい『おしおき』があります。社会人として通用しなくなるのです」

ガーナ・36歳 男

六、「日本へ来て一番驚いたことは、大人も子供も、熱心にマンガを読んでいることです。それに、子供の通学路に、アダルト・ビデオの店があって、すごい写真が窓ガラスに貼ってあるんですね」

中国・26歳 男

七、「日本の経済発展って、犠牲者の上に成立しているんですね。女性と子供が、まず、お父さんを会社に取り入れてしまってますし、夜更けの、よっぱらいサラリーマン見ると、この人たちも犠牲者だと思えます。ブラジルの日系人だって、こんな状況、黙っていませんよ。抗議します」

ブラジル・26歳 女

最後に、ある日本人の公式の場での発言。

「ちょっと聞くけど。留学生って、受け入れなきゃいけないって規則でもあるの？ 下司な話だけど、何か得になることあるの？ たとえば、頭数に應じて、文部省から余計に予算がでるとか……。」

留学生にしたって、来て、いろいろ文句言うんなら、来なきゃいいじゃないのさ」

(横浜国立大学・外国人留学生専門教育教官)

アジアを、歴史を「直視する」ということ

中村英之

五月初旬に東南アジア諸国を訪問し、帰国した海部首相は、「戦前のアジア諸国に対する行為に関する学校の歴史教育で授業での徹底を支持」し、井上文相もそれに応えたとされる（五月七日付朝日新聞）。

これだけを最大限に善意に解するならば、日本の侵略戦争についての正確な授業への努力が文部省お墨付きで許可された、ととることもできる。

しかし、一方で、文部省は、今春の卒・入学式において、高知県の「日の丸・君が代」不実施校の校長に対して「諭告」指導を科している（七月二五日付同）。また、同じく、今年卒・入学式をめぐって「日の丸」に反対した公立高校教諭らが、大阪では大量に「処分」されたという。

さきの侵略戦争を学校教育の中で正しく伝えようとするならば、「日の丸・君が代」のことも正しく伝えられねばならないであろう。ところが、文部省の見解は、アジアへの侵略行為を直視した歴史教育と「日の丸・君が代」の強制は両立するというものである。

しかし、アジア諸国は、このような日本の教育現場での背反する方針に納得するわけではない。「日の丸・君が代」の問題点については、改めて述べるまでもないであろう。しかし、「君が代」は主権在民に明らかに反するから強制すべきではないとしても、「日の丸」は船舶に表示する記号としての意味や、オリンピック等で定着しているから問題はないとの意見もある。が、これはあくまで「日の丸」を日本側から見た意見であって、アジア

から見たものではない。そして、それは「日の丸」の歴史と「日の丸」そのものを切り離して考えようとする日本のアジア蔑視、戦争責任回避のご都合主義でもある。

さて、さきに述べた「日の丸」をめぐる教員「処分」事例では、教委側は「処分」とは言わず、「処分」と「指導」の間であるとして述べているそうである。そして近年「日の丸・君が代」処分に見られるように、決して「日の丸」に反対したから「処分」した、とは述べてに、「職務違反」であるとか、「職場を混乱に陥れた」かどで「処分」するのが常である。教委・文部省側は「日の丸・君が代」反対が「処分」の対象となるとは言わない。つまり「日の丸・君が代」に反対する者などいないことにしたい、あるいは「日の丸・君が

代」に批判的な意見が表出することを避けた
い、という姿勢が明らかなのである。

ここでは、「日の丸・君が代」が正面きつ
て論じられるのを避けようという意識が働い
ている。そうでなければ、「日の丸」支持七
〇％などと言えないからであり、それほど
「日の丸・君が代」自体が論じてはいけない畏
れおおい存在としてあるからでもある。つま
り「日の丸・君が代」が天皇、天皇制と密接
に関係があり、民主国家にそぐわないことを
白状しているようなものでもある。

「日の丸・君が代」を、それこそ正々堂々と
正面きつて論議しようものなら、侵略戦争時
のその役割に触れざるをえず、必然的に天
皇、あるいは天皇制、そして天皇の戦争責任
に話が及ぶはずである。おかしなことに、「日
の丸・君が代」と天皇は直接結びつかないとい
う論理が、日本国内では幅をきかせている
ようであるが、このような手前みそな論理が
アジア諸国に通用するはずもない。そして
戦争中の「アジア諸国に対する行為」の直視
と、「日の丸・君が代」の強制という文部省
の指導が両立するわけがないことをアジアの
人たちは知っている。いや、知らないのはわ
れわれ日本人だけなのである。

確かにさきの侵略戦争の直接の最高責任者
であった昭和天皇裕仁はもうこの世にはいな
い。そして、現天皇明仁に戦争責任そのもの
を問うことは困難かもしれない。しかし、戦
争責任を反古にしたまま、戦後をその特権地
位にあるままアジアに顔を向けてこなかった
という点において、天皇明仁にも戦後責任は
ある。戦後責任とは、戦争責任をとらなかつ
たからこそ生じる責任であり、天皇を筆頭に
日本という国、日本人という民族すべてが背
負っていかなければならない性質のものであ
るのだらう。戦後ドイツは祖国を、ヒットラ
ーを、そして彼を生みだし支持した民族・歴
史というものを直視し、社会の場で政治の場
で教育現場のなかで、繰り返しその戦争責任
を問い続けてきた。

歴史を、加害者としてのそのまぎれもない
歴史をほりおこすという行為を決して怠つて
はならないし、その歴史の証人が減っていく
なか、その加害性を置き去りにしておいては
ならない。絶対に被害者ではありえなかった
存在と天皇と、絶対に加害者になりえなかつ
た存在と多くのアジアの民衆、との間にあつ
て、私たち日本人という存在はどこに位置す
るのだろうか。

未決の戦争責任といわれる様々な加害責任
——天皇による謝罪、国家責任としての補
償、従軍慰安婦など——は戦後五十年近くだ
った今もまさに未決のままにされており、私
たち自身がそうしてきた。いや、加害者とし
ての立場を確認しつつ、その頂点として存在
する天皇をいだいていくことを確認し
つつ、歴史を検証する立場にいることはでき
る。自分たちの近くにあった加害の歴史とい
うものに関わっていけばいい——日の丸、君
が代、靖国、忠魂碑。

加害責任の検証者として、歴史を直視する
ということ、私たちが「アジア」に仲間入り
するために必要なことはそういうことなの
だらう。

〈訂正〉

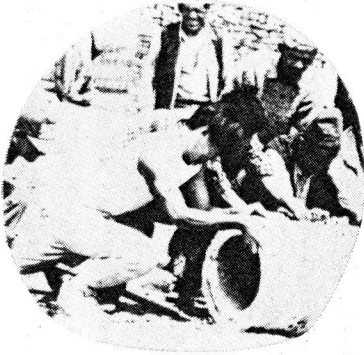
本誌十月号角田由紀子氏の「主體的に
『性』を生きるために」の中で、9頁下
段終りから三行目の自己計画は自己評価
の誤りです。お詫びして、訂正します。

また同号の「イキイキぐるうぶ」の「売
買春問題ととりくむ会」の住所は、

〒169 東京都新宿区百人町2の23の5
矯風会館内に訂正いたします。

◆学習の主人公たち◆

ADRA 国際青年協力隊の 大学生たち



この春、ADRA 国際青年協力隊のメンバーとして、ネパールのホコナという小さな村に、ハンセン氏病患者の老人ホーム作りを手伝いに行って来られた三人の大学生の方々に体験記をお願いしました。(ADRA 国際青年協力隊とは、世界的規模で活動している民間の援助団体で、プロテスタント派のセブンスデーアドベンチスト教団に属するアドラ国際援助機構を母体になっています)(編集部)

●ハンセン氏病の人々から教えられたこと

小原 望

真白くそびえ立つ美しいヒマラヤとは対照的に(ネパールの方には失礼だが)汚いネパールの街を見て

「とんでもないところに来てしまった」が私の第一声であった。毎日清潔な服を着て白いシーツの上で眠っている私が、埃っぽく乾燥した土地に家畜と共に生活し、何日も風呂に入っていないような子供がボロ服をきて走りまわっているのを見れば、当然出た言葉だった。

私には「汚い・貧しい」というイメージしかないその国の中に、同じネパール人から見離され無視され、最低の場所とされている、ハンセン氏病患者とその家族だけが住むコロニーがある。今春、私達『アドラ国際青年協力隊』の三十五名はそこで、彼らの家を建てる目的でボランティア活動を行った。

さて、私達は現地に着くと、実際彼らの家を建てるのではなく、壊す仕事を与えられた。というのは、国の事情で土地が買えず、古い建物を撤去してからそこに新しいのを建てるからであった。結局、それから二週間、汗と埃にまみれ焼きつくされそうな太陽光線を浴びながら、レンガづくりの建物を崩した

り、レンガやどろを手作業で運んだり、という仕事をした。

作業開始から二、三日が過ぎて、「この中で生活し、外にも出れず、社会から見離される人生など、なんて哀れで空しいものだらう。我々のような元気な若者が、彼らのために何かやってやれば少しは明るくなるだろう」という、彼らに対する偏見と思いがかりが、彼らによって崩された。

彼らは、私達が来なかつたとしても、いつも素足で土を踏み、畑を耕し、夜が来れば寝て、一見平凡な生活を彼らなりに明るく楽しく一生懸命生きていた。その証拠に輝いた目で、理解出来ないネパール語で、私達に話しかけて来たのだ。その笑顔は、私達が来たからというより、もともと彼らが持っているものであるのがはつきり伝わった。

ネパールへ来る前のオリエンテーションで、ハンセン氏病がうつたら大変なので、決して、触れたりあまり近づかないようにと言われていた。ところが二、三日過ぎると、知らず知らずのうちに彼らと一緒にレンガを運んだり、かけ声をかけて重いものをどかしたり、休み時間には、ネパール語と日本語の混じった会話（実際通じてない）をして交流

していた。彼らの体に触れたのではないが、私達と彼らの間の壁は無くなり、ぐつと近づいていた。それから、最後まで、作業場に笑いとわけのわからない会話が絶えなかった。しかし、楽しい毎日と同時に、「おれは、いったい彼らのために役に立っているのだろうか？ 逆に彼らに元気づけられているのだろうか？ 最初に最初の目的とは違う作業をしている。意味あることをしているのだろうか？」という疑問があった。

ところが、この問題を解決してくれたのも彼らだった。最後の日、彼らは私達のためにお別れ会を開いてくれた。私達に対する最高の感謝の気持として、やはり指が落ちて丸まった手をした一人の女性が全身の力を込めて踊ってくれた。その後ろでは、目の見えない男性や指の曲がった男性が笛を吹き太鼓をたたき、感謝と喜びの気持を音楽で表現していた。その間、他の女性達が、どこから摘んできたのだろう、黄色や赤のかわいい花でつくったレイを私達三十五名の首にかけてくれた。その目には涙があった。一人だけではない、あちらでもこちらでも彼らの目に光るものが見えた。気がつくくと私達協力隊のほとんどが、黄色い花の上に涙を落としていた。

私は彼らに対して、日本人として上の立場から与えるつもりでネパールへ行った。しかし、逆に、与えられるものが多かった。彼らは素朴で、決してきれいな格好をしていない。最下層階級と言われる人々だ。しかし実に明るく、協力的に、楽しく生活している。我々が持っていないものを持っていた。我々日本人は物質的には大変恵まれている。しかしどこか貧しい部分があるのではないだろうか。先程「上の立場」と言ったが、それは金持ち日本人の誤った考え方である。「やっつてやる」という高慢さや、物質のみ、多額の援助だけでいいのだろうか？ 精神的な豊かさ、それは、ネパールの人々が私達に教えてくれた。共に笑い、共に泣き、共に喜び、共に苦しみ、共に生きること。

私は先ず、近くに人々から、「共に生きる」ことをしていきたい。近くに人々から、その人の幸福のために私の時間とエネルギーを献げる人生を歩みたいと思う。その人は、注意してみると本当に私のそばにいる気がする。大学の友人、先生かもしれない、近所のおばさんかもしれない、家族かもしれない。電車に乗っている老人かもしれない。

となりにいる人に「愛の手」をさしのべる

ことをしないで、アジアの国々に対して「眞の愛の手」をさしのべられるだろうか？

●ありのままの自分を受け入れて生きる

川上 朝子

私は、この春ネパールで、物質的な豊かさを何も持たない人々から多くのことを学び、そして、その中で、自分自身と出逢うという体験をした。自分の限界、自分の弱さ、力不足、そんなものを次々と見せられ、その度に頭をハンマーで殴られたようなショックを受けた。

ハンセン氏病の婦人がサリーを持って来て、私に着せようとしたとき、その瞬間、私は「こわい。私も病気がうつって、十年後ぐらいに手や足がなくなったらどうしよう」と思ってしまった。何の屈託もなく、親愛の情を示してくれるその人の目の前で……。自分の考えにゾッとした。

ネパールに行く前、私は「自分はどんな人とも笑顔で接することができる」と思っている。しかし、みごとに、その想いは打ち砕かれた。結局、私は、極限に立たされたら自分を取るような人間。どんなきれいなことを言っても、いざという時には、そんな

汚いことしか考えられない人間なのだ。こう思った時、やりきれなさと、申し訳なさで、胸がいっぱいになった。

また、私たちの初めの計画では、ハンセン氏病の方々に家を建てに行くはずであったが、そこには、まだ壊されていない、古い小学校があり、まずそれを壊すことが先決になった。

つるはしと、スコップと、鉄の棒と、道具らしきものは何もない中、ただ人々の一つとなった力が、その作業を進めていった。泥だらけ、ほこりだらけになって、戻ってくる仲間達の姿に、心打たれた。そして、私も、自分に与えられた中で、その仕事を精一杯やらなくてはと思っていた。

しかし、労働する日が残り少なくなってくると、私たちの中に一つの疑問が浮かんできた。「私たちは、本当にこの人達の役に立てたのだろうか」。私たちが知らなかっただけで、彼らには彼らの生活があった。それは、もうずっと昔から……。その中に、たった二、三週間やって来て、自分達のしたことは、何か意味があったのだろうか。そう思わずにはいられなかった。

けれど、そんな心配は、私たちがネパー

ルを去る日に、どこかへ飛んでいってしまった。ハンセン氏病の方々が、送別会を開いて下さるというので、私たちはもう一度、ホコナの仕事場へと向かった。すると、彼らは、手作りの生花のレイを私たち三十人分用意してくれていて、涙を流して、「ペリ、ペリ、アウヌス」（また、おいで）と言ってくれた。日本の歌を歌う私たちの目からも、涙が止まらなかった。この時、私は、本当にネパールに来ることができてよかったと思った。彼らと出逢えたことを、感謝せずにはいられなかった。

たとえ肌の色が違っても、言語が違っても、文化が違っても、風習が違っても、人間であるということは変わらない。このことを、初めて実感した。本当に大切なことは、心から何かをするということ。心を込めて、何かをすれば、その想いは必ず人に伝わる。神様の前で、私たちは何の差別もないのだということをつくづく感じた。

ネパールは自然が美しい。話には聞いていたが、あの緑のみずみずしさは実際に行ったらにしか分からないと思う。街全体は乾燥していてはこりっぽいのに、生命力というものは、本当にすごい。その緑にも似て、人々も

太陽の輝きのもとで、暮らしている。私が知らなかっただけで、こんなにたくさんの方が、自分とは全然違う生活をしていたのだ。そんなあたり前の事実が、私の中にくっきり浮かびあがった。

私が特に今回のプロジェクトで学んだことは、自分に与えられたものを受け入れて、その中で生きていくことの大切さである。私たちには、きれいな水があり、清潔な住居があり、衛生的な食物があり、洗たくした衣服がある。これだけでも恵まれたことなのに、自分の容姿、学歴、地位など様々な欲望を持ち、不満ばかり持っている。ネパールの人々が、大自然の中、淡々と生きているのを見ていたら、自分の小ささがおかしくなった。もっと世界は広い。肩に力を入れずに、私らしく生きればいいではないか。神様が全てをご存知なのであるから……。

私は、ネパールの人々から、ありのままの自分というものを受け入れ、与えられた今という時を、本当に素直に生きていくことの大切さを、教えて頂いた。

彼らは本当に貧しく狭い暗い所で生活していたが、とても明るく、笑顔を絶やさなかった。私たちのことを毎朝「ナマステ（こんに

ちは）」と迎えてくれ、そして、夕方には「ペリ、ベトラ（またね）」と送ってくれた。

私は私以外の何者でもないし、何者にもなれない。それでいいのだ。肩に力を入れず、自分というものを受け入れることが、聖書で教えている自分を愛するということにつながるのではないだろうか。



● 「あたりまえ」の生活

山室 敦

「あたりまえ」、皆さんは、この言葉をよく使いますか？ 私は、学校が休みの期間に入ると、病院でアルバイトすることが多いのですが、その中で出会ったおばあさんがよく言う言葉が、この「あたりまえ」だったので。彼女は、脳の障害で左側の手は動かず、足は、ほとんど使わないので、細く、動く気配さえもないものでした。私の仕事は、看護助手といって、主に看護婦の手伝いをする仕事なので、彼女の体を拭いたり、食事を介助したり、その他、身の周りの整理など、様々なことをやっていました。食事の時間、いつものように介助して食べ物や口に運んでいると、めずらしく黙って食べてくれるのです。私が、「食事の食べさせ方、少しは上手になっただしよ」と話しかけてみると、「何度もやっているのだから上手になるのはあたりまえ」と、このような答えが返って来たのです。それから何をしても、「あなたは若いのだから出来てあたりまえ」というような返事しかないので、なんとかわいにくいおばあさんだ、と思いました。この「あたりまえ」という言葉を、もう一度考えてみるきっかけとなった

のは、感謝したいと思っています。

私が、この「あたりまえ」のすばらしさを感じたのは、今年の春の、ネパールでのことでした。日本での「あたりまえ」とは何でしょう。蛇口をひねれば、当然のごとく、飲む水が出てくる。スイッチを入れれば、昼間と変わらない生活ができる電気がある。風や雨ですぐにでもこわれるような家はなく、何より子供達が健康で、今では栄養のとりすぎとまで言われている。こんなぜいたくなことが、日本での「あたりまえ」なのです。「あたりまえ」とは、裏を返せば、「ぜいたく」なのです。この「ぜいたく」な生活を与えてくれたのは、我々日本人の力ではなく、発展途上と言われる国の人達の労力と資源によるものということ忘れてはならないでしょう。

私は、前に述べたとおり、ネパールにほんの一月滞在していたことがあります。ハンセン氏病の人達のために、住居を建てるのが目的のボランティア（奉仕）でしたが、現地の人と共に働き、汗を流すうちに、我々は、いつの間にか自分達が奉仕に來ているというのを忘れて、仕事の一つ一つを現地の人のように楽しんでいました。奉仕、それは自分達のしたいこと、彼らにとって益になるだろ

うと思うことを押し売りのように、おしつけることではなく、共に助け合い、足りないものを補い合うものではないかと、私の心の中で、奉仕というものの考え方に小さな変化がおこってきたのです。

奉仕？ 奉仕っていったい何だろう。

自分をすてて、他のためにつくすこと。そう、この国の人達のために、我々は来ました。豊かな国、日本から、「あたりまえ」の多い日本から、豊かさを少しでも分け与えるために。日本の生活水準まではいかなくても、我々が働くことによって、少しでも生活の助けになれば、と思っています。

しかし、現地の人々は、我々以上に豊かな生活をしているように見えるほど生活を楽しんでいました。幸せ、喜び、という言葉自体一ぱいに表現して。世界中の誰が見たって貧富の差はひらきすぎています。しかし、我々が見たのは、自分達日本人の人間の小ささ、表現の乏しさ、人間味のなさでした。都会の塵芥にまみれ、文化に溺れて、自分が人間であるということを忘れてしまったのではありませんか、これでは、生きていとはいえない、止まった物体です。

ネパール、そこの人達は、自然とたわむ

れ、自然と生きていく中、生き物同士の関係の中で、自然からも教わり自然を利用して自分も支えてもらっていました。常に生物と係わることに、彼らが成り立っているのです。この、生物と物体との差が、人間味の差にもなっているのではないのでしょうか。

我々は、文化を築く中で、一つ一つ進歩して行き、確実に一つ一つ人間らしさを失っていったにちがひありません。我々がネパールで何をしようが、彼らは、今まで、今のままの生活で十分やってきているのです。我々に何ができるか？ 彼らを受け入れ、彼らから幸福の原点、人間の原点を学ばかりなのです。もちろん、水や環境の整備、衛生的な暮らしの指導をしなければならぬのは、たしかですが、それをするのと、我々が学ぶこととは、我々が学ぶことの方がよっぽど価値があると、今私は強く感じています。

このような、考え方の変化により、我々ももっと、近くの国、近くの人を大切に、かつ助け合い、補い合うべきではないかと、皆さんに伝えたいと思うようになったのです。我々の生き方「あたりまえ」の生活、もう一度考えてみませんか？

幼い難民を考える会

〈峯村 里香〉

タイのカンボジア難民キャンプ・カオイダンには、十一年前、幼い難民を考える会が開いた保育センター「希望の家」がある。十年の間に保育センターからは六千七百名の子どもたちが巣立ち、今もなお四百名の幼児が元気に通っている。一九七九年秋、戦乱の続くカンボジアを逃れ、難民となった人々は数十万人にのぼった。国境のキャンプでは病氣や飢えに苦しむ人々が病棟に横たわり、多くの幼い命が失われていった。人の一生のうちの大切な幼児期を閉ざされたキャンプで過ごす子どもたちが、健やかに育つことができるよう、私たちは活動を始めた。子どもの健全な成長には周囲のおとなの愛情と配慮が必要である。保育センターは安全で創造性に満ちた環境づくりがなされ、おとなは子どもとの隣りで遊具を作り、服を縫い、機を織りながら子どもを見守っている。キャンプでたくましく育つ子どもたちから、私たちは難民問題に関わる姿勢を学んだ。この日本にも、以前難民であったインドシナの人々七千五百名が暮らしている。難民問題を足元から捉え直すため、私たちは彼らに日本語を教えることなどを通して心の交流を続けている。日本を真に開かれた社会にするために、共に歩み、考える人材が今求められている。

連絡先

〒160 東京都新宿区南元町6の2

☎03-3353-9947 (会費月五百円)

自己紹介ぶるうイキイキ

アジア太平洋資料センター

(PARC)

〈山岸 素子〉

アジア太平洋資料センター(略称PARC)は、ベトナム反戦運動のなから生まれた英文雑誌「AMPOL」の広範なネットワークを基に、'73年にスタートしました。

二十年間でやってきたことの大きな柱の一つは、「資料センター」として、主にアジア・第三世界の人びと・特に現在の先進国との不平等な関係をつくりなおそう、と動きだしている人びとからの情報、マスコミが伝えない生の声を伝えること。さらに、その情報とネットワークを生かして、研究者のいかに問わず国内外の多くの人が共同して「生活者」の視点からの調査研究活動を行ってきました。これまでに、「アジアにおける貿易地域」「バナナ」「エビ」など、そして現在「リゾート開発」などの研究会が進行中です。その成果は、『世界から』『英文AMPOL』などの特自のメディアに生かされています。

十年前から始めた「PARC自由学校」では、一年間のプログラムの中で「開発」「エスニシティ」などそれぞれのテーマを深める中で、第三世界の人びと(だけではないんですが)との関係を考え、創っていくこと、そして、「教育のオルタナティブ」を考え、創っていることをめざしています。

連絡先 アジア太平洋資料センター(PARC)

千代田区神田神保町1-30 正光ビル402 ☎03-3291-5901

新しい・家庭科を・創るために

日本国憲法を学ぶ

鈴木 まき子

(東京都江戸川区新田小学校)

授業とは、知識の切り売りではなく、人類が誕生してから
の長い歴史の中で、「人は人間としてどう生きていくのか」
を、子供と共に考えるものだと思います。そうありたいと常
々願って授業をしています。

一九八八年～一九八九年、六年生の子供達と私に格好の機
会がありました。

一九八八年十月、ソウルオリンピック、十一月、川崎製鉄
公害訴訟の判決、一九八九年新年早々天皇の死と新元号……
私たち自身がどう生きるかを、改めて考えさせられる材料が
たくさんありました。これは、憲法の理念を学ぶ機会のある
六年生にとっては格好の材料でした。

五・六年持ち上がりの学級での実践を一部紹介します。

川崎製鉄公害訴訟の判決から学ぶ

☆子どものノートから

「川崎製鉄の見学にいったとき、そんなに公害がはげしいと
は思わなかった。でも、実際にそんなに苦しんでいる人がい
るなんてとてもかわいそうだ。どうして四十六人だけじゃな
いのにその人達だけにお金を渡すんだろう。他の人がその
公害と関係ないからってひどすぎると思った。(友達の見
聞いて) 鈴木君は、お金だけじゃ解決できないといってい
た。ぼくもやっぱりそう思う。先生は、自分が幸せすぎると
他人のことを忘れてしまうといっていた。心をくもらせない
ためには、ぼくは、つねに他人のことを思わなくてはならな
いと思った。他の人のことを考えてあげられる人もいるのだ

から、ぼくもそういう大人になりたい」

(上沼慶修)

日本国憲法を学ぶ

六年の三学期、憲法の学習をしました。そのまとめとして、主任手当て拠出金で製作された三本のスライド「日本国憲法」「シロとタケシ」「太陽がおちた」を見せました。憲法の三原則をしっかり学んでいた子供達は、自分なりの尺度を持ってスライドを見ていました。

☆感想・スライドを見て

「昔の人などのいろいろな出来事によって今の憲法ができたのを見てみると、とっても大変なことなんだろうなと思いました。もし、昔の憲法なら、ぼくたちは自由をうばわれ、とても暗い毎日になると思う。昔もあったことだけど、人種差別を絶対なくしたいと思う。はだしのゲンを書いた人のお父さんが反対したように、軍国主義を二度とくり返さないようにと思う(日本国憲法のスライドを見て)」「昔の日本では、すごくひどいことをしていたと思う。動物を殺してまで戦争なんかしないほうがいいと思う。もし日本が戦争に勝ったら、平和なんかななくておそろしい戦争の時代になっていたと思う。日本は世界のほとんどの国を戦争相手に勝てるわけないのに、なぜやったかしりたい。朝鮮人がかわいそうだ。どうしてそうなったかしりたい(シロとタケシを見て)」

(風間大介)

「あたらしい憲法のはなし」(昭和二十二年八月文部省発行)を読みながら憲法を学んだのですが、とてもわかりやすく、憲法について産説明してありますので、教材としてとても役に立ちました。

朝鮮と日本の関係

スライドの中には、関東大震災の時の朝鮮人虐殺と朝鮮人中学生へのいじめがありました。これを単なる個人的ないじめと考えている子供の感想がありましたので、日本と朝鮮の関係について考える授業を組みました。

① チョー・ヨンピルの歌を聴く

一九八〇年以降、やっと堂々と日本で、朝鮮の歌が歌われるようになったこと、ソウルオリンピック後、朝鮮で日本語の歌が歌われるようになった。なぜか

② 大昔から今まで、日本と朝鮮との関係はどのようになっていたか(事前に、教科書に記載されている史実をすべて抜き書きさせておく)

③ 日本は侵略の禍ちを朝鮮に謝罪したか

④ 日本と朝鮮の関係には何が欠けており、今後大事にしなければならぬことは何か

大学時代に学んだことを、ノートや書物から引っ張り出し

ながら、再びおさらいをして子供の前に立つという、なんとも頼り無い教師でしたが、子供達はよく考えていました。

☆感想

「昔から日本は朝鮮に劣っていたのに、なぜいきなりせめこんだのか。習ったことを他にも役立てて仲良くすればいいと思う。無理やり日本につれてこられた上に、原子爆弾で殺されるなんてひどいと思った。とても朝鮮人の前には出られないなと思った。よく日本人はソウルオリンピックに行けたなと思う。日本人は朝鮮人に対して何かかんちがいをしているのではないかと思う。これからはもっと仲良くしていきたい。人種差別なんかをなくしたほうがいいと思う」(風間大介)

「朝鮮は近いけど知らないことが多かった」(高谷誠)

「朝鮮人が日本人をウエノムというのもしかたがない。(途中省略)いつの時代も日本人はその事をはじ、そしてこれからはちゃんと仲良くすることを思っていかなければならないと思う。できればもっと勉強したかった。社会の勉強が一番面白くて好きだった」(田中望)

「明治時代からの朝鮮との関係は、チョー・ヨンピルの言うように愛が足りないと思います。だからこれからの日本は、他の国のことを思う気持ちと人種差別がないことだと思えます。六年生で社会をやって一番思ったことは、平和が一番大切だということです」(鈴木智之)

「日の丸」「君が代」

職員会議では、毎年このことになると「踏み絵」を呈してくるので嫌なのですが、開き直ってしまうほかない。そう腰をすえてやり通す覚悟ができるまでは、胸がどきどきして仕方ありません。式次第の原案の中に「君が代斉唱」、会場図の中に「日の丸」があるか否か、管理職は目を光らせます。根拠は「指導要領」だけ。「指導要領」は何等拘束性がなく、むしろ批判に耐えるものでなければならぬと思うのですが、今の文部省を頂点とする教育体制は上意下達で、区教育委員会から徹底的に指導され、批判をする管理職はつぶされるのです。だから、校長は必死。

湾岸戦争が起こり、世界の平和が危うくなり、その手助けを日本もやるのではないかという危機感を職員の多くが持っていた時の職員会議の場では、何としても「日の丸」「君が代」を入れまいという意見が過半数を占めました。それでも、校長の職務命令で決まってしまうました。中には首をかけて実力行使をするひともいるようですが、世の中はそう簡単には動かない。むしろ職員会議の場で本音を出して、徹底的に腹藏なく議論することが大事。でも、その口火を切らなければならぬといつも思っているので心臓が破裂しそうになる。反対意見を出すということは自分の思想信条を明らかにすることなので、そうすると生きにくくなる。そんなこと

は憲法で保障されていることなのに、現実にはなかなか旨くいかない。

私たちは義務教育で「日の丸」「君が代」について何も教えられずに育ってきました。子供達には、史実を知った上で自分がどうするか選んで欲しいと思い、諸外国の国旗と国歌ができた経過、日本の場合を授業に組みました。

①外国の国旗と国歌

フランスの「ラ・マルセイエーズ」とフランス革命の理想を三色に表した国旗。オーストリアと西ドイツでは国歌をきめる時にハイドンの曲がどのように扱われたか。イギリス国歌第三節に歌われている国民と女王との約束のこと。アメリカ合衆国の国旗。

②「日の丸」はいつごろから日本の国旗になったのだろう。

対外国との儀式や交渉など、公の場面に登場してきた日本の国を代表する旗の例。一九三一年国旗法案不成立。

③「君が代」の意味と歴史

④みんなはどんな国旗がいいかデザインしてみよう

子供達の反応は様々でしたが、当然、国旗、国家、と思いついていたことが揺さぶられてびっくりしていました。

「国旗はやっぱりあった方がいいと思う。日本の旗はもともと決まっていたと思ったから、今日授業したことでほんとにびっくりした。国旗を決めるとしたら、もっと他の国（朝鮮

や中国）にいいといわれる国旗を作りたい」（鈴木智之）

「今までこのままだったのだから別にこのままでいいと思う。旗を変えることができるのなら変えたいという人は出てくるのかな。ペリーが来たとき、日の丸はあったか一つ一つ調べていったので良くわかりました」（土屋麻美）

向藤原朗君は、こんなはでな国旗を作ってみたいとチューリップの花を九〇度回転させた形に、白抜きの十字が真ん中にあり、周りに日本列島と宇宙の星を点在させた旗をデザインしました。子供達の頭は柔らかいので感心しました。

卒業式の日、教頭の再三の「歌え」という指導（？）にもめげず、子供達は自分たちで態度を決め、歌う子歌わない子様々でした。大方の子供達が、「君が代斉唱」の時に一斉に私たち教師のほうを見るので、「試されてる」とはっとしました。

人の痛みを自分のこととしてとらえられるように

他人事として差別を語るのではありませんが、それを自分のこととしてとらえることはたやすいことではありません。生きてきた環境や、自分を取り巻く状況の中で人間の認識が出来る上がりますから、自分の心の中にはないと思っていた差別意識に気づくためには、チャンスが必要です。せっかく授業で人種差別のことを学んでも、それを自分の痛みとして捉えら

れなかったら何にもなりません。

この授業のみでそれが育てられるほどの力量を私は持っていませんが、二年間の学級での子供達との付き合いが大いに助けてくれました。

学級には、事情があつて両親がそろっていない子、なかなかしゃべらない子など様々な子がいます。五年生の初め頃、「貧乏」「〇×菌」などと、お互いの心を平気で傷つけ合っていた子供達が、今ではすっかり変わっていました。

憲法を学んでいる途中のある日のこと。T君は朝から気分が悪く吐き気を訴えていました。数回、少しずつ吐いたのですが、我慢ができなくなり、帰りの会の途中に廊下に出たとたんに全部吐いてしまいました。私はどうしても抜けられない仕事があつたので、子供達に頼んで教室を出しました。なんの抵抗もなく片付けを引き受けたK君。廊下でキャーキャーさわいでいる五年生を睨み付け（ひと睨みで静かになるのだからたいしたものですよ）、ほうきとちりとりを手に、吐物を片付け始めました。F君も加わり、取り集めたものを新聞紙でつつみ焼却炉へ。雑巾掛けもできており、用事が済んで教室に私がもどったときには臭いもすっかり消えていました。後始末の後半のことと、片付けにまわったのは全部で男女合わせて八人とのこと、これは後で知りました。

吐いたのを見たら気持ちが悪いと思うのは当然です。その

場を逃げ出したくなります。それを乗り越えて後始末をしてあげるといふのはたやすいことではありません。子供達は、T君のことをばかにしたり軽蔑したりしてませんでした。自分と同じ人間だから大切にされていいと考えていたのでしょ。みんなの前で「吐く」という粗相こそ本人にとってみれば恥ずかしく辛いことです。その痛みを彼らは自分のこととして受け止めたことに、私はうれしくてうれしくて、彼らをもっともっと好きになりました。T君は、家庭の状況に恵まれず、決して身ぎれいとはいえませんでしたので、前は「貧乏」「〇×菌」と言われていましたが、とても明るい子でした。

「憲法」学習を基本に民族の問題を

朝鮮、アラブなどの民族の問題について学ぶとき、大事なことは、多くの知識ではなく、「人の心の痛みを自分のものとして受け止める」基本的な姿勢なのだろうと思います。それは、我々の先人の残してくれた「日本国憲法」の理念と、それができた経過とをまず学習することから一步を踏み出せるのではないかと。「憲法」を学ぶチャンスは、小学校六年に用意されていますから、丁寧に授業したいと思っています。

新しい・家庭科を・創るために

イワシとエビと日本人

柴田 栄子

(埼玉県立入間向陽高校)

選択「食物」の講座は毎年大賑わいである。「食べられる」魅力にひかれて集まってくる生徒たちに「ようこそ！食物へ」が、開講時の私の第一声であるが、こんな中からどんな「食物教育」をして彼等の目を開かせていくか……。 「食」をとおしての生き方教育が私の課題である。そんな教材の一つを紹介する。

1 「イワシとエビと日本人」の授業のねらい（実習を含めて5時間分）

- ・わが国の漁獲と消費の現状と問題点について知る。
- ・エビの輸入が生産国にどんな影響を与えているかについて知り、自分たちの食生活のありかたについて考える。
- ・大衆魚の栄養的な価値を知り、食卓に生かすための技術を

身につける。

以上のような観点からこの授業を展開してきたが、実習室の都合で、これから述べる授業「イワシとエビと日本人」が、クラスによって実習（つみれ汁、カバ焼き丼）の前になったり、後になったりする。実習の前にこの授業をやると「なまぐさーい、なんでこんな実習するの?」「気持ち悪い、魚は嫌い!」などという文句の量が少なくなる。「イワシをきらっちゃーいけないよ、ね、先生!」と自分に言いかけながら恐る恐るつまみあげて持っていく生徒もいる。

2 授業の流れ（5時間のうちの2時間分について）

- (1) まず長田弘の詩「イワシについて」（『食事 一期一会』）

イワシについて

きれいな切り身というわけにはゆかない。
いつでも少し腹しとあだをきられてきた。
出世魚じゃない魚かきもよくない。
赤イワシといったら切れない刀のことだ。
海の牧草というのを聞かぬがいいが、
つまりはマグロ・カツオ・ブリのニセだ。
海が荒れないうちに食はせなさい。
風靡の人にはついでに好かれなかつた。
けれども、イワシのことをかんがえるといつもおもいだすのは一つの音楽。
おかしなことに、思想という音楽。
思想というとおおげさなようだけれども、
ぼくは思想は暮らしのわざだとおもう。
イワシはおおげさな魚じゃないけれども、
日々イワシの食べかたをつくってきたのは
どうしてどうしてたいした思想だ。

への字の煮干しにしろすずし。
つみれ塩焼き、タタミイワシ無名の傑作。
それから、丸干し目刺し類どおし。
食えない類だて信心の足しになるんだ。
おいしいもの、すぐれたものとは何だろう。
思想とはわれらの平凡さをすぐれて活用すること。
きみはきみのイワシを、きみの
思想をきちんと食べて暮らしているか？

晶文社)を朗読して紹介する。「食べ方は生き方」を授業の柱として、このことがわかり実践できることが「食物」のねらいである度々話しているのだが、「思想を食べて暮らす」というこの詩人の言葉は私の好きな言葉である。
ちよっとそれるが、かつて私は、吸い寄せられるような家庭科の授業を受けた。いま思えば、その授業には「思想」が

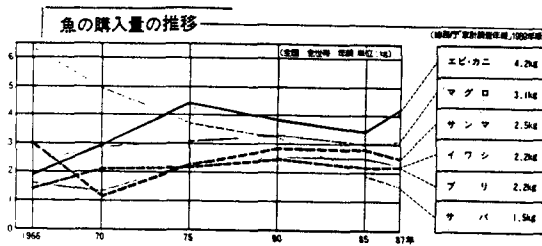
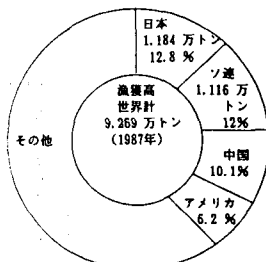


図1 (一橋出版DATA家庭科より)



日本図勢図鑑より作成

図2

あったのだと思う。魅力ある家庭科を私なりに考え続けてきて、「思想を食べて暮らす」「思想を着て暮らす」「思想をもつて生きる」……この意味を分かせたいと思っている。さて、思想のない食べ方が日本の今の「食」の問題を生んできたと言えよう。そのことを少しでも生徒たちに気づかせたい。(2) これから先はプリントに従ってまず予想をさせて自分の答を記入させ、それから統計資料をつかって正解を調べ書き込んでいくようにした。

・あなたの家庭ではどんな魚を良く食べる？ まぐろ、さけ、いか、さんま、ししゃも、えび、あじ、いわし、さばなどが出るが、5個書けない生徒もいる。図1を見て、一世帯当たりの購

わが国の品別漁獲高
(前面漁業のみ) (単位 千t)

	1960	1987	1988
魚類			
まぐろ類	390	340	317
さけ類	56	45	51
あじ類	94	351	460
いわし類	147	161	167
さば類	15	19	5.9
しんじょう類	498	4 610	4 814
いわし類	596	252	290
あじ類	351	701	649
さば類	287	197	292
まぐろ類	41	35	35
さけ類	509	99	85
あじ類	447	1 424	1 318
いわし類	45	24	23
計×	4 462	9 478	9 707
その他の動物			
えび類	62	47	47
かに類	64	77	69
いかに類	542	755	664
計×	58	50	48
貝類	772	1 131	991
ざざり類	5.1	9.7	11
あじ類	102	100	88
計×	14	145	160
海藻類	296	349	378
こんぶ類	140	123	132
わかめ類	63	5.9	7.0
計×	12	9.3	9.4
計×	286	169	180
総計×	5 818	11 129	11 259

農林水産省「漁業・養殖業生産統計年報」(1970, 1988年)に基く。養殖業および捕鯨業を含み。1)養殖わかめを含む。×その他とも。

表 1

入量のトップはエビ、イワシは4位であることを知る。

では四面海に囲まれ、日本の漁獲高は世界第一であるが、(図2)、日本の近海ではどんな魚がとれるのか? これも予想させるが、イワシがトップであることは知っているものが多い。ついでに二百海里漁業専管区域にもふれる。国勢図絵より作成した表1から、イワシが桁違いに大量とれることを知る。

・これら国内生産分の魚はどう利用されているのか? 75年あたりから飼肥餌料、缶づめに回される分が増えていることが、図3から分かる。とくにイワシは食料に回される分は1割程度、9割は養殖の餌になったり、肥料に回されたりしている(図4)。養殖魚の問題を飼料効率と安全性の面からここで話しておく。

3。

・そんなエビをどこから買っているのか? 世界中から買い集めていることがわかる。中でもアジア諸国からの輸入が多い(図5)。生徒が1位台湾、2位は? などと調べている間に、世界のエビの30%を日本が買っていて、世界一だと話

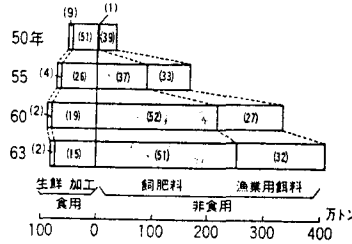


図4 いわし類の利用状況(推計)
—「図説漁業白書」平成元年度より—

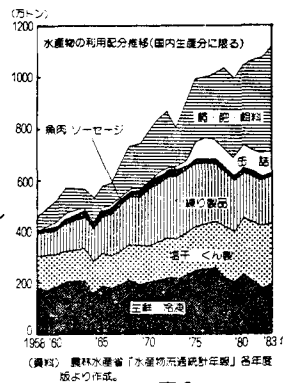


図 3

・さて、日本は世界一の漁業国でありながら水産物も輸入している。どんな魚を輸入していると思う? と聞くとい一位はさけ、ますという答がかえってくる。テレビのニュースになることが多いからだろう。表2より、水産物の輸入金額の多いものから書き抜かせる。エビが圧倒的に桁違いに多いことに気づく。それもそのはず、エビは輸入食料品のなかでトップである(表

す。

・ではエビはどんなふうにして生産され日本に輸出されているのか？ 海底をさらうトロール網は魚の産卵場を荒らすのみならず、えびとともにかかってきた成魚をも犠牲にしている。そしていま、えびは取り尽くされ、養殖が始まっている、そのための自然破壊。東南アジア漁民の漁場を取り上げ、魚資源を破壊し、そこへイワシの缶詰を売り付けている。自

日本の輸入
食料品の上位 10
品目(1986 年)

単位：100 万ドル

エビ	1,966
トウモロコシ	1,648
コーヒー	1,130
豚肉	1,041
小麦	886
さけ、ます	571
牛肉	553
たばこ	550
こうりゃん	496
まぐろ	417

食料品総計 19,186

輸入総計 126,408

(出所)『通商白書』
1987 年版

表 3

わが国の主要水産物輸入高

	1987 百万円	1988	
		百万円	千 t
魚介類計	1 159 275	342 460	...
うなぎ	32 346	27 593	19.0
ます(生鮮・冷凍)	...	9 182	11.5
さけ()	94 231	131 475	121.7
ひらめ・かれい類()	...	26 075	93.1
まぐろ()	83 615	100 781	206.5
にしん()	16 717	19 260	79.5
たら()	56 663	55 260	205.2
たいら()	10 844	9 634	20.4
さけの卵()	6 096	10 584	22.1
ししゃも(冷凍)	14 167	15 283	17.5
にしんの卵(冷凍)	4 965	10 299	41.8
にしんの卵()	10 803	9 922	10.0
えび(生鮮・冷凍)	363 905	365 174	277.5
いか()	53 456	66 425	75.3
いか()	49 425	44 403	101.8
たこ()	45 579	54 111	99.9
赤貝	12 286	12 103	23.3
うに(生鮮・冷凍)	...	15 016	3.4
にしんの卵(塩・干・くん製品)	27 994	24 054	9.0
さけ・ますの卵()	12 484	14 307	8.7
うなぎ(調整品)	28 245	48 125	22.1
かに()	...	11 171	6.1
いか()	11 520	14 404	15.9

1) すり身などを含む。2) 生きているものを含む。

表 2 (日本国勢図絵から)

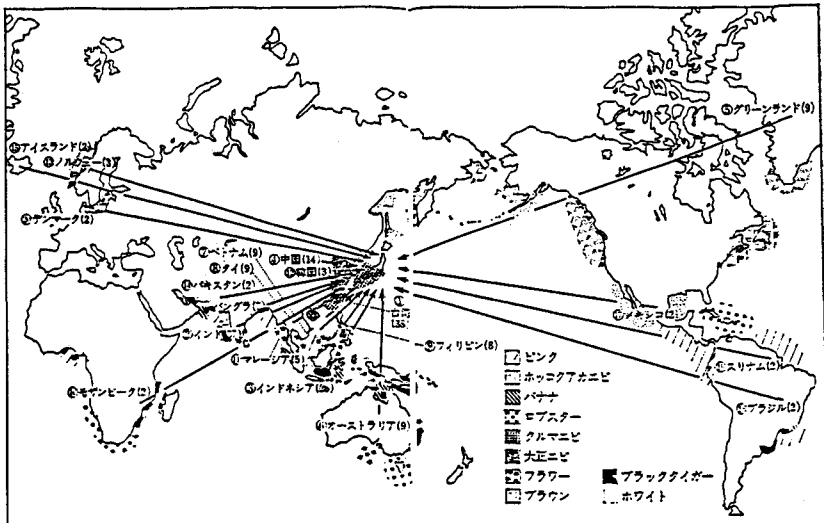


図 6 世界のエビ分布と日本のエビ輸入相手国(1986 年)
(出所) 分布図は同国説明書「海産物」および、

①～⑩は輸入量の順位。()内の数字は輸入量(単位：千トン)
水産庁「エビ産出調査報告」を参考にした。

給自足のできた漁民の仕事を奪い、エビの加工場で日当100円ぐらゐで働かせる。スーパーできれいにパックされて売られているエビが、こうして冷凍されて日本に届く。このあたりへくると、怒りが込み上げてきて思わず力が入る。

残りの時間で「エビと日本人」（岩波新書）の抜粋を読ませて、感想を書いてもらい、次のように話して、2時間の授業を終わる。

「イワシを考えていたらエビが出てきて、エビの背後を調べたら、私の知らなかった問題があることに気づき、みんなにも是非知ってもらいたいと思って授業に取り入れた。日本は飢餓から飽食まで、四十年でかけあがってきた。この豊かさは、一方で、東南アジアの人たちの生活を破壊し、その犠牲の上に成り立っている豊かさであることを知らなければならぬ。私たちがおいしいものを買いて求め、使い捨てて生活を続けられ続けるほど、アジアの人たちに犠牲を強いることになる。私たちの食卓はまさに国際化している。私たちが食べているものが、世界とどう繋がっているのかを知ることが、大切な事ではないだろうか」

3 おわりに

年々エビが安くなる……と思っていた。そろそろ手が出る値段になった頃にこのことを知って、とても買えなくなつた。資料では、日本人一人当たり3キロ、大型えびで百匹食

べていることになるという。生徒もそうであったが、それ程はとても食べているという実感はないが、ますます手がでなくなつた。

さて、新指導要領の改訂の基本方針の一つに、「国際理解の推進」がある。家庭科の中でできる国際理解教育とは、世界とつながっている自分たちの暮らしを自覚させることではないか。私たちのぜいたくが、第三世界の人々の犠牲の上に成り立っていることを知ること、その自覚を持つのと持たないのとで、消費行動に違いが出てくるものと期待したいと思う。今、消費の問題―何を買いだんな暮らしをするか―は、経済の問題よりも生き方の問題であると思う。

新しい家庭科の中で考えねばならないことは、尽きることはない……。

4 生徒の感想から

今日の授業で、東南アジアの人々の暮らしが多少なりともわかつた。われわれ日本人と大きな違いがあり、東南アジアのひとに申し訳ない気持ちがあった。今のわれわれのくらしからは、東南アジアの何十倍もぜいたくしているが、東南アジアの人たちは、それと引き替えにとても辛い生活をさせられている。ぼくはとても考えさせられた（男子）

私たちはエビをととてもおいしく食べている。ぼくも食卓にエビのてんぶらが並べられるとうれしくなる。しかし、グル

メなんて言って食べているエビが、輸出国の人々を苦しめているとは知らなかった。多量に輸出すれば、それだけお金が入ってきて国が豊かになってよいと思ったのに、その国の人々の生活まで変えてしまうのはよくない（男子）

スパーでエビをみると、ここへくるまでのことを思い出すようになりました。東南アジアの子供達が一日100円で働いていると思うと、自分たちが無駄遣いしていることが情

け無くなりました。私たちの食べているものが沢山の問題を抱えていることがよくわかりました（女子）

参考文献

- ・『エビと日本人』村井吉敬（岩波新書）
- ・『エビと食卓の現代史』宮内泰介（同文館）

「むらき数子」はペンネーム。その由来を訪ねると、「熱し易く冷め易い性で、ムラ気だから自戒を込めて」なのだとおっしゃる。いやどうして綿密な調査と記録に基づく論稿はともムラ気だなんて信じられません。

早稲田大学の「語学教育研究所」でパートの事務のおばさん（ご本人の弁）を勤めながらの研究生活。二年前まではフルタイム勤務で、長いこと外語大の研究室にいらした。

戦争中に母親世代が何を考えていたのか知りたくて、十五年前から十年間、『銃後史ノート』編集に加わって勉強する中で、「衣」

の分野に目を向け始めた。

大正期に現われる大正新中産階級と呼ばれるいわゆる女学校を出た女が主婦になって家事を

切り盛りする、そういう階級の女子たちの暮らし方がある種理想とされたわけだが、それが戦後、高度経済成長を経て大衆化した。家族や子供に手をかけ、こぎれいに暮らすという



〈現代衣生活考〉

の

むらき数子さん

暮らし方、「暮らしの近代化」の中身を、特に常識とかしきたりとかにとらわれがちに「衣」の分野の研究を通してちゃんと検証してみたいとおっしゃる。それは自分の生活の原点を知ることであり、選んでいるようにい

て選ばされている暮らしから自立的に生きることもあった。

女が書くということ、書いて自分を表現するという生き方をその怖さも含めて、「ママ」とは言いたくない養母」さんから学んだという。お母様が亡くなられた後、お父様が再婚されたその方は「家族のために自分を殺して生きていた」お母様とは対照的で、いわゆる良妻賢母ではなく、家事はサッサとやって、後は机に向かってものを書いたり、本を読んでいた人だった。辛辣な随筆を書き、友達を大切にし、自分を貫いて生きる姿に、いろいろな面で目を開かされたという。数年前あつけなく亡くなってしまわれたそう、そのお母さんに読んでもらいたかったと残念そうにつぶやかれた。

（河村）

新しい・家庭科を・創るために

「衣」の歴史を考える

芦谷 薫

(東京都立国分寺高等学校)

授業のはじまりは紙芝居風

「さて、何から見せようかなあ……」三冊の本を、チラリチラリと見せながらつぶやく。えんやこら運び込んだバスケットには、今回の種物がいっぱいつまっている。

「うん、まずはこれ」と、18世紀モローの絵の写真を見せる。写真の注『大盛装でオペラから帰りがけのパリの貴婦人。ドアを通りぬげるために横向きになっている』を読みあげる。当時、貴族の女性の服装は、胸高、超細のウエスト、ぐーんと張った腰を作る巨大スカートが特徴だった。この三点セットを支えるコルセットや鋼鉄の骨組み入りペチコートの写真、巨大スカートとのバランスのため顔の長さの五倍も高く

結いあげた髪の写真、正常な胸ときつく締めたために変形した骨格や内臓の絵、はては最も下のろっ骨をはずしてまで細くくびれさせた胴の写真を次々と見せる。

「あーあ、あんなドレス一度は着てみたいと思っていたのになあ」などとワイワイ、ギャーギャー反応してくる。

フーッと深い息がもれ、声は発せずとも「どうして？」と問いかける目がたくさんというクラスもある。

ページをめくって、小さな写真を見せる。「両端には小さなビーズの靴ね。この足は『てん足』。左足は正面から、右足は横向きで土踏まずの方が見えるよう足を組んでいます」「エーッどうなるの?」とざわめく。別の本の大きな写真を見せる。足の裏側から撮ったもの。見つめる生徒の顔が

歪む。黒板に、骨や皮膚がどのように変形していくのか図示しながら、何故、どのように『てん足』がつくられていったのか、パール・バックの『大地』、駒沢喜美の『魔女の論理』にふれ、私自身の中国の旅で若いガイド達と話したことなどもまじえて、社会的背景を話す。

骨を変形させてまで小さくした足を「百合のような足」とよび、その大きさは十数センチであったこと、「百年前のエレガンスは、ウエスト五十六センチ以下⁽⁴⁾」といった具体的な数値を出すと、思わず我が身に視線をおとす者も出てくる。

「何故なのかねエ、我が身を変形させてまで当時の美の基準にあわせるのは？ 誰が美の基準をつくったのかねエ。なんでやめられなかったのかねエ。ひとつ考えてみてください」と語りかけて休憩に入る。

三冊の本は教卓の上に置いて去る。必ず何人かが教卓の隅りに頭を寄せ合っている。

ひき続いてショーステージ風

休憩後もさっきの続きをちよっぴり。日本の「きもの」も時代によって着方がちがう。重い帯やら三つ重ねを着たのはどんな人達なのか。田畑や浜や炭坑で働く男女はシンプルで自在な着方。トップレスの写真さえあってビックリ。鹿鳴館の洋装女性は、パリの貴婦人と変わりはないが、看護婦やバ

スの車掌さんから女性の洋服は次第に広がる。大正時代の種々のスポーツウェアや元祖お嬢様の写真なども見ながら、少しづつ先程のショックをほぐして、写真を見るのはおしまいにする。

「さて、次は、あんまりおなじみじゃない服装を見せようね」とバティックの布を何枚か見せる。これを買ったバリ島の人々は冗談大好き。島の人々との会話がとつてもおもしろかった。そんな体験談もまじえながら、この布一枚つくるのに数カ月もかかるわけなどの説明をする。

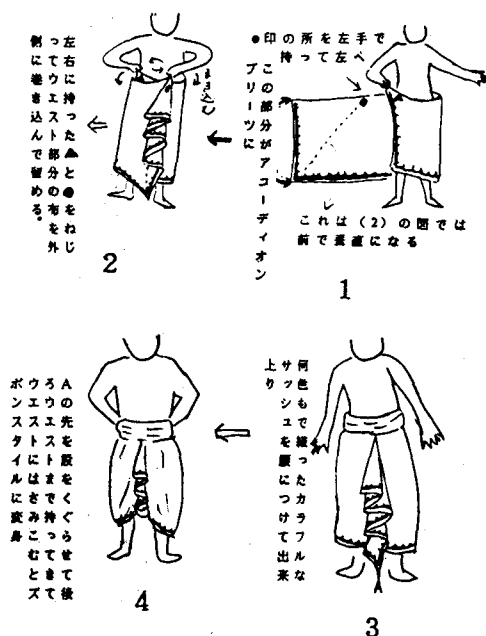
「この布がスカートとズボンに変身します。皆さんは今スカートだから、私が着けてみます」と、教卓を端にもっていて教壇をステージに変える。

「この三方のボーダー模様が、着けると実に生きてくるのね。よく見てね」と、やってみせる。（次頁の図）

バティックの布だけを着けた段階では「フーム」という顔をしていた生徒達、金糸銀糸にカラフルな糸を使って織りあげたはでなサッシュでウエスト部の布のしまつを被ってしまうと「なかなかじゃない」てな顔をする。賑々しくお祭的になって、皆も満足気なニコニコ顔になる。

「この前のアコーディオンプリーツのお飾り部分を、こうやって後にまわすと、ズボンね」

「さあて、次はこの布。どれ位長いか、広げてみよう」



一方を生徒にもってもらい徐々に移動すると、教室の端から端、ステージをゆうにはみ出してしまふ。着つけた時に、二辺に平行に入っているボーダー模様がどのように生きてくるのか注目するようにと言ってから、着たい人を募る。

自薦他薦で出てきた生徒に、短いブラウスと綿の紐付きベチコートを着せてから、いよいよサリーの着つけだ。売ってくれたインドのおじさんのプリーツをたたむ手さばきの見事だったことなど話しながら、肩をピンとめて出来上り。

大層エレガントなサリー姿の友達を見て、皆の目は輝く。着た本人は若干照れながらもご満悦。

動いてみると、前にとったひだが美しさだけでなく動きやすいためでもあることがわかる。腰と肩だけをきちんと固定するだけで着くずれせず、また他の部分はゆったりしているで、「同じウエストをしめても、一本の紐だけなのでものとは比べものにならないぐらい楽」とは着た生徒の感想。

最後に、アフリカの『KANGAS 101 USES』から抜粋した自在変化の布の変身指南のプリント、インドのサリーやドゥティ、古代ギリシアのキトン、古代ローマのトーガ、古代エジプトのロインクロスなどの着装方法図、トルコのシャルワールや日本のモンペ、朝鮮のチョゴリなどを入れたプリントを配る。しばらくながめる時間をとってから、次回にこのプリントを使う旨予告をして、最初の授業をおしまにする。

シート型とボックス型

二回目の授業は、先回渡したプリントの一枚から始まる。『ボックス型はおなじみだが、シート型は……自在変化の妙味』が見出し。

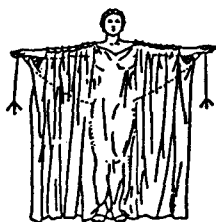
We 本誌88年5月号の、内山裕子さんの文章を中心に、前述のシート型の図をたくさん見せる。時間の都合でショーはしない。

① ドーリア式キトン

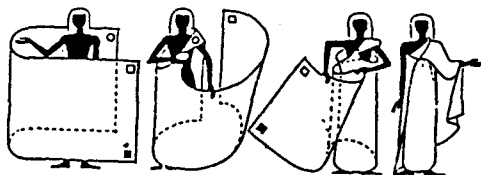


1枚の布の簾かた

② イオニア式キトン

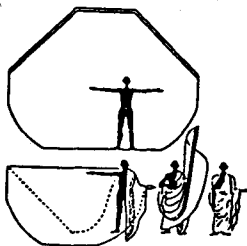


布の上部をとめがねでつなぎ、
手に持っている紐で腰をしぼる。
(①②『絨衣の文化人類学』)

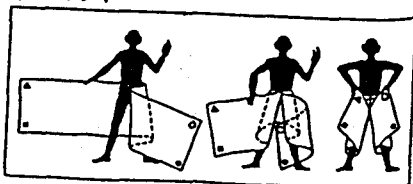


エジプト女性の衣服の巻き方

④ トーガ



⑤ ドウティ

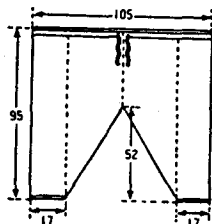


(④⑤『存装の歴史』)

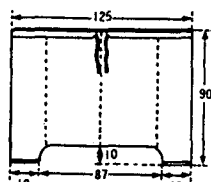
2-61 ズボンの系譜



18世紀のベルシャの女性



日本のモンペの寸法例 (cm)



トルコのシャルワールの構成例 (cm)

「シャツ型とボックス型の中間のものもあります」とプリント上のシャルワールやモンペ、きもの、チョゴリを見、持ち込んだバスケットからとり出したインドの丁字型チュニックとパンツ、エジプトの丁字型上着も見せ、どんなところが縫い合わされているのか注目して見る。写真と図がたっぶりの民族衣装の本を回覧して、いろいろいっぱい見る時間をとって、教科書も参考にしながら、様々な衣服を構成上の分類を

③ サリー

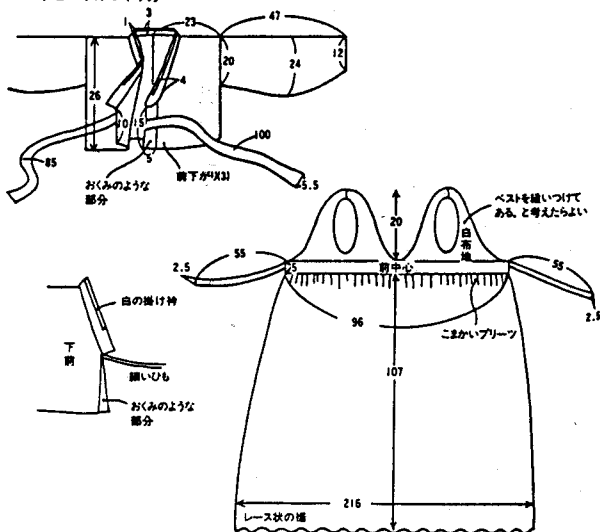


サリーの着かた

1. チョリ(ブラウス)とベティコートを着た上に、サリーの一端を右脇のウエストにはさむ。
2. 前を通り、後ろに1回巻き付け、上端をベティコートにはさむ。
3. 4. フリーツをだたむ。10センチ幅ぐらいで8~10本ひだをとり、上端をはさみ込む。
5. 6. 残り布をもう1度体の後ろに回して、右脇下を通す。
7. 8. 胸を斜めに横切った布幅をきれいにフリーツにだたんで左肩にかけ、後ろに垂らす。

(『家庭科教育』家政教育社)

チョゴリのつくり方



(『新家庭一般指導書』 一般出版)

し、その特徴を整理していく。

この回の最後は、きもの一種でゆったりはおれるはっぴを手ぬいで作ることにについて、それを取上げる理由と注文を話す。「シンシンに振り回されることなく、自分の手と針と糸があればいつでもどこでも、小さなスペースがあれば出来る。好きな音楽を聞きながらでも良し。道具が極単純だから身体の五感を十分にひらくことが出来ること。洋服とは全く違った発想に出合い、ラフに縫うところしつかり縫うところなど手加減をしながら、先人の知恵をたくさん発見できること。文化祭などで、クラス全体ではっぴを使いたい時は、女子と男子でしっかり話し合い、よい方法を見つけることetc」

インスピレーションゲーム方式の三回目

三回目は、『何故着るの?』の質問に、あなたならどう答えるか? いろんな場面を考えて、全員が出来るだけ異った答え方で間を置かず次々答えることというのがルール。だが全員が答え終るまでにはたっぷり一時間はかかる。

出された答えを黒板に書く。似たもの同士は色チョークでかこっていくと、それらは、被服のいろいろな働きの説明でもあり、また人間は何故着るようになったのかという起源の説明にもなる。教科書も参考にしながら、働き(機能)は、普

遍的ではなく、時代や地域、社会状況によって変化していることを考えてみる。

起源については、今までに出された諸説と皆が考えたの一致すること、そしてそれらの説への反論はあり得るか、プリントの絵を見ながら考えさせる。反論できない説——実用説はその普遍性故、被服の本質を示していること、その中でも活動性に注目して、次回は被服の歴史を見てみようと言いつて終える。

四回目は手づくりスライドで

村上信彦の『被服の歴史』を土台に作ったスライド上映。服装の歴史を活動性の変化から見ると、その時代社会の生活や制度、価値観や人間観が見えてくる。資料プリントは、家永三郎さんの幻の教科書に書いた文を中心に作成したもの。おまけにプリントは、『シンデレラ——ガラスのくつの神話』^(m)『女も男もパンツルック——今はあたり前だけれどこんな時代もありました』⁽⁸⁾『ネックのデザインは装身全体のムードを支配する』⁽⁹⁾の見出しをつけた三種類。

ここで街頭調査の課題——被服の機能、歴史についての学習を踏まえて、街頭で被服や服装を watchingし、年齢、性、職業などによる特徴や慣習、さらに個性の表現や主張などについて考察しなさい——を出す。

「いがいとおもしろい」でうれしい私

こんな授業と「野性の感性をとりもどせ」キャンペーン付きのはっぱ製作を通して、生徒は自分の持ち札以外の衣服に興味を広げ、被服への固定的な思いの端を徐々に柔らかくとかしていく。

このところ毎年、文化祭、体育祭前になると「先生あの本貸してください」と民族衣装の本を貸りに来る。韓国出張のお父さんにねだって買ってもらったとチョゴリを見せに来る生徒、「昔読んでおもしろかった」と、『ズボンとスカート』（福音館「たくさんのふしぎ」シリーズ）をもって来てくれる生徒。一学期末のレポートには「たかが被服、されど被服」を書く者あり。日常のあたり前に注目すると次々に見えてくること、発見したことがたくさん書かれている。

制服の怪、ポケットの数の不思議、映画を見る目がもうひとつ加わった、社会科で学ぶ歴史だけが歴史じゃない、和裁の中のリサイクルの発想や柔軟な考え方作り方などなど。

「被服の授業いやだな」という生徒が「いがいとおもしろい」といつてくれたら、とってもうれしい私。

(注)

(1)『着装の歴史——人間と衣服の相関』

R・B・ヨハンセン 文化出版局（絶版）

(2)『みっともない人体』

バーナード・ルドフスキー 鹿島出版会

(3)『一億人の昭和史——日本人③三代の女たち(上)明治・大正編』 毎日新聞社

(4)『毎日新聞』'90・4・18付

(5)『世界の民族衣装——装い方の知恵をさぐる』

田中千代 平凡社

(6)『日本人の洋服観の変遷』

家永三郎 ドメス出版より作成

(7) (2)と同書から作成

(8)『服装の歴史』 村上信彦 理論社より作成

(9)『お茶の水女子大学家政学講座・⑨服飾意匠学』

石山章 光生館より作成

◆ウイ書房が世に贈る、新しい時代を志向する教育書◆
宮坂広作『共生社会への教育』

——生活主体の形成を求めて——（税込み二二〇〇円）

幼児教育、小・中・高・大学教育から社会教育・生涯学習までを見通した、教育論の集大成。経済優先でつっ走った日本社会がほころび始めた今、教育は自然・他者と共生するライフスタイルの創造をめざさなければならぬと、熱っぽく説く。『消費者教育の創造』と共にぜひあなたの机上に。

荒野のバラ

田中裕一

「鎮魂の海峡」に架ける虹

— 私たちにできる事は山ほどある —

1 健全な言語は健全な思想に宿る

「湾岸戦争、きょうの見所」と始めたNHKニュースに私は絶句した。復活したMキャスターは、「湾岸戦争の第一報ができたなんてキャスター冥利につきる」と悦に入っていた。科学番組ではかつてYアナが「バカチンカメラ」と連発していたし、雲仙噴火の取材で、「噴火はいつ終わりますか」と聞いた放送記者もいた。NHKも日本語の師表を自認するのは止めたがいい。「不適切な表現がありましたので」と後で断わっても、どこは決して言わぬ嫌な体質も私は嫌いだ。これらなんも考えない人々の日本語を聞くに不快で苦痛である。健全なる言語は健全なる思想に宿らうものを、

これでは不健康な思想が文法を操っているに過ぎない。私なら「きょうの重大局面」「キャスターとして本当に残念」「オートフォーカスカメラ」と正しい日本語を使うのだが。

こうした体質だから、「多民族国家の知的水準」を論じた首相の発言を一家以外のマスコミは皆パスしてしまい、外国記者の一齐スクープに慌てた。しかもその時ですら、「単一民族国家」「ネクタイしかみない女性」論には気付かなかったのだ。

町田市で、九一年夏に開かれた「ゴヤ・ディックス・浜田知明、戦争—画家は見た」展は、同時開催のテレビジョン強制収容所で殺された子供たちの作品展示とともに、「国際貢献」「PKO」などで風化する憲法の危機に、まことに出色の企画であったことを賞讃したい。未だ政府も、教育界も、芸術界も、マスコミ界も、自らの手で戦争責任を決済していない今日、浜田知明氏は、日本の加害責任を踏まえて人類のテーマに迫る点では美術史上異色で、稀有の作家である。

戦時中の日本を風靡したNHKの「国民歌謡」—初期には名曲を生んだが—には、次のような歌詞がある。

「出てこい ミニッツ・マッカーサー 出てくりや地獄へ逆落し」(西条八十)

「万歳ヒットラー・ユーゲント 万歳ナチス」(北原白秋)

「ゆるがぬ富士に墓場をゆだね 永久の誉に生命をかへよ」

(野口米次郎)



浜田知明、銅版画 初年兵哀歌（風景）1952年

浜田氏は、中国戦争での（風景）を、解剖学者のように透徹した知性で捉えた。

日本が、アジアで何をしたか、天皇の軍隊が中国の婦人を突き刺した木は、見る者の脳天を突き刺す。浜田氏はアトリエで、メスを持つ解剖医にたとえて、画家の立場を私に語った。

「降魔の利剣ふりかざし 亜細亞連盟十億の 先駆となりて 諸共に 世界を喰う者うたん」（土井晩翠）
「皇軍動き兵征けば 平津すでに正義あり」（土岐善磨）
「海ゆかば」を作曲した信時潔はじめ、これらの芸術家とそれを動員したNHKの責任は大きい。また戦争画での藤田嗣治・宮本三郎・佐藤敬・中村研一らや、文学報国会の責任も不問のままである。人類の課題への背反は、卓越した技術によっても弁明できない。自国ファシズムへの安易な陶醉と加担の域を出ない責任は、全アジア人類の視点から、常に批判

されるべきであろう。

2 貧相な教育の重大な責任

今年の九月十八日は、六〇年前の午後十時過ぎに、関東軍が柳条湖事件を起こし、破滅的なアジア侵略への第一歩となった日である。今年の十二月八日は、太平洋戦開始五十年目に当たる。革新的な人でさえ、五月三日は憲法集会を持つが、その翌日が中国人に忘れ得ぬ日帝打倒の五・四運動記念日という意識がない。七夕の七月七日は日中戦開始の日であり、終戦の八月十五日は、三十六年の日帝支配から韓国が解放・独立した光復節と重なることを忘れがちである。一九二三年の歴史年表では、大震災と帝国ホテル完成はあっても、日本で罪なく虐殺された六千人の朝鮮人や、労働者・社会主義者らの記述はない。彼らの生命は、帝国ホテルより軽いであろうか。

政府もマスコミも、日本とアジア諸国との関係を「不幸な関係」と表現する。性懲りもなく側近や官僚が採った表現だろうが、加害・賠償責任も不明な、第三者の災害の如き表現で、戦争を起こしたではなく、「起こった」と書く教科書みたいなものだ。対中では小川文相が訪中を取り消され、対韓では藤尾文相が罷免されたのだが、その他歴代大臣たちの、歴史的国際認識の幼稚さを見れば、その国辱は枚挙に暇もない。だが彼らの貧相な世界観もまた、貧相な歴史教育の犠牲

当停留所一時使用中止のお知らせ!!

1. 期 日 平成 3 年 9 月 15 日 ()

2. 時 間 自 16:00 ~ 21:00

3. 理 由 祭の行列通過に伴い
バス乗降が危険なため

4. 代替停留所 藤崎宮前停留所を併用下さい
※下見園参集



熊 本 県 バ ス 協 会

私たちの抗議で、バス停標示板の「ボンタ祭」とあった「ボンタ」に紙を張って消した。加藤清正が朝鮮を「滅ぼした」とする俗説で「ボンタ」と永い間呼ばれて来て、今年やっと「市政だより」でその過ちを認めた。

なのだ。

3 アジアの歴史を見直せば―

渡来人の役割りの重大さや、遣隋・遣唐使をめぐる国の内外の緊張関係は、古代史の再検討を迫るだろう。元寇についても、二回の戦役と暴風雨と国内努力で理解するほど、元の国力は甘くなかった。授業をした時には、ここが面白く展開した。モンゴルが内陸遊牧民族であることに気付いた生徒がいた。造船・航海・海戦に際し、被征服民族と連合を組まざるをえない元軍、被征服民への過大な戦費、兵員・造船の要求へ理解が進み、ベトナム、高麗、中国民衆の激しい民族抵抗そして日本遠征の本当の断念―つまり東アジアの広範囲な民衆の歴史の動きの中で、日本の歴史も学ばれていったのである。

広辞苑が、三か所の「朝鮮征伐」を「出兵」に改訂したのは一九七六年補訂版からである。この侵略では、軍功の証明に朝鮮民族の耳のちに鼻を削ぎ、それを塩漬けにして奉行の検分に供した。京都豊国神社近くの耳塚は、その凄じい蛮行の証明である。今に残る鍋島・吉川両家文書では、一五九七年八月から十月までのひと月余に、鼻請取状として二九二五一人分が記載されている。この侵略における秀吉や清正らと共に、伊藤博文もまた韓国人の不快感を刺激する一人である。

近代史三十六年間の朝鮮植民地化は、土地収奪、母国語・母国名の禁止・生活上の諸権利と諸文化の抹殺等、言語に絶した。失業・流民化・差別・虐殺・強制連行・強制労働・「慰安婦」・特攻隊編入・被爆死・棄民：今日まで償われることのない民族の屈辱は計り知れない。「不幸な関係」という白々しい表現を、加害国民の一人として深く愧じる。

伊藤博文暗殺の安重根は、救国の志士として碑が建立され、「先生」と尊敬されるが、日本には伊藤の「元勳」認識しかない。

反日的な関妃（かんき）を一八九五年弘暎の王宮に襲撃、虐殺した日本人四十八名中、二十余名が熊本出身である。南京虐殺の主力部隊も熊本の兵団であることを思えば、やり切れぬ思いが私たちの実践をつき動かすのである。

とすれば、未だに朝鮮侵略を「出兵」、政権移譲を「大政奉

還」、帝國主義強化を「國際的、地位的向上」、朝鮮植民地化を「韓国併合」、シベリア干涉を「出兵」と學ばせている教育に、日の丸・君が代教育と同じか、またそれ以上の危機を讀みとるべきだろう。現状放置は、學問と教育の怠慢である。

4 だから どうする

加藤清正が朝鮮を滅ぼしたという俗説を持つ熊本本の「ぼいた祭り」は、永年隣国に不快感を与えて来た。この藤崎八幡宮例大祭から「ボシタ」の語を撤去させるのに私たちは二十余年を費やした。その間名物「朝鮮飴」の口上から「征伐」の語を消させ、小学校の清正像を「教育の資としない」と校史に記入させた校長交渉などの苦勞を重ねた。

太平洋戦争の授業で、私はずっとアジア諸国の教科書をプリントして、被害国からも學ばせた。地元紙がそれを報じて三か月に及ぶ大論争となった。この一九七九年の論争は、無名の市民・学生らの支持した私の日本侵略説に歩があったし、私は一步も退かなかった。やがて中国、韓国始め世界各国から日本の教科書が激しい批難を浴びて、渋々「侵略」と表現したのは、この論争の三年後の一九八二年のことであった。

先立つ一九七五年、私たちは長崎に被爆部落と被爆韓国朝鮮人を取材した。私は、基本的人權を學ぶ総合學習に構成するため、再度佐世保中央病院に入院中の、故・李奇相氏を訪れ、その生涯の痛根事を話していただいた。被爆後意識の戻

った李さんが救護所に火膨れ姿で這いずり込んだ時、怒鳴りつけられた。「朝鮮人なんかにつける薬なんかあるか！」

被爆者として被爆者からも差別され、ぼろぼろになり死んでいった仲間を思い、時に涙を流し絶句する李さんだった。李さんと固い握手をしながら、私はアジアの中の日本の進路を思い、李正子さんの「与えたる傷の痛みを知らざりし日本の友よ戦争とは何」（朝日歌壇）を反芻していた。私たちのなすべきことを學んだ一日であった。

長野松代大本営造営で酷使された幾多の朝鮮人に学び、その保存運動に先鞭をつけたのは、篠ノ井旭高校生であった。岡山では倉敷中央高生が、地域でドキュメントビデオを制作している。

故郷忘じ難い韓国人たちは、一九四五年帰航中遭難する。十月十四日の台風で百五十人、九月十八日は百四人、計二百五十四人の遭難慰霊碑が、杵岐清石浜に建立された。杵岐高生たちは浜辺の遺骨から歴史に関わり始める。セシウム¹³⁷の検出から、それが広島被爆の韓国人と知る。彼らの聞きとりと調査は、レポートからシナリオへ発展、一九九〇年の文化祭でのその「鎮魂の海峡」熱演は、町民の心をつき動かし、多くの人に衝撃を与え、彼ら自身をも変革した。この真実を知った怒れる若者たちの目覚ましい力に、アジアの中の日本の未来と、教育の可能性への希望を、私はつなぎたいのだ。

家族と家庭科

● 酒井はるみ

現行指導要領における老人問題と

男女共学用教科書

現行の'78年高校学習指導要領は'82年から施行されている。すでに'89年に新指導要領が出て'94年施行となったので、'78年要領は十二年間続くことになる。

'78年要領では「家庭生活の設計・家族」となり、家族の何をとりあげるかは全く示されていない。六種類の教科書について比較すると、章立てなどほどの教科書も似通っているが、二つの大きな特徴を指摘することができる。一つは、前回が危機意識をもってとりあげられた核家族化が自明のこととして位置づけられ、わずかに触れられた老人問題が強調されてきたことである。第二の特徴は、国連婦人の十年を背景に、男女ともに学べる教科書が「ひとりの生活者としての自立」「新しい生活文化の創造」をめざして刊行されたことである。

'70年要領における教科書は「拡大家族構成がくゞれ……老人の経済的貧困、精神的孤独、身体が不自由になってからの生活などが新しく問題となってきた」（高家・実教）に典型的にみられるように、老人問題を「老人・病弱者の保護」とか「幼老の保護」など、家庭（族）の機能の一つに位置づけていた。'70年は日本の六十五歳以上人口が七・一％に達して、高齢化社会に突入した年である。ヨーロッパ諸国ではすでに一〇％をこえており、高齢者対策をもつ福祉社会が実現していた。しかし、日本では'63年に老人福祉法が制定されたくらいで、高齢者対策をすすめるためのデータさえみあたらないほどの牧歌的情況であった。十年後、'83年の教科書になると、老人問題は家族の機能ばかりでなく、核家族化や家族の役割など多様にとりあげられ、老人問題への関心の高さと認識の急速な深まりが印象づけられる。

老人に対する「精神的な支えと身の回りの世話……は親族以上に適切に果たせるものがない」（中教）という考え方は共有のものが、厳しい現実は見通できない。スーブのさめない距離に住んでゆききする修正拡大家族の紹介（二橋）や、病院や老人ホームなどの充実が家庭の負担を軽減している（学研）など、老人が家族（庭）の外にはみ出している。結婚で別居した子どもが「老齡の親をひんばんに訪問して、必要な援助を分担し合う」という欧米の例を紹介しているの

も、別居老親とのつきあい方を考えさせようとしたものと思われる。

社会的援助として、所得・住宅・医療保障とともに老人福祉法や老人家庭奉仕員制度などの福祉行政サービス、住民の互助ボランティア活動をあげた例もある（一橋）。老人問題に限らず「家庭に対する社会の役割」として行政の役割をとりあげた次の文もある。

「……地方公共団体では、公園・道路・橋など住民の生活環境の改善、学校・図書館・美術館など教育・文化面での仕事、児童福祉・老人福祉など福祉関係の仕事、防犯・防災・交通安全などの仕事、病院など健康に関する仕事、ごみ処理など保健衛生上の仕事を行っている。……」

かつて中学校職業・家庭科で「ゆりかごから墓場まで」を扱っていたのを思い出させる（'90・12月号）。家庭科の一つの蓄積とみることはできよう。

つぎに男女がともに学ぶことを想定した教科書についてまとめよう。まず、挿し絵や写真に男性が登場し、ほぼ半数を占め、「家庭科イコール女」の世界から「女・男の世界」に変わった印象を与えている。

家庭は男女の自立と連帯にもとづいて形成され、妻が働くことは世界の潮流である。にもかかわらず、家事労働の分担において、日本の男性の家事時間の少ないことを批判して

「家庭が対等な人格によって結ばれた夫婦の共同生活の場であるかぎり……かたよりはあってはならぬ」とし、妻に過重負担を強いるのみならず、女性の活動の場をせばめ、地位の向上を阻み、社会全体の発展を遅らせるとはつきり記している。高齢者の問題も「やがて訪れる私たち自身の問題として」取りくむ必要があるのだ。これら、常に国際社会の動向を視野に入れてとらえている、引用した文章は、執筆者たちの立場を物語っているといえよう。

「婦人が……男性と同等に開発過程に貢献すべきならば、家庭内で伝統的に夫婦のそれぞれに割り当てられてきた役割を状況の変化に応じ、たえず再検討、再評価することが必要であろう（『国際婦人年世界会議・メキシコ宣言』'75年より）（一橋）。

このような特徴をもつ男女共学を前提とした「家族」の内容は、「家庭経営の立場から、女子必修四単位」とされた主婦準備教育とは全く異なり、家族観も「つくる家族（庭）」であって「営む家族（庭）」でないことがはっきりしている。

わが国初の男女共学用教科書が、家庭科始まって以来の家族領域を、真っ向から批判的に再検討する姿勢を保ち、指導要領の制約のなかで、男女が学ぶ新しい内容を対抗的につくりあげたことは、家庭科に大きな一石を投じたものである。

男性学への契機

魔男の宅急便

■諸橋泰樹

ぼくが男語を 話せるわけ

研究所といい大学といい、長年、常勤ではなく「日雇い」の仕事をしてきたぼくは、まさに「モラトリアム」のまま生きてきたことになる。気のきいた同世代なら企業の係長ぐらいやっている齡なのに、だ。その多くは、大学四年間、大学院には二年プラス六年で八年も在籍していたから合計十二年、「学生」としての特権を行使してきたことになる。しかし、このようなぼくも、実は大学に行く前に既に半分「社会人体験」をしているのだ。

ぼくは大学前から大学院の前半まで、つまり二十代の大半を、七年近く、「準社員」の身分で地元の大重量販店で働いていた。庄司薫の小説の主人公を気取って自分で「力」を養うべく大学に行かないことを選んだのだが、最初の二三年は、同世代が大学生として、遊びに恋に、市民運動・学生運動に、旅行にバンド活動にと華やかな

青春を生きているさなか、およそ悲愴な気分でも月に三十日も働いており、「力」をたくわえるどころではなく、夜帰って酒を飲んで寝てしまう毎日だった。まだ、二十歳そこそこの頃のことだ。やがて、このままでは活路は開けない、自分自身につけてきた力、ものの見方・考え方や知識がアカデミズムの世界でどれほど通用するかを知りたい、しかもそれを社会に「還元」すべく研究者になりたいと思ひ立ち、それにはまず自分で納得のいく大学を出るしかない、と、ぼくは「現役」の連中が卒業する頃になって大学へ入る。親にも内緒で上司から受験料を借り、当時まだ珍しかった社会人にも門戸を開いていた大学を受験。在学中の四年間は平日一日と土・日曜、休日、夏・冬・春休みはフル稼働で働く、という二足のわらじを履いた。

時給で四百円程度の劣悪な条件ではあったが、お金を使う暇もなかったから授業料と生活費は何とかまかなえたのである。大学院入学時の百万円近い出費は痛かったが（そして毎年四十万円の授業料をそれから八年間も！——金で大学教員の資格を買ったようなものだ——）、大学院に入ってからもある英会の奨学金を受けながら一年近くその形態で働き、途中から現在も勤めている研究所の委嘱研究員の職まで重なったが修士論文を書く準備と本格的な研究生生活を送るため、二年の夏休み末に、長年勤めてきたその量販店を辞めた。職場は送

別会を開いてくれ、記念品や寄せ書きをくれたものだった。

次の土・日曜日からの空白感・所在のなさ、長年身体にしみついた仕事の性（まぶさ）を自覚させるに十分で、その、ヒマになった「一抹の寂しさ」は、今でもありありと憶い出すことができる。もう、朝起きて遅刻を気にしながら職場に出かけなくともいいんだ、という解放感と、それより強い空白感。仕事を辞めた人や定年になった人が味わう日々のことが、ぼくにはよくわかる。

量販店での仕事は、販売や品出しなど立ちっぱなしのしかも力仕事で、体を使うことはともかく、人に高いものを売うつける仕事は気の弱い（？）ぼくにはついに好きになれなかった。しかし、それでもとにかく、「売ればいいんだ」という至上命令に従って売上を競っていると、一種麻薬的な作用が生じ、品質は二の次で、高額品を売って予算を達成したあとは不思議と「よい仕事をした」といった気分になれるのだ。お客の生活状態やローン返済、もしかしたら公害や第三世界の収奪につながるかもしれない品質や資本主義の延命などを顧慮することなく、とりあえず眼の前の仕事（＝売ること）に徹することが「仕事」なのだし、それをするしかないのだ。ぼくは「優秀な」販売員だった。

普賢岳や先の湾岸戦争で、その渦（火）中へ飛び込んで取材を続けた、あるいは殉じた報道人＝男性たち。自分の生命

への危険よりも使命感とヒロイックな想いがないまぜになって彼らをそこに踏みとどまらせた「ジャーナリストとしての」プロ意識は、確かにあるだろう。これには男性／女性の区別はないに違いない。だが、「ジャーナリスト魂」以外にも「仕事だから」「上司の命令だから」といった消極的動機で携っている側面があることも否定できないと思う。

そこには男性がどっぷりつかった「仕事」観が重く横たわっている。商社マンであれば第三世界の森林伐採につながる仕事であってもそれに尽力して禄（ろく）を食み、電力会社の社員であれば原発建設の社命に従い、自衛隊員であれば海外まで出かけて銃を人に向ける。目的や携る職種がどうであれ、いま・この仕事を遂行しなくてはならないし、またするしかないのは、男の、滅私奉公による忘我がラクなものと、社会（会社）とつながっていないとアイデンティティが保てないことへの「おそれ」なのではなからうか。そんなこと言われたってどうしようもないし、するしかないもんね、という男の科白（*りやうはく）は、開き直りでもあるが、正直に、どうしていいかわからないからでもあるのだ。

こういう仕事ぶりを「近視眼的」と言い「仕事を下りてしまえばいい」と言うにはあまりに根が深すぎる。男たちが「高速道路」から下りようとしないことに女性は首をひねり苛立つが、男性学はそのメカニズムをもう少し深く考えたい。

楳原の夢

なんにもない なあんにもない

武田 秀夫

「戦が始まる、ここから三里の間は生物のかけを失くして進めとの命令がでた。私は剣で沼の中や便所にかくれて手を合わせる老人や女をズブリズブリとさし殺し高く叫び泣きながらかけ足をする」

二十二歳の賢治が盛岡高等農林の同人誌「アザリア」に寄せたアフォリズム「復活の前」の一節である。「私はさびしい、父はなきながらしかる、かなしい、母はあかぎれて私の幸福を思ふ。私はいくぢなしの泣いてばかりある、あゝまっしろな空よ、私はあゝさびしい」といった短章を十七ほど連ねたものの一つとして冒頭のものはあるのだが、私は、賢治がこういうことを書いた男だったということを覚えておきたいと思っている。

中・高校生のころ、この私も同様の夢をよく見た。あるいはそういう場面をずいぶん妄

想した。朝鮮戦争の余燼さめやらす、警察予備隊から保安隊へと進む世の流れは少年の私を大いにおびやかし、迫り来る国家からの「徴兵」にどう対処するか、しきりにそのことを考えていた。

戦争にかり出されれば、命令に従っておれは、「手を合わせる老人や女」をズブリズブリと銃剣で刺し殺すことになる。たまらないと思った。が、少年の私を最もおびやかしたのは、実は、その執拗にくりかえされる凶夢・妄想の中に、人をズブリズブリとやる快感がひそんでいること、そのことを無意識に熟知していたということだったのではないか。戦争という極限状況の中で、この自分のうちにひそむ破壊衝動が手綱を離れて暴れ出すこと、それを無意識のうちに怖れ、それから逃れるためにこそ「徴兵忌避」ということを考

えたのではなかったか。そうであるなら、徴兵を拒否し牢屋に進んで幽閉され、そこでひとり生きる（死ぬ）という、なかなかロマンチックな生（死）に対するイメージを早くから私が抱懐するにいたったのは、もししたら、他人をズブリとやるのは道にはずれる行為であり自分はそれを毅然と拒否するのだといったヒロイックにしてヒューマニスティックな抵抗などといったものではなく、戦争になったらこのおれは、人をズブリズブリとやる快感をめざめさせられ制御がきかなくなるのではないかという、自分自身に対する恐怖からだった、そういう面がなかったとはいえないのではないか。そんなことをこのごろしきりに思っているのである。

私の非戦の根拠は、したがって、平和とかヒューマニズムとかいった、人さまに胸を張って差し出すことのできる「明るいもの」に根ざしているのではなく、自分自身の内に潜む暴力性・破壊衝動といった「暗い力」に対する恐怖に根ざすものだということになりそう。いざとなったら何をやるかわからない自分を私は怖れる。私はそんな暗いエネルギーに満ちた自分をうまくだめすかして墓場まで持ち込むことができたら成功だと思つて

いる。

ここで、誤解のないように付け加えておきたい。沼や便所の中で哀願する老人や女をズブリズブリとさし殺し、高く叫び、泣きながらかけ足をするといったオブセッションを書きつけた賢治は、それでは徴兵を忌避したかという、逆なのである。二十二歳の賢治は激しく父親と対立するが、その重要なテーマの一つが徴兵検査であった。父親は徴兵をのがれるために研究科に残れというのに対して賢治は強硬に抵抗し、遂に徴兵検査を受けた。「戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象に御座候。その戦争に行きて人を殺すと云ふ事も殺す者も殺さるゝ者も皆等しく法性に御座候」

「(先日)も屠殺場に参りて見申し候、牛が頭を割られ咽喉を切られて苦しみ候へどもこの牛は元来少しも悩みなく喜びなく又輝き又消え全く不可思議な様の事感じ申し候。それが別段に何の役にたつかは存じ申さず候へども只然くのみ思はれ候」

「戦争は人口過剰の結果その調節として常にかかるものに御座候」

賢治教信者は蒼ざめるかもしれないが、こ

れらはいずれも二十二歳の賢治が父親にあてて書いた手紙の中の文言である。私はこのこともよく覚えておきたい。

さて、賢治は、冒頭にかかげた短章の前に、たった一行、次の短章を置いている。

「なんにもない。なんにもない。なんにもない。」

歌うように賢治はそう書きつけているが、これもまた、賢治を知る以前、すでに私の心の中にリフレインのように鳴っていた当のものであった。いわば若年の私の生を支えした一種の通奏低音――。

私は今でも時どき、自分がかつて人を殺し、いまでも追求の手をのがれて逃げつづけている逃亡者であるという夢を見る。夢からさめて後、私はいつも、夢の中のその思いがあまりに切実なので、自分ほもしかしたら本当に人を殺したことがあるにもかかわらず、その記憶を忘れたいたために無意識の底にそれを押し込んでいるのではないかと思ってしまう。

こんな陰惨な夢を私はどうして見るのだろうか。私の理性は、お前はいまだかつて現実に人を殺したことはないから安心しろと告げ

る。だが、夢の切実さは、お前はたしかに人を現実に殺してはいないかもしれないが、何回も想像の中で人を殺してきたではないか、思ったことは、やったことと同じだ、差別はないと宣告する。

賢治同様、私の心の底には、いつも、「なんにもない。なんにもない。なんにもない」というメロディが低く鳴っている。この世界が究極のところ「なんにもない」のだとすれば、なにをやってもいいわけだ。人を助けてもいいが、人を殺してもいい、自分を殺してもいい――。

間歇泉のように吹きあげてくる、自分であって自分でないような「異形の自分」、暴力と破壊衝動に満ちた「暗い自分」を辛うじて制御しつづけていく、それがおれの生であり、日常というものだというように私は自分なりの生のイメージを抱きつづけてきたが、その私にとって、「殺す者も殺さるゝ者も皆等しく法性」と唱えながら、老人や女をズブリズブリとやり、高く叫び、泣きながらかけ足する己れの姿を心の内に見つめていた賢治の徹底したニヒリズムと苦悶は、どうしても目をそむけるわけにいかない当のもののなのである。



え・加藤由美子

ぶん・福田 緑

—さあお食べ、さあお飲め—

いつもは早目にやってくる雄君が、その日はどうしたのか時間になっても姿を見せません。雄君は二年生ですが、一年生の時から授業に参加できず、奇声を発したり、校内を歩き回ったりすることがあり、ことばの発達を促すために「ことばの教室」に通ってくることになりました。雄君は「ことばの教室」がすっかり気に入ってしまい、来室の予定の日は朝早くから起き出して、興奮のあまり食事もう喉を通らない状態でした。

もともと好き嫌いが多く、少食で、そのせいかどうかわかりませんが、学校の尿検査で三次検査までいき、採血のための注射が恐くを大泣きしたことがあります。

前回、「もう注射をしなくてもいいように朝ごはんも食べようね。給食も少しずつ食べようね」と話すと、本人もがんばるぞという顔で「うん／＼」と返事をしたのですが……。

そんなことを思い出しながら、どうしたの

かなと待っていると、来ました、来ました。スリッパの音が職員室の前でピタッと止まり、開いたドアの間から神妙な顔付きの雄君が、「朝ごはんを食べていて遅くなりました。ごめんなさい」

とペコンと頭を下げたのです。その姿があんまり可愛くて、思わず笑ってしまいました。

いつものように紙芝居を使ってことばの学習をした後、プレイルームに入りました。

「何が入っているの？」

と言いながらおままごとのバスケットを覗いた雄君は、中身が食べ物だとわかると、

「今日はみんなに食べさせてあげよう。大サービスだ！」

と、人形や動物たちに次々に配り始めました。

「わぁ、でっけえ象！ どれにしようか、えーとね、ブドウ。さあ、お食べ」

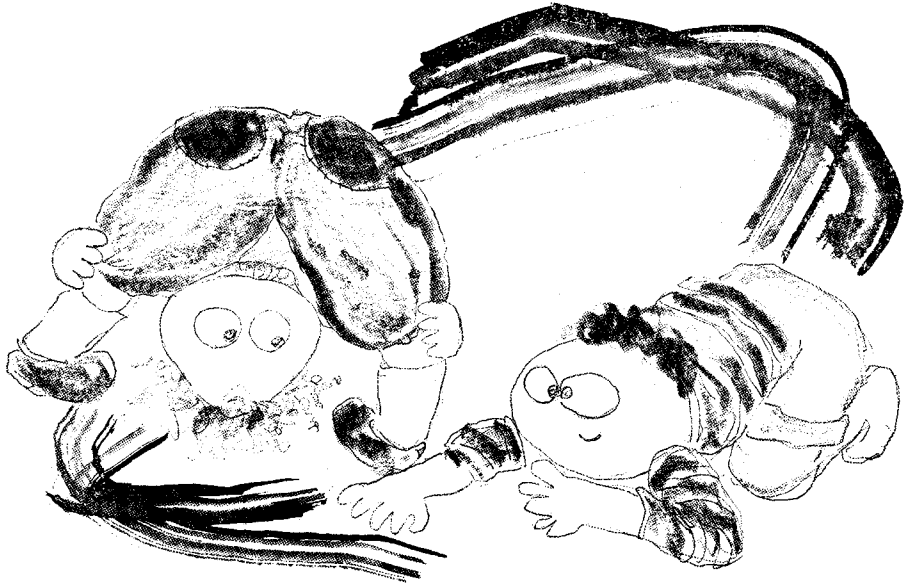
「あ、カルガモ。何が良いかな？ あ、これだ、コーラだ。さあ、おのめ」

「カブトムシにはハチミツレモンあげたいんだけどなあ」

クモには牛乳、恐竜には人参、トラにはカレイ。ガイコツの前にはタケノコを置いてすましています。ぐるっと見回して、

「みんな楽しく食べてるかな」

「ことばの教室」に通い始めた頃の雄君は、箱庭遊びが好きで、毎回砂を敷いた箱の中にミニチュアのおもちゃで街を作り、でき上がると必ず怪獣で街を破壊して帰りました。それが、だんだん公園や海が出てきておだやかな街になり、一軒一軒の家に人形や動物を住まわせるようになり、やがて箱庭だけでは物足りなくてブレイルームいっぱいに街をつくるようになりました。もう怪獣は暴れません。そしてその日、人形や動物たちにごはんや飲み物を配り始めたのです。目を輝やかせながら何をあげようかと考えている雄君は、ほんとうに楽しそうでした。



現代衣生活考

むらき 数子

「何のために入浴するの?」

息子の浴用タオルがいつ見ても乾いている、濡れるのはバスタオルとバスマット。いったいどんな風に入浴してるの?

石鹼をつけたタオルで体をこすり、タオルを絞って拭く、バスマットの上に立つ時濡れているのは足の裏だけ、という入浴法は、息子にはバスタオルのない非常時だけのものらしい。

九五%が入浴後にバスタオルを使い、四〇%が「家族それぞれが専用のバスタオルを持っている」という数字がある現在。九一%の住宅に浴室があるが、タオル掛けはたいてい浴室の外にあるから、バスタオルを取るためには拭かないまま立つことになる。結果、バスマットはビショビショ、二人出たら水溜り、足拭きの用をなすどころか。

「今のようにタオルがあたりまえになる前は、手拭いを使っ

てたけど……」

「手拭いって何?」

「エーッ、君、手拭い知らないの?」

そうか、うちでは十年以上、手拭いは町会から夏祭にと配られるだけ。私の姉も台所でフキンとしては使うけど、と。旅館でも出されるのはタオルだし、贈答用もタオル。Nさんの老父は『神田川』のようにマフラーがわりに首に巻くが、入浴には使っていない。(タオル産地の大阪で手拭いと言えばタオルだそうだが、東京っ子の私には晒し木綿のことだ)

今や入浴時に手拭いを使う人は一%、手拭いは民芸品扱い、民俗学で「かぶりもの」の項目に記されるものになっている。

一方、タオル生産量は住宅戸数とみごとに並行して増大してきた。公団住宅は、DKタイプと共に内風呂も普及させてきたのだ。正反対に減少していったのが、銭湯。

九一年現在、銭湯は東京では一回三二〇円の手軽な保養地。銭湯側もさまざまな客寄せ策を講じている。浴槽の種類を多様化し、脱衣場を明るくしたり、コインランドリーばかりか寄席やフランス料理屋・カラオケ座敷・コンビニエンスストアを併設したり。子供二人も連れて行けば「入浴料＋ジュース類」ですぐ千円は飛んでしまう、内風呂の方が安い時代。だが、内風呂のない人は、自転車やバイク・自動車に乗

つてでも数少なくなった銭湯に通わざるを得ない。

八九年十一月下旬の一週間の入浴行動について私が行ったアンケートの結果を見ると、子供たち六〇人も母親八八人も祖母一人も、毎日入浴・シャワーをする人がほぼ半数。週に五回以上するのは、子供の八二%、母親の八一%、祖母の七三%、週に一回以下はどの世代でも一人だけで、変わり者扱いされている。

単身赴任者に関する報告でも、入浴は「二日に一回の入浴も含めて、八、九〇%の人がキッチンと入浴しており清潔度は合格点だった」と、「頻繁な入浴＝清潔」とみなされる。

入浴・沐浴の動機・目的は、世界的にも宗教上の儀式、傷病の治療、保健衛生、娯楽、遊興などにわたり、入浴方法も首までドボンと漬かるばかりではなかったし、入浴の習慣のない民族もあった。日本でも蒸し風呂の歴史が長く、男は禪、女は腰巻をつけて入っていたのが、すっ裸でドボンと漬かるようになったのは江戸時代中期から……などを知れば、現代の日本人は「風呂好き」に違いない。

だが「入浴＝清潔」かどうか？ 清潔のためなら、シャワーで足りる、温水洗浄トイレがあればなお結構（お湯でお尻を洗うのは、日本社会の新しい文化だ）。だが、私のアンケートの九〇%世帯で、シャワーだけと答えたのは僅かに一例だけ、夏にはシャワーと入浴併用の世帯が四四%ある。

どうやら、入浴のイメージは、体を洗うことよりも浴槽にドボンと漬かることらしい。実際は、シャワーだけで済ませている人もかなりいるようだし、中年以上はドボン中心、二〇代以下はシャワー中心という傾向もあるのだけれど。では、現代日本人はドボンの他に浴室で何をする？

銭湯の女湯で見ると――

すっ裸になって脱衣場から洗い場へ。金のネックレスをつけたままは一四%。首から下にお湯をかける。顔を洗う。サウナに入る。浴槽に漬かる（ドボン！ 泳ぐ、ジェット・泡などでマッサージ、打たせ湯、冷水槽に入る……）。洗髪（昔は洗髪は別料金だったけ）。全身をタオル・石鹸などで洗う。垢すり（合成樹脂製、軽石、スポンジ、ボディブラシ、へちま、特大亀の子タワシ！）。毛剃り・脱毛。歯磨き。上がり湯を浴びる。タオルで体を拭く。脱衣場ではバスタオルを胸から下に巻きつけて、髪を乾かしながら休憩（タオル、ドライヤーを使って乾かしながら、ジュースを飲む。体重測定。喫煙。おしゃべり。この時間がながい）。

内風呂があっても、疲労回復・気分転換のリラックスの場や「裸のつきあい」を求めて通っている客もけっこういる。現在の女湯では、背中を流しあうのはめったに見ないし、沢村貞子を書いていような練白粉を塗る化粧とか手桶に上がり湯を汲んで持って行く挨拶は見たことがない。猥談も聞い

たことなし。裸で歩く時に「手拭いで前を隠す」という隠微なしぐさをする女性は何れも。だが、小泉和子が『道具が語る生活史』で指摘した、ひとたび手桶を置いたら出るまでカランを占拠し続ける「暗黙の了解」はしっかり健在である。

つれあいに聞くと、男湯ではカラン占拠の風習はなく、「前を隠し」続けているらしい。三遊草金馬は「昔も今も、銭湯では、大人と子供は敵同士で……」と言うけれど、現在の銭湯に子供の姿は稀である。

娯楽保養となれば、入浴・飲食・テレビゲーム・歌ったり踊ったり寝そべったりのヘルセンタ―から温泉ブームにつながる。砂風呂とか蒸し風呂には着衣のまま入るし、混浴用にと「湯あみ着」が発表されたりしているが、同性ばかりなら未知の人とも「すっ裸でドボン」が日本流の温泉の楽しみ方。射的場や買春まがいの性的遊興を伴う温泉の楽しみ方は関知しないが。

内風呂では——さまざまな情報によれば——

歌う。子供と遊ぶ。入浴剤を入れる。洗濯（下着は各自が入浴時に洗う家庭が私のアンケート回答では八％。洗濯機を浴室内に置いて、入浴しながら回すのが好きという人も。以前の銭湯には、洗濯お断りの掲示があった）。ボディ・チェック。排尿。性行為（少年のマスターベーションから、夫婦・母子ほかさまざまな関係の男女の性交に至るまで。これ

を商品化したのがソープランドなどの特殊浴場）。

成長途上の十代の子供たちは、他者と一緒に入浴する羽目に至ると、清潔もなんのその、他者の目が最優先。

三〇年前、東京の女子中の修学旅行で、一人が「足だけ洗う」と着衣のまま洗い場へ入って行った。その日はクラス全員裸になれず、せつかくの温泉に入らずじまい。翌日以降はふつーにドボンした、私自身の記憶。

男の子が修学旅行に海パンを持って行く、というのが話題になったのはもう何年前か。

昨年、埼玉県立高校の研修合宿の晩、男生徒たちが全員、バスタオルを巻いてドボン、そのままジャージャー湯をたらしながら脱衣場に上がってきた。脱衣場は大洪水、男教師は洪水のあと始末に大汗。

私の行く銭湯の、洗い場から脱衣場へのドアに「全身をよく拭いてお上がりください。タオル手拭いを足拭きの上で絞らないでください」と掲示してある時代である。

（イラスト・土田尚美）



オホーツクの潮風荒く…

■江口凡太郎

(2) いいの、先生！ C子がとろいんだから

初めての調理実習で一年生と「豆腐作り」をしました。子どもたちも高校に入って初めての実習でした。準備から後片づけまで走りまわり、終わると、いつもとは違う何かとても心地よい疲れを感じました。しかし、気になることもありました……。

実習時間内に終わらず、放課後、試食と後片付けをしたクラスがありました。掃除を終えて班ごとに集まり、再開。ある班で、ほとんど作業に参加できなかったC子に、私は豆腐を型からはずすように指示したのですが、作業を始めたC子に班員から声がかかります。

「C子ちゃん、手洗った？」（洗っていないかった）

別な子たちも口々に、

「洗っていないの？ きたない！」

「信じられない！」

「わたしがやるっ、どきな！」

注意や助言というようなものではなく、あちこちで、学校行事などで、「足手ま

といな子」という扱いを度々うけているC子のことは、私も気になっていましたが、私の目から見て、この班なら一緒にできるだろうとも思っていただけに、ショックを受けました。C子はやや精神的に幼く、それが話し方や行動にあらわれていて、いつもなにか「おびえている」ように見えます。他の子たちは、みんなと「ちがう」C子の行動と、そこに読み取れる「弱さ」を理由に、C子に支配的、威圧的に接しているように感じます。

なぜなのだろうか？ と生徒たちの日常をみわたすと、我々おとなが「指導」の名のもとに、「強さ」を盾にして彼らを威圧し支配しているような気がします。勿論、時には反社会的行動をしますから、教え諭すことも必要でしょう。しかし、生徒たちは、強いものには服従し、弱いものは支配するというおとな社会の差別構造を、模倣しているように感じます。「三年かかってズルさを教えるようなものだ……」あるベテラン先生の言葉が印象に残っています。あの子たちも、学校という差別的支配する社会で、自分を守るために必死で「ズルさ」を身につけているのではないのでしょうか。

「いいの、先生！ C子がとろいんだから」

注意をした私に、平然と、答える子たち。威圧はしなくなっている。でも教え諭すこともできていない自分の力量不足を、痛切に感じています。

（紋別南高校家庭科）

ひと夏の経験



半田たつ子



「We」'82年8・9月号の波「私の反戦」だった一人の反戦」を、私は「生きている限り十分に忠実に、他からの強制によってさせられる行動を排除する。減びるにしても、減ぼそうとする者と戦って、抵抗しながらだ。たった一人でも戦う。それが私の反戦である」と結んだ。湾岸戦争が始まった時、私は、こう書いたことを恥じた。

九年前の私の文章は、戦争の人間の悲惨についてイマジネーションを働かせることなくB 29の爆音で一斉に「ダイ・イン」する人た

ちへのいらだちが書かせたものだ。風船を飛ばした公園で、みんなと一緒に死ぬ真似：こんなムードが嫌だったのだ。十五年戦争は、子どもの私ではどうしようもなかったけれど、今なら何かできる、そんな自負もあって書いたものだった。

しかし、私は湾岸戦争で何をした？ 考えて、ブッシュ大統領に手紙を書いたことぐらいだ。意気込んだところで、湾岸戦争の背景を何一つ知らない。あわてて勉強を始めてみれば、近現代史についていかに無知であつたか、ほぞを噛んだ。

南の国で目覚めていく「母たち」の映画に感動し、フォーラムで上映できた。シンポジウムのために、本を読み集会に参加し、講師の方がたと会い、当日を迎えた。シンポジウムの記録を整理し終えた今、この経緯の中で私に、新しい世界が拓かれるのを感じる。

一方、世界中を動転させたソ連共産党中央の消滅。七十数年のソ連社会主義は終わりを告げ、二超大国対立を軸とした世界体制は崩壊した。高い生活水準と行届いた福祉の国、スウェーデンでも、ほぼ六十年にわたり指導的な地位を占めてきた社会民主労働党が総選挙で敗れた。人間は、共産主義の理想が前提

にした「一人は万人のため、万人は一人のために」働く、という存在ではなかった。また人も羨む福祉に守られてもなお、人間は満たされぬものを持つ存在だった。新しい混沌の時代が始まるうとしていた。私たちは、どこに道をつけようとしているのか？ 頭だけで考えれば、頭を抱えざるを得ないけれど、私には、ほのかに光が見える。道が見える。

「皆さんと一緒に、一斉に」が嫌いなことは九年前も今も変わらない。だから、このところ急にアジア、アジアと言いつ出した風潮に乗りたいとは思わない。でも、近現代史として教えられず、学びもしなかった「朝鮮人慰安婦」問題は胸に刺さる。私は数年前「沖繩のハルモニ」の映画を見て知ったが、この時は知っただけで終わりでた。

昨年六月六日参議院予算委員会で社会党の本岡議員が質問してから、この問題は、が然注目を集めるようになった。

今年五月三十一日、私も参加したシンポジウム「アジアの平和と女性の役割」で、韓国の尹貞玉さんユンジンオクは、いまだに慰安婦の事実すら認めようとせず、全く批判のない日本政府を鋭く批判し、日本の女たちに「勇気をもってともに取組み、平和への第一ページにしよ

う」と呼びかけ、共感の大拍手を浴びた。

このシンポジウムの最後に、We フォーラムの講師李順愛^{イ・スンア}さんが、フォーアーから「日本のフェミニズムに対して違和感を持つ」「日本に住んでいるが、ここが自分のいるべき土地と思ったことは一度もない」と発言し衝撃を受けた。そこをフォーラムでぜひ語って欲しいとお願ひし、李さんは、問いに答えて下さった。日本のフェミニズムが、女を一樣に男の被害者として位置づけ、例えば在日朝鮮人問題についてきちんと捕えていないこと、日本社会全体の歴史性に対する視点が欠落していることの指摘である。私は自分自身を顧みて、全くその通りと思った。

それなのに、「女は社会科学を学べなかった、女にとってかわいい学問：家政学を強要された結果だ」と、まだ被害者じみた発言があったのは残念だった。無知に気付き、それを恥じたら、まさにその時から学べばいいではないか！ 自分が引き受けることをせずにいつもいつも、他のせいにすることは、もういい加減に止めようではないか！ 被害を受けた国からの鋭い突きつけに対して、自分は何もせずに、天皇が、政府が詫びると要求することで事足りりとしてはならないのだ。

湾岸戦争を、マスメディアはどう報道したかを問う集会にも参加したが、筑紫哲也をはじめマスコミ人自身が自らをまな板に乗せているのに好感を持った。こうでなくっちゃ。

私の視野の外だった中東が少しづつ親しい世界になりかけた時、フォーラムで藤田進さんの話を聞いた。シンポジウムでも、夜の交流会でも「民族」が話題になった。参加者の民族観と藤田さんのそれとの間に食い違いがあったが、「民族」がいたずらに強調される時、そこからはみ出す者との間に、緊張が生まれ、それが戦争にも結ぶことはよく分かったし、中東、特にパレスチナに於いて、民族という概念はネガティブなものだということも理解できた。中東のなんという複雑さ……

八月最後の日、エルサレムの中東キリスト教会協議会議長のサミール・カフィティ^{サミール・カフイティ}主教を迎え、占領下パレスチナの現状を語っていただく集会があった。藤田さんからのお知らせで参加したのだが、十一の会が主催し、日本にもパレスチナ人の苦しみ、闘いを、日本の民衆へのメッセージを直接聞きたいと願う人たちがいると、力強かった。藤田さんはイスラエル占領下のガザ市にあって、インテリファード^{インテリファード}（パレスチナの自由・平等・自決

を求める闘い）による負傷者を治療しているアハリー・アラブ病院に、百万円の支援金を渡された。このお金の中にはフォーラムで集め、私がお届けした金二万円が入っている。

藤田さんとカフィティ^{カフイティ}主教の熱い抱擁に拍手を贈りながら、Weの仲間とともに、ささやかだが支援ができたことがうれしかった。

また、交流会で藤田さんがチャラツ^{チャラツ}と言われたある女性：ポーランドでユダヤ人として生まれた男女が、大戦中ソ連領に逃げて出合い結婚、イスラエル建国に伴い、そこに移住して子を生む。その子、ルティ・ジョコスビツチ^{ルティ・ジョコスビツチ}の本を買った。『私の中の「ユダヤ人」』（二一書房）である。受付で私の参加費を受け取った人がルティらしいと分かった時、うれしかった。彼女は両親とともにフランスに移住し、イスラエルを旅してパレスチナ問題に目覚める。日本人広河隆一と結婚し、日本に住む。今は別々の人生を歩むが、彼の協力が本の誕生に大きな力を与えてくれたと「あとがき」に書いている。

「国家」から眺める世界は混沌としているが、一人一人の「人間」は信じられる。私が広い視野を持ち、国境を越えて友を求めて行くならば……そんな実感を持ったこの夏だった。

今月の 読書から



稲 邑 恭 子

小島晋治他

『いまアジアを考えるⅠ・Ⅱ』

三省堂刊 (Ⅰ 千三百三十九円 Ⅱ 千二百四十円)

中国研究所が'83年から'84年にかけて開催した講座の記録をまとめたもので、中国、朝鮮、インド、アラブ、ソ連にいたるまで、それぞれの領域の第一線で活躍する研究者たちの示唆に富む発言の中から、多様な文化と歴史をもつアジアの全体像が浮かびあがってくるのが興味深い。

まず、朝鮮と日本との関係をめぐって、第Ⅱ巻の「二つの八・一五 朝鮮と日本」で和田春樹氏は、同じ米軍の占領を受けても、朝鮮と日本とは民衆の自立度に歴然とした差があったことを指摘している。

ソウルでは民族主義者たちがいち早く動

き、終戦後一兩日中に政治犯が釈放されたが、日本では十月十日になってようやく占領軍の命令によって釈放され、彼らを出迎えたのは、「少数の日本の共産主義者と多数の在日朝鮮人」だけであったということ。

日本に入ってきた占領軍は、従順な、虚脱状態の民衆を目の前に、安心して民主化を「強制」したが、一方、南朝鮮では、日本の総督府の画策もあって、民衆の運動の高まりを恐怖し敵視し、親日派の旧勢力と結んで、逆に民主化を阻む方向にいったということ。

民主化の獲得が、民衆の自立度に相反した結果になったというのは皮肉なことであるが、私たちは、戦後の民主主義が闘ってかちとったものではないことを忘れてはならないであろう。

続いて、安宇植氏は「在日の意味するもの」の中で、告発や糾弾をする側とされる側が、歳月の流れと共にいつしか慣れ合うようになっていくという、差別をめぐるあらゆる闘いがほとんど不可避的に直面せざるをえない問題を、鋭く指摘している。

「日帝の植民地三十六年云々と切り出すと、相手は頭を下げ、「しまいいにはこちらが何も言い出さないうちから」「こちらの顔色を伺

いきげんをとろうとする」となると、朝鮮人の側は日本人を押え込むにはどうしたらいいかを知り、日本人の側も朝鮮人が決まり文句を言うようになったら早速どのようにに対応すればよいかを知る。そして、その結果、自分の問題として考え、思想として深めていく努力を、双方ともに怠ることになると。

アジアのことを考えるということは、私たちにあって、過去の侵略の歴史、そして今なお続く差別と経済的支配の事実にきちんと向きあい責任をとることである。同時に、世界を常に東と西とに対立させてとらえ、前者にマイナスイメージを付着させようとする欧米の思考に倣って、多様なアジアの国々のそれぞれの姿をあまりにも安易に「アジア」として括ってきた、「脱亜入欧」の発想から、自らを解き放っていくことではないだろうか。

そして、私たちの内に深く根ざしてしまつた「名譽白人」的発想を相対化させていくためには、国家や全体収斂されていくことを嫌い、民族や宗教の多元的な共生の実現をいとわぬ——私たちといわば対極に位置する——文化に生きる人たちから学び、そのありようから自分たちを照射することによって、気づいていくことが有効、と思うのだ。

第I巻巻頭の、鶴見良行氏の「アジアはなぜ貧しいか」は、その視点からの試みとして、魅力に満ちた一章である。

明治以降の富国強兵型の日本文化は、西欧近代をモデルにし、それに少しでも追いつこうとし、あるいは追いつけないために劣等感に陥る「優等生文化」であり、知識人たちは、漱石をはじめとしてみな、「追いつけない、近代的自我がないということ」で神経衰弱「気味だった（今もそう?）」が、実際は、地球の大部分は、そうした優等生である文化（例えば中国や西洋近代などの文化）とは縁のうすい人々で成り立っているのではない、かということ。そして、その意味で、国家への帰属感が希薄でまとまりがない、後者の典型といえる東南アジアの社会の構造を知り、その魅力を学ぶことで、案外、私たちが持っているかもしれない別の面が再発見できるのではない。また、そうすれば、明治以降とらわれてきた西欧へのコンプレックスからも、一族・一宗教・一言語という「神話」からも解放されて、様々な民族の人たちと等身大でつきあえるような柔軟な文化を日本の中で作れるかもしれない、と。

また終章の板垣雄三氏の「パレスチナ問題

と日本」は、シオニズムとナチズムの関連性を明らかにしつつ、私たちが自明の理としてきた西欧の論理を祖上にのせる。

30年代のナチズムは、ヨーロッパ大陸をユダヤ人の汚染から守るため、できるだけ多くのユダヤ人をパレスチナに送り出し厄介払いしようとしたが、戦争が始まり輸送がままならなくなると、現地処理方式（強制収容所）に切り替えた。

従って、ヨーロッパの知識人たちの間に根深いハユダヤ人への恨みのために彼らの国イスラエル国家が出来ることはいきことVという考え方は、他人であるパレスチナ人の犠牲において自らが償いをした気分になるという虫の良さは論外としても、40年代のナチ犯罪の残虐さだけに注目し、30年代のナチズムやパレスチナ植民運動については不問に付すことによつて、ヨーロッパの、そしてキリスト教のユダヤ人を悪者にし執拗に差別し続けてきた歴史そのものが、じつはナチズムの温床であったということを、曖昧にさせているのではない、と。

この章を読むと、湾岸戦争において、イラクに野蛮、人権無視、専制などの、あらゆるマイナスイメージをかぶせて非難していた米

国・多国籍軍側が、実は、逆に「正しいことは一つしかない」、「改宗か死か」という問答無用の論理に立っているということがよく理解できる。それに対して、「正義」は幾つもあり、話合いによってそれらを調整すればいいとするのが、イスラム教の、アラブのやり方であって、西欧近代の先進性の証左のように思われている八個の多様性の尊重Vということは、むしろ彼らが元祖であるとする板垣雄三氏の持論は、私たちが今まで思い込んできた、あるいは思い込まされてきたことを一つ一つ検証していくことがいかに大切かを示唆して、ハッとさせられる。

誌面の都合で内容は割愛させていただくが、この号のテーマに関連し、参考にしていただければ、と思う本を挙げる。

* 天皇制に関して

アジア民衆法廷準備会編

『海外紙誌にみる天皇報道1・2』

（凱風社 各五百五十円）

* 外国人労働者に関して

田中宏『在日外国人』

* 開発教育に関して

松井やより『市民と援助』

（共に岩波新書 五百五十円）

わたくしから あなたに



◆私は一九四八年に四人姉妹の末子に生まれた。核家族、母親は専業主婦のもとで育った。初めて女であることに腹がたったのは、共学の高校で、女子だけに家庭科の試験があったこと。順位は男女総合で出るのに。

二十四歳で最初の結婚。相手は一人っ子で、相手の両親と同居。結婚して後、現状の結婚（制度）が、男ならびに男の親が利する制度であることに気がつく。夫は、わがままのしほうだい。しかるに親は一言の注意もない。よって、九年後、五歳と二歳児を連れて離婚。相手の両親が孫を全くかわいがらなかったことが、幸いしたというべきか。もと夫からの養育費は愛人ができるとともに、なしのつづてになった。

母子家庭では、おさだまりのセクシャルハ

ラスメントに悩まされる。この日本では特定の男の持ちものであってもなくても、男に泣かされるようになってみるとみえる。六年目に理想の男性にめぐり合い、コブ付き再婚。今日までほとんど働いていた。姓もころころ変わり、ややこしいたらありやしない。私の両親にとって男の孫は私の息子しかないので、実家の墓地把再婚相手との墓地の中に設けた。実家の親に跡継ぎと頼られた姉は、相手の姓に変わることができず、何年も事実婚のまんま。

最初の結婚で女性問題に目覚めて以来二十年、女性問題の勉強を続けてきた。しかし、さびしいんですね、一人だと。各地にいろんなグループがあるようですが、私のように、地方に住んでいた、出向く時間や手段のない人達で、文章によるグループをつくりませんか。お便りをください。夫婦関係で悩んでいる方、離婚を考えている方、母子家庭の方、再婚・事実婚の方、男どもに悩まされている方、お友達になりましょう。お仲間が多ければ、新聞、冊子形式で、少なければ、一冊のファイルを回すやり方でどうでしょうか。怒れる女性たちの参加をお待ちしています。

〒677 兵庫県西脇市下戸田452-10 藤原美和子

◆8・9月号の特集、興味あるテーマでした。山田さんの「不妊と向き合う」は、自身のことと重ね合わせて、改めていろいろ考えるきっかけになりました。

「結婚して子どもを産むのが普通」と考えていたとしたら、ちょっとしんどいんですね。子どもを産むために結婚したわけではないのですけれど。べつに悩むことなく、子どもをごく当然のように産んだ女性にとっては「なんできないの?」「早く産んだほうがいいよ」「子どもはやっぱかわいいよ」となるのですね。でも子どもはベットとはちがうのですから、「かわいいから子どもが欲しい」というのでは、とてもやっていけない気がするし、それなりの覚悟がいると思うのです。

生徒にも話せる範囲で話しています。「結婚したら子どもを産むもんだ」というのではなく、産まない選択もあるし、産めないこともあるんだということが、ボンヤリでもわかってくれたらなあと思っています。一学期末テストで、出生率低下について、その背景と自分の意見を書く問題を出したところ、高齢化社会を支えるため産むべきだとか、産むことが女の幸せという意見が、私が思っていたより多く、意外でした。（大阪・浅井由利子）

来年のフォーラム決まりましたよ

—'92年夏は関西で—

中 村 英 之

今年の八王子のフォーラムで、来年は関西で開催することが決まりました。「We兵庫の会」と「We大阪の会」でさっそく八月十七日に第一回の'92年We夏季フォーラム実行委員会を持ったところ、お盆のころにもかかわらず十四名の出席があり、開催日の設定と場所の検討が行われました。いくつかの候補地をあげ、分担して交渉した結果、神戸市北区にある関西地区大学セミナーハウスに決定しました。このセミナーハウスは八王子のセミナーハウスと同系列の施設で、大学生など大人が使用することを目的とした施設であり、フォーラムのように子どもが参加する団体は受け入れがたいとの対応でした。

しかし、電話交渉の上、実行委員数名で施設に出かけ、「We」を持参し「一、フォーラムに子どもが参加することはWeの理念から絶対に必要であること、二、過去のフォーラ

ムで子ども活動については経験のある責任者をつけ事故がなかったこと、三、八王子のセミナーハウスはとても快適な施設であって同系列の関西セミナーハウスを是非使用したいこと」を説明し、使用許可をお願いしました。セミナーハウスの課長補佐である下浦氏の丁寧な対応をうけ、検討するとの返答をいただいた上、後日手紙連絡にて使用許可をうけました。ただし、参加人数、子どもの数ともに、今年のフォーラム並みに押さえることなどの条件を受け入れました。

施設そのものは八王子のそれより十年新しいこともあって美しく、食堂などは立派なものを建設中であり、来年には使用できるとのことでした。また講堂はとても広くゆとりとしたものでした。宿泊棟は各棟ごとに寝室とは別に談話室が設けてあり、じっくり話し合える雰囲気を感じました。開催日を八

月一日(土)〜三日(月)までと決定し、第二回実行委員会を九月八日の「We大阪の会」の例会の後にもちました。

ここでは主にテーマと合宿についての話し合いを行い、テーマに関しては、今年の「違いとつきあう」を前面に出したい、それには「一人一人の生き方が大事で、小さな集まりの集合体としてフォーラムをとらえたい」(大阪府立高校の男性家庭科教員である南野さん)という意見や、会体会はひとつにして分科会を多くもちたい、初めての参加の人たちのためのフォーローをしっかりしたい、との意見も出ました。テーマの再検討と、分科会、子ども活動などもっと詳細に話し合うため、十一月九日・十日にセミナーハウスで合宿することになりました。

なお、実行委員長にはチャリー&ヤマケンことWeに「石けんコンサート通信」を連載していた吉田明弘さんと、同じく「買うて来て使う」の山本謙吉さん。事務局長を中村英之が引き受けることになりました。フォーラムに対する意見、提案とお手伝いを募集しています。中村(〒661尼崎市武庫之荘5の1の1の201 〇六―四三三七―九九八五)までよろしく願います。

泉

この頁はあなたと
私の情報交換の場
小さなスペースで
すが、ご利用くだ
さい。

◆第三回「国民の健康会議」開催

。趣旨 二十一世紀を展望して国民の健康を確保するため、国民医療の過半を担っている病院医療について、問題点を国民の前に明らかにし、これからの病院医療について研究討議を行い、国民医療の発展・向上に資することを目的とする。(チラシより)

。主催 全国公私病院連盟

。日時 十月二十三日(木) p.m. 一時～四時半まで

。会場 ヤマハホール(東京・銀座)

。定員 五百名 入場料 無料

。問合先 全国公私病院連盟 〒150 東京都

渋谷区神宮前二ノ六ノ一 ☎03-3402-3891

◆かながわ女性アカデミー講座

「甦った女たち」～戦後かながわ女性史～

昭和二十年八月十五日、敗戦を迎え、焼け

跡に立った女たちは、何を考えただろうか？

食べることに始まり、そして何よりも民主主義の息吹きの中で、かながわの女たちが得たものは、戦後四十六年の半分の重みをもつといわれる、昭和二十年代を中心にその明暗を検証してみよう。(チラシより)

。講師 女性史研究家・江刺昭子／戦後出版

史研究家・福島鏗郎／ジャーナリスト・関

千枝子・その他

。日時 十月二十五日～十二月六日毎週金曜

日 p.m. 一時半～三時半

。場所 神奈川県立かながわ女性センター

第一研修室 定員 百名 受講料 無料

。問合先 同センター・生涯学習部

〒251 藤沢市江の島一ノ十一ノ一

☎0466-27-2111(内線)561-562

◆女のネットワークキングまつり

横浜女性フォーラムが、「女のネットワー

キング」出版にともない、記念イベントを開

催します。

。日時 十一月二十四日(日) a.m. 十一時～

。会場 横浜フォーラムホール・前ロビー

。入場料 交流会のみ五百円

。主催 横浜女性フォーラム

◆平成三年度国立婦人教育会館公開講演会の

お知らせ

。内容 パネルディスカッション・交流会他

。問合先 横浜フォーラム・ネットワークキ

ングまつり係 〒244 横浜市戸塚区上倉田町

四三五ノ一 ☎045-862-6662

。女性をめぐる諸課題について、広い視野から考察する手がかりを提供することを目的として、学識経験者による講演会を開催します。

。十一月四日(木) p.m. 一時半～三時半

「異文化体験のすすめ」国立民族学博物館

教授／片倉もとこ 定員 三百名

。十一月二十九日(金) p.m. 一時半～四時

公開シンポジウム「女と男のいい関係」

定員 四百八十名

。来年一月三十一日(金) p.m. 一時半～三時半

「私の留学時代と世界のオペラ事情」

声楽家／東敦子 定員 四百八十名

。会場 国立婦人教育会館講堂

。問合先 〒355-02 埼玉県比企郡嵐山町大

字菅谷七二八番地 同会館事業課

☎0493-62-6711

◆原発なんか知らないよ・パンフレット紹介

反原発ヤマセミの会では、より多くの方に原発の実情を知っていただくことを願い、チエルノブイリなど具体的データを豊富に使いながら、イラスト・写真を使い反原発の分かりやすい入門書を作成しています。学習会などで使ってみませんか。

・十九項目・三十二ページ・B5版二色刷り
・頒価 三百五十円

・問合せ 〒189 東京都東村山市栄町一ノ三十九ノ三十四 後藤方 反原発ヤマセミの会 ☎0423-92-1857

◆ビデオ紹介

日本食品添加物協会では、七月一日より食品添加物の表示が改正されたのを機会に、初めての消費者向けビデオ「もっと知ってほしい暮らしのなかの食品添加物」を制作いたしました。

・内容 食品添加物とは何か、その役割、有用性、安全性、表示の五つから構成されており、有用性については女子栄養大学教授の吉田企世子氏が解説を担当しています。

・問合せ 日本食品添加物協会

〒103 東京都中央区日本橋堀留町一ノ三ノ九 ☎03-3667-8311

We 読者会のご案内

秋の連休の一日、ぜひご参加を！

タイトル「教育―希望?・絶望?」
趣旨―家庭科の共学が目前に迫っています。これは長年の運動の成果が実を結んだもので喜ばしいことです。しかし現場で授業をする立場から「内容が生徒に届き、噛み合っているという実感が、どうにも持てない」という声が聞こえてきます。

共学の家庭科は、人間の生活や生き

方に迫るものですから、教科内容の研究だけでは限界があります。以前よりWeで取り上げていた学校や教育の構造はもとより、背後の文明を問うことをしなければ教師と生徒、授業と生徒が絡みあう姿が見えてこないのではないのでしょうか。

両者は、どのような関係をつくり得るのか、その上で、家庭科をどう展開したらよいのか。あるいは、たとえすぐれた実践でも歯が立たないように思

われる学校とは、何なのか。

このような切り口で、新しい家庭科の糸口を探りたいのです。ぜひご参加下さい。この読者会を、来夏のフォーラムに継続・発展させたいと考えています。

講師―Weの読者にとつて親しい方です。

田中裕一さん（Weに現在「荒野のバラ」を連載中）

佐々木賢さん（We'88年5月号インタビュー）をお招きします

とき―11月23日（祭）午後一時半～四時半（一時より受付）

ところ―せたがや女性センター「らぶらす」（小田急線・井の頭線 下北沢下車五分）北沢タウンホール11F・研修室3

参加費―500円

問合せ先

調布市富士見町一ノ九ノ二五
☎0424-86-5728 蔵本佳子（夜）



十字路



〈神奈川〉声届け48隻海から訴えー新空母、横須賀入港（朝日9/12）

空母インディペンデンス（満載排水量八〇、六四三トン）が米海軍横須賀基地に入港した十一日、反基地の市民団体や政党・労組のメンバーら計千七百人（県警調べ）が同基地でデモ行進をするなど抗議の声をぶつけた。雨の中、岸壁で行なわれた歓迎式典には、横山和夫市長が欠席するなど精彩を欠いた。冷戦構造が終ろうとする中での新空母配備。「東アジアの安定に不可欠」「時代錯誤」

——是非をめぐる論議は別れたままだが、地元横須賀市民はおおむね冷めた表情だった。

（青木昭美）

〈埼玉〉割り込みの少年グループ、51歳男性を「リンチ」（毎日9/2）

週末の帰宅客でにぎわう所沢市の西武新宿線新所沢駅東口タクシー乗り場で一日未明、列妻と一緒にタクシー待ちしていた男性が、列に割り込もうとした少年グループに注意したところ、妻の目前で殴るけるの暴行を受け、十四時間後に収容先の病院で死亡した。少年

四人が傷害致死の疑いで逮捕されたが、暴行の間、列に並んでいた客四、五人は助けようとして、姿を消したという。

関東大震災の朝鮮人犠牲者法要（朝日9/2）

大正十二年（一九二三）の関東大震災の際、「暴動が起きる」との流言飛語から日本人に惨殺された朝鮮人犠牲者を慰霊する法要が一日、熊谷市、本庄市、上里町の三カ所で行なわれ、遺族や住民などが参列してめい福を祈った。

熊谷市の法要は同市仏教協会（小久保隆呼会長）、同市日朝親善協会（石田貞会長）が主催して開いているもので今年で三十五回目。

石田会長はあいさつの中で、「日本人として恥ずべき行為だが、史実を風化させないためにもこれから目を背けずに慰霊法要を続け、平和のために尽くすのは私たち日本人の務めです」と述べた。

（長谷川宏）

〈千葉〉「河川ウォッチング」市川市民約八十人が参加（毎日8/29）

市川市内を流れる間真川、江戸川、国分川

の水質を調べる「河川ウォッチング」が、二十五日、市民約八十人が参加して行なわれた。「江戸川環境ネットワーク」主宰の平松南さんらの提唱で、各川の四地点で水を採取。酸性度やCOD（化学的酸素要求量）、アンモニア、亜硝酸などを試薬入りパックに吸い込ませて調べた。

調査団はこの日の結果を市に伝え、水質浄化を市民にむけてアピールしていくほか、上流の松戸、鎌ヶ谷市民にも「市民の手による水質調査」への参加を呼びかける。

「ごみ新聞」競うー減量作戦の推進へ（毎日8/24）

「資源にするか。ごみにするか。紙、一重」「ちょっとした気配りが快適な100万都市を築く」——苦心の見出しやコピーが躍る紙面。住民や事業所の協力なしではごみ減量は不可能と、ごみに悩む自治体が、「ごみ新聞」を競って発行、読者の心をつかむのに躍起になっている。

まず、松戸市の「ごみを減らす課」。昨年六月、その名もずばり「松戸ごみ減らし」というタブロイド判四ページ、三色刷りの新聞

をスタートさせた。松戸市と同様、清掃工場がバンク寸前の千葉市のごみ減量推進室も今年五月、「クリーンネットちば」(A4判、八ページ)を発刊した。こちらは見映えを重視し、オールカラーの創刊号は写真を多用したビジュアルなつくりで、市が展開している減量キャンペーンのPRや市民の減量作戦を取材した「ゴミゼロへひとこと」などを掲載している。このほか船橋市でも今年度中に全世帯配布の「ごみプレス」(仮称)発行を計画中。

(木田直子)

〈茨城〉中国残留婦人の「家」が完成(朝日8/18)

中国から里帰りする残留日本人婦人や永住帰国希望者を迎えるための「ふるさとの家」が、猿島郡三和町下片田に完成、帰国した残留婦人や家族が集まって十七日、落成式が行なわれた。民間のボランティア団体「春陽会」(会員一人、国友忠会長)などのカンパで出来上がった「望郷」の婦人たちの家だ。同会の事務局は国友会長宅(0280・76・0361)

(編集部)

〈福井〉小中教職員の原発研修、美浜事故に触れず(福井新聞8/27)

今年二月の関電美浜原発2号機細管破断事故をきっかけに、教職員組合などから出された「教職員に原発防災の研修を」という要求にこたえる形で県教委が二十六日開いた小、中学校の保健・安全教育担当教員研修会について、県高教組は同日、「研修の講義は、美浜原発事故には一切触れておらず、原発の安全性を強調する内容。児童・生徒の安全をあずかる教職員の事故に対する不安にこたえていない」などと反発、県教委に抗議を申し入れた。

(上山悦子)

〈京都〉知られざる「原爆展」掘り起こし—連合軍占領下京大生ら開催(朝日8/16)

原爆被害の報道や写真の公表も禁じられていた連合軍占領下の一九五一年に、京都大学同学会の学生たちが広島・長崎から生々しい被爆の写真や資料を持ち帰り、京都市内のデパートで「総合原爆展」を開いていた。

二百点を超える資料はその後、学生の帰郷運動とともに全国をめぐった。しかし、資料

は散逸し、記録もほとんど残っていない。あれから四十年。この運動を歴史にとどめようと、当時の関係者が資料の掘り起こし作業を始めた。

連絡先は京都市左京区七条御所ノ内西町、ぬくもりの里(075・321・0295)

文部省選定 アニメ映画のピラ、配った教師に「てん末書」(朝日8/20)

木津町立相楽小学校(大辻悦夫校長)の前で「木津町親子でよい映画を見る会」の主催する映画会の案内ピラを配っていた同校教師三人が、同町教委からてん末書の提出と事情聴取のための出頭を命じられたのは不当として、相楽郡教職組(柴垣治男委員長)は十九日、妨害を止めるよう町教委に申し入れた。

組合によると、三人は夏休み登校日の六日、始業時間前の八時から八時十五分の間に、同小の父母ら三人と、校門前で登校する児童らに、ピラを配った。ピラは十九、二十二、二十三の三日間、戦争の悲惨さなどを訴える文部省選定のアニメーション映画「うしろの正面だあれ」を、町内で上映する内容だった。

(塚崎美和子)

十字路

直し、学部の名称も変化に見合った包括的なものに改むべきだという結論になった」と言う。他の大学の家政学部にも影響を与えそうだ。(9.16日付 読売)

★バイクの「三ない校則」は合法

オートバイの「免許をとらない・買わない・乗らない」の「三ない運動」の校則に違反したとして、高校を自主退学処分になった千葉市の男性が、学校法人「鎌形学園」(千葉県印旛郡酒々井町)を相手どり、「校則は幸福追求の権利などを定めた憲法に違反し、それに基づく処分は違法」として、300万円の損害賠償を求めた訴訟の上告審で、最高裁第三小法廷(園部逸夫裁判長)は、同校の校則と処分を「不合理といえない」として原告の請求を退けた1、2審の判断を支持し、原告側の上告を棄却する判決を言い渡した。

最高裁判決はまず、「私立学校の校則は直接、憲法判断の対象にならない」としたうえで、校則で「三ない運動」を定めていることについて「社会通念上不合理とはいえない」として原審の判断は正当」と、最高裁が初の判決を下した。(9.4日付 朝日)

★教室の中の国際社会によりやく着手

日本語が十分に話せない日系人の子もたちが全国の学校で急増している。この対応は学校や自治体任せにされてきたが、文部省は近く、初めて全国の小、中学校で実態調査を行う。調査は①学校現場の指導方法 ②自治体の取り組み方 ③子どもの日本語能力、とくに在日期間と能力の相関関係の3点を中心。

文部省が今年5月、各都道府県教委を通じて調べた数は4366人。ところが、昨年の入官法改正以来、ブラジルなどからの日系人が急増し、現在15万人、うち18%が子ども連れと見られ(海外日系人協会調べ)、文部省も実数が調査を相当上回り、日本語を完全には理解しない子は2万人に近いとの推計もある。来年度には200人余の日本語指導教師の配置や教材配布も計画しており

ようやく本腰を入れて取り組むことになる。(9.8日付 朝日)

★在宅老人支援策を拡充

厚生省は高齢者の在宅福祉サービスの一層の充実を目標に、平成4年度予算要求に総額907億1600万円の「在宅老人対策費」を盛り込んだ。目玉の1つは市町村が行うデイサービスの「出前方式」の推進。地域の社会福祉協議会などを実施部隊の中核に据え、訪問サービスを強力に展開する。また家庭での介護が困難な痴ほう性老人について、専用の通所型デイサービスセンターの設置計画やホームヘルパーの増員や待遇改善などを盛り込む。(9.19日付 朝日)

★「遺伝子治療」を本格推進

厚生省は人間の遺伝子に手を加えて、病気を治す「遺伝子治療」を国としても本格的に推進する方針を固め、来月、専門家による検討会をスタートさせる。来春をめどに、具体的な研究計画の策定や遺伝子治療の対象となる疾患について検討する他、遺伝子治療を実施する際のガイドラインも作成する。これにより我国でも“21世紀の医療”といわれる遺伝子治療の臨床応用が現実の問題となってきたが、生命の本質である遺伝子の操作は新たな倫理問題も提起しており、検討会の審議の行方が注目される。(8.19日付 読売)

★「代理母」の情報サービス開始

米国の代理母あっせん会社の日本での情報センター「不妊情報サービス」(驚見ゆき代表)が都内に事務所を開設、相談の受付を始めた。米国では子どもを希望する夫婦の受精卵を使って代わりの女性が妊娠し出産する代理母は国内では日本産科婦人科学会の倫理規定で認められていない。驚見さんが相談をうけ、説明や書類の準備、通訳の手配などを行うが、代理母への謝礼など、1回につき約1千万円ぐらいかかるという。(9.14日付 朝日)

★女性の地方議員、2030人一過去最高

今回の統一地方選挙で、地方議会の女性議員数が過去最高の2030人になったことが市川房枝記念会（東京都渋谷区）の調査で分かった。総定数に占める割合も3.1%と4年前の調査時の2.1%を1ポイント上回っていた。都道府県別の議員総定数に占める女性の割合は、最も多いのが東京で12.2%、次いで大阪8.1%、神奈川7.9%などと首都圏や関西の大都市圏が上位にきて、逆に低いのは、秋田の0.8%、山梨の0.9%で、女性県議ゼロの県は、前回の19県から13県に減ったが、戦後1人もいない愛媛県では今回も誕生しなかった。（9.20日付 読売）

★差別撤廃条約の解説書

'79年に国連で採択された女子差別撤廃条約を批准した国は日本を含め世界で106カ国に達しているが、解説書を出すのは日本が初めて。この計画を進めているのは国際女性の地位協会（赤松良子会長）で、会員の法律専門家を中心とする約40人が分担し執筆する。全部で30の条文ごとに意義と内容他の人権条約との関係、国内法との関連など8項目にわたって詳しく解説する。他に条約そのものの意義や制定されるまでの過程、スウェーデンやイタリアなど諸外国の事情も加わえ、来年6月には刊行の予定。差別解消を求める訴訟に使うだけでなく、行政の施策などにも反映してもらおうのが狙い。（8.19日付 読売）

★言葉の上での差別撤廃

言葉の上での男女差をなくしたアメリカの英英辞典が日本でも反響を呼んでいる。この辞書はランダムハウス社の出版した『ランダムハウス・ウェブスターズ・カレッジ英英辞典』。「セールスマン」「フェアマン」など、語尾に男性の意味のある「マン」がつく単語の前後に、「セールスパerson」「フェアファイター」の新語を並べている。また、暗黙の内に男性を示しながら職業では必ず女性形も採用。「宇宙飛行士」を「space woman」,「女性パイロット」と

して「a viatress」を採用している。'80年代からアメリカでは言葉による性別規定の見直しが進んでいるのを反映しているが日本でもこの傾向は徐々に表れており、全日空は4年前、女性であることを示す「スチュワーデス」を男女差のない「キャビンアテンダント」に変更、「国際線に進出したのをきっかけに、世界的に通用している言葉を使うことにした」という。（9.6日付 読売）

★改姓はハンディ

結婚しても、旧姓のまま働く——女性の職場進出に伴い、改姓が営業など仕事のハンディになるため結婚後も夫の姓は名乗らずに元のままで働きたいという女性が増えてきている。民法では、結婚後の夫婦同姓が義務づけられているが、この「ワーキングネーム」の流行に、正式に旧姓使用を認める企業も登場し始めた。'88年から採用している富士ゼロックス（東京都港区）は、現在男女39人が旧姓を使用。同社人事部は「女性は今や企業の営業の顔になっている。結婚して名前を変え、ゼロから新しく人脈を作り直すことは無駄だ。女性が実力を発揮しやすい環境整備が急務だ」という。（8.31日付 朝日）

★「家政学部」を「生活科学部」へ

お茶の水女子大学（東京都文京区）は、同大の「家政学部」を「生活科学部」へ改組・改名する。改組案では、児童、食物、被服、家庭経営の4つに分かれている現在の学科を、生活環境と人間生活の2学科に再編成したうえで、それぞれを3つの大講座に区分し、1つの講座に複数の教授、助教がいて、さらに専門的な研究・教育を進める仕組みを考えている。

'50年の学部独立以来初めての改組を計画した同学部長の荒川信彦氏は「学部で4年前から慎重に検討を重ね、大学全体の合意を得たうえで案をまとめた。現在の生活実態に即した学問の再編成が必要。衣食住などこれまでの縦割りのな学科の区分を見

編集後記

◆「従軍慰安婦」問題は元慰安婦の女性が日本政府に補償を求めて提訴の段階にきて、法廷に持ち出されることになった。原告は六十代後半という。先日、この問題の学習会に出た。若い日韓国人の女性が発題者で、参加者四十人余りは殆ど女性。名乗らなければ国籍は分からない。過去を掘り起こし共有していく作業に、日韓の若い人たちが同じ卓で話し合った。(青木)

◆十年前、ロンドンにいた頃、小学校に入った娘の昼食は、給食、お弁当、帰宅して自宅、と三つの内から選べた。ユタヤ系、イスラム系と、宗教も民族も多彩だった地域。選択肢がいくつもあったことを、今でも懐しく思い出す。何につけてもいつも答えは

一つしかなくて、白か黒かはつきりさせよと迫られているような社会は誰だって息苦しいだろうと思う。(稲邑)

♣「うちの前の通りは『国際通り』っていうんだって、知ってた?」「そうよ、エスニック通り」ともいうそうよ。いつ頃からか、気が付いたら商店街の放送が日本語、英語(ま

では何と分かる)、他に何語だか分からない言葉が数か国語流れている。マンションに派遣されてくる清掃人も最近

は外国人ばかり。顔を合わせ

かけます。日本人の中に溶け込んで見えるように見えるけれど、言葉の違い、習慣の違いをどう解決しているのか、また私たちは、身近になればなるほど、どういうふうにつき合っていけばよいのか、これからの私たちへの課題ではないでしょうか。(渡辺)

★藤田進さんの『蘇るパレスチナ』(東京大学出版会)は、「新しい世界史」全12巻の中の一冊ですが、「語りはじめた難民たちの証言」と副題にあるように、レバノンのパレスチナ難民を軸に、彼らの祖国喪失から祖国回復闘争への足取りを、彼ら自身の証言で辿っています。民衆の固有名詞によつて歴史を表す試みが、もつとなされなければ、と思

いました★12月号のテーマは「地球再生へ向けて」です。ご期待下さい。(半田)

Weバックナンバー (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおそえの上、振替で直接ウイ書房へ)

- 90/7 「環境・資源」を見つめる (¥567)
- 90/8.9 消費者教育は、何を指す? (¥567)
- 90/夏増刊号 家庭科が変わる
—情報化のうねりの中で (¥721)
- 90/10 地域をよみがえらせる (¥567)
- 90/11 高齢化会社がやってくる (¥567)
- 90/12 マス・メディアは何処へ (¥567)
- 90/冬増刊号 出合いは歴史をつくる (¥721)

- 91/1 性役割の固定化は揺らいだか (¥567)
- 91/2.3 新しい家庭科を創る (¥567)
- 91/4 「教師」という仮面を脱ぐ (¥580)
- 91/5 少年・少女の現在 (¥580)
- 91/6 心からからだへ (¥580)
- 91/7 生と死を授業で (¥580)
- 91/8.9 ひとと生殖 (¥580)
- 91/10 買春者の構図 (¥580)

新しい家庭科—

Vol.10 No.8 1991年10月20日発行
定価580円(本体563円+税17円)送料共
年間購読料・定価7200円
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎・FAX03(3326)1380 郵便振替 東京6-59867
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292
印刷所/(有)岩佐印刷所〒112文京区春日1-6-7

ウイ書房が贈る最新刊

人間と教育を追求するあなたへ

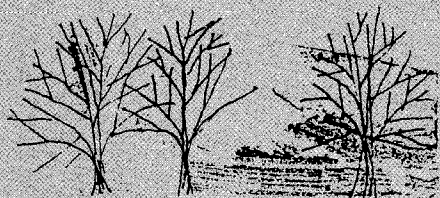
「We」創刊十年！ この歳月に、著者が
出会い、思い、考えてきたことの集大成
半田たつ子

目次

- I くらしの中で
- II 人とかかわりの中で
- III 女と男
- IV 教育をめぐる
- V 私、そして家族
- VI いのちを考える

木犀の
白うら
朝

定価 一八〇〇円
〒 二六〇円



好評既刊

「We」創刊一年の記念として

人間って
不思議
な視角

半田たつ子

人間は、人間を信ずる
ことができた時、人間
の美しさに酔う時、最
高の幸せを味わう。
家庭科にかけてきた著
者の、人間を見る一つ
の視角をここに

定価 一五四五円
〒 三一〇円

- 直接小社にご注文の場合は、書名、冊数および住所・氏名を明記の上、代金に送料を加えた金額をお送り下さい。
- 二冊以上の場合の送料は、実費をご請求いたします。
- 電話、はがきでお申し込みの際は、代金、送料を記入した振替用紙を同封いたしますので、到着次第お支払い下さい。

ウイ書房

〒182 調布市西つつじヶ丘2-25-14 ☎ 03・3326・1380 (振替・東京6 59867)